



2021.7
VOL.5

グローバル マネジメント

The Global Management of Nagano

【論文】

- 革新主義時代のローラ・インガルス・ワイルダー……………高野 弘子 1
スウェーデンボルグの「照応」の教義のエマソン、
鈴木大拙への影響……………高梨 良夫 19
A Comparison of the Online Version and Paper-based Version
of TOEIC L&R……………Jean-Pierre Joseph Richard 37
地方大学にみる地域人材育成のあり方
—地域創生の先駆的の大学と長野市地域の企業調査を中心に—
……………宮下 清 58

【資料】

- 国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鵲方』（函号三〇六一三〇七）
全文紹介……………二本松泰子 78
-



革新主義時代の ローラ・インガルス・ワイルダー

高野 弘子

要旨

革新主義時代の数十年間は、アメリカが急速に工業化したことで、農村人口が都市へと流れ、アメリカ社会が大きな変容を遂げた時代であった。そして、大衆的な支持を得て、様々な階層が、様々な意図を持って革新主義運動を繰り広げた。革新主義時代、ローラ・インガルス・ワイルダーは、30歳代から50歳代という働き盛りの年齢であった。夫アルマンゾと共に、農場を営む傍ら、ワイルダーは、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の家庭部門の編集長を務めた。当時の農業新聞は、革新主義運動家の考えを広める広報の役割を担っており、彼らから大きな影響を受けたワイルダーは、農村女性のためにクラブを創設したり、農民の経済的支援のために、マンスフィールド農場融資協会の秘書兼会計係を務めたりするなどの活動を展開していった。伝記、当時の農業新聞の置かれていた状況、ワイルダーの書いた農業新聞の記事、地域における様々な活動の分析及び先行研究から筆者は、ワイルダーが革新主義運動に取り組んだ革新主義者の一人であったと結論付ける。

〈キーワード〉 ローラ・インガルス・ワイルダー、革新主義時代、農業教育、
アメリカ児童文学

1 はじめに

革新主義時代 (Progressive Era, 1890-1920) は、20世紀初頭のアメリカ合衆国に現れた革新主義運動 (Progressive Movement) が高まった時代である。革新主義時代の数十年間は、アメリカが急速に工業化したことで、大企業の出現や都市人口の急増等の現象が生じ、かつての農業中心、農村中心、個人中心の社会から、工業中心、都市中心、組織中心の社会へと著しい変化を遂げた (有賀 187)。また、革新主義運動は、アメリカ社会が大きな変容を遂げた時代に、大衆的な支持を得て展開された。単一の革新主義運動というものではなく、様々な階層が、様々な政治の場で、様々な意図を持って推進した改革主義運動の総称であり、諸階層はそれぞれの立場から異なる関心を持って改革に参加した (有賀

194-95)。

革新主義時代、「小さな家」シリーズ (*Little House series*) の作者であるローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) は、夫アルマンゾ・ワイルダー (Almanzo Wilder, 1857-1949) と共に、ミズーリ州 (Missouri) オザーク (Ozarks) で農業を営んでいた。同時に、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』 (*Missouri Ruralist*) の記者として記事を書いたり、地域共同体に貢献したりするなど幅広く活動した。革新主義時代のワイルダーについて、ウィリアム・アンダーソン (William Anderson) とジョン・E・ミラー (John E. Miller) が伝記の中で、ジャーナリストとしてサンフランシスコ (San Francisco) で活躍していた娘のローズ・ワイルダー・レイン (Rose Wilder Lane, 1886-1968) からアドバイスを受けながら、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』や他の新聞に記事を投稿することにより、文筆家としての経験を積んだと述べている。また、アン・ロマインズ (Ann Romines) は、ワイルダーが20世紀初頭にミズーリ州家庭育成協会 (Missouri Home Development Association) 及び農村婦人の世界会議 (International Congress of Farm Women) のメンバーとして、マンズフィールド (Mansfield) やその近隣の農村の女性たちのために、クラブ活動を組織し、休憩室や教室を設立したことについて、これらの活動は農業における革新主義運動である農村生活運動の一環であったと述べている (Romanes 15-16)。キャロライン・フレイザー (Caroline Fraser) も、ワイルダーが秘書兼会計係 (secretary-treasurer) を担当したマンズフィールド農場融資協会 (Mansfield Farm Loan Association) の活動が、セオドア・ローズベルト大統領 (Theodore Roosevelt, 1858-1919) により設置された農村生活委員会 (Commission on Country Life) の推奨した農村の信用貸付事業の一環であったとしている (Fraser 239)。

本小論は、伝記、当時の農業新聞の置かれていた状況、ワイルダーの書いた農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記事、地域における様々な活動の分析を通して、ロマインズやフレイザーのワイルダーと農村生活運動との関わりの言及をさらに進めて、ワイルダーが農村生活の向上と農村教育に関心を持って革新主義運動に参加した革新主義者の一人であったことを示すことをその目的とする。

ワイルダーの『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の分析にあたっては、スティーブン・W・ハインズ (Stephen W. Hines) の『ローラ・インガルス・ワイルダー：農場ジャーナリスト』 (*Laura Ingalls Wilder: Farm Journalist*) に掲載されている記事を用いる。ハインズは、ミズーリ州立大学コロンビア校 (University of Missouri-Columbia) のエリス図書館 (Ellis Library) に保管されているワイルダーの『ミズーリ・ルーラリスト』の新聞記事を、同著に忠実に再現したと明記している。

2 農民としてのワイルダー

19世紀末のアメリカの農業は各地で、収穫量の不足と生産物価格の低迷に苦しんでいた (Danbom 37)。1885年にワイルダーは、ダコタテリトリー (Dakota Territory) でアル

マンゾと結婚するが、夫妻も度重なる悪天候、病気、重い負債などの様々な困難を経験した。農業が低迷する中、サウス・ダコタ州（South Dakota, 1889年にダコタテリトリーから改名）での農業に限界を感じたワイルダー夫妻は、娘のローズを連れて1890年にデスメット（De Smet）を離れる決心をする。最初一家は、ミネソタ州（Minnesota）スプリングフィールド（Springfield）で大きな農場を営んでいるアルマンゾの両親の家に同居し、農作業を手伝った。しかし、アルマンゾの健康には、より温暖な気候が望ましいと考え、1891年に南部のフロリダ州（Florida）に移住した。フロリダで、アルマンゾの健康は向上したが、今度はワイルダーが湿気のあるじめじめした環境で体調を崩してしまった。そこで、三人は再びサウス・ダコタ州デスメットに戻り、ワイルダーの両親の家の近くに家を借りた。ワイルダーはお針子の仕事を、アルマンゾは、大工仕事や店番などの不定期な仕事をし、娘のローズは学校へ通った。ワイルダーが週6日働いて少しずつ貯めたお金を資金にして、1894年、三人は農業を再開するため新天地を求め、熱い風の吹く、乾燥して埃っぽいサウス・ダコタ州を離れ、当時「大きな赤いリンゴの土地」（The Land of the Big Apple）と呼ばれていたミズーリ州へ向かった（Anderson, *A Biography* 129-151）。

旅の目的地であるミズーリ州オザークに到着したワイルダー一家は、購入する農地を懸命に探した。ワイルダーもアルマンゾも再び失望することが無いようにと、土地の選択には慎重だった（Miller 91）。二人は、1エーカー当たり10ドルで売られている40エーカーの土地を見つけ、そこに可能性を見出し、ワイルダーがお針子として貯めた100ドルを頭金にして購入した。ワイルダー夫妻は、この土地をロッキーリッジ（Rocky Ridge）と名付けた。そこには、前の土地所有者が建てた丸太小屋と、置き去りにした数百ものリンゴの苗木もあった（Anderson, *A Biography* 150-151）。

ワイルダー一家は、ロッキーリッジを豊かな農場にするために力を合わせた。ロッキーリッジで迎えた最初の冬は、自分たちの土地にある木々を大きなのこぎりの片方をアルマンゾが、もう片方をワイルダーが持って切り倒し、その材木を家のフェンスや納屋や鶏小屋のために保存したり、町へ行って売ったりした。春の植え付けの時期には、8歳のローズもトウモロコシを植えたり、家庭菜園の種蒔きや鶏小屋から卵を集めたりする手伝いをした。2回目の夏を迎える頃には、6エーカーの土地を18ドルで買い足し、牛と豚も飼うようになり、ロッキーリッジでの農業は徐々に軌道に乗っていった。さらに、アルマンゾとワイルダーは果樹園経営も学び、20エーカーのリンゴ園にモモやナシの木を加え、果樹の間にイチゴやラズベリーを植え、東屋を作りブドウも育てた。この他にも、燕麦や小麦も育てた。また、二人共ロッキーリッジの農・畜産業など農業全般に興味を持っていたが、それぞれに得意分野を決めた。ワイルダーは養鶏を選び、レグホーンという種類の鶏のために、清潔で風通しが良く、新鮮な水を提供できる鶏小屋を設計した。さらに、鶏一羽当たり1ドルの収入を得られるようにと目標を立てて飼育した。一方、アルマンゾは、ジャージー牛を選び、さらに買い足した40エーカーの土地で、良質の湧き水と放牧に依る自然農法で育てた（Anderson, *A Biography* 152-57, 175-76）。

アメリカ全体の農業も、20世紀に入り好景気を迎えた。木内・市橋は、1900年から1915年を農業の「黄金時代」、1915年から1918年までを「極楽時代」と呼び、この期間には、移民による人口の増加、鉱工業の繁栄による農産物消費の増大などにより、国内の需要が高まったと述べている。さらに、第一次世界大戦前にはヨーロッパ諸国が工業化を急いだために、また、戦中・戦後は大戦による農産物の生産減退を補うために、国外からの需要が増すことで農業ブームをもたらしたと説明している（木内・市橋 63-64）。したがって、ワイルダー夫妻のロッキーリッジ農場での農業が順調に進んだ背景には、革新主義時代にアメリカ農業が黄金時代を迎えたという要因があった。

その一方で都市化・工業化の進むアメリカの農村人口は、都市へと継続的に流れていた（Danbom 38）。1850年、都市人口は総人口の15.3%に過ぎなかったが、1900年、その値は39.7%と大幅に増え、1920年には都市人口が農村人口を凌駕した（小田 234）。しかし、20世紀初頭、多くのアメリカの指導者たちは、トーマス・ジェファーソン（Thomas Jefferson, 1743-1826）の農民国家こそが、アメリカの独立と自立と繁栄の美徳を実現できるという思想に共感していた（Jellison 2）。セオドア・ローズベルト大統領もその中の一人であり、ジェファーソンの農本主義（agrarianism）を心から信じていた（Conlogue 4）。農業に共感的理解を示すセオドア・ローズベルト大統領は、農村生活委員会を設置し、農村生活の問題についての調査を命じた。この委員会の設置を発端に始まったのが農村生活運動であり、多くのアメリカ人が農村の状況や農村問題について関心を持つようになった（Peters & Morgan 290, 292, 295）。

1908年にセオドア・ローズベルト大統領が設置した7人の委員によって構成される農村生活委員会は、調査の結果、農業よりもむしろ農村生活に問題点があると報告した。委員会は、農村における家庭生活、学校、教会等が、農村部の人々の満足の行く状況にはなく、したがって、農村から都市への人口の移動が起きているという認識を示した（Fry xxi）。この調査を基に農村生活運動家たちは2つの目的を掲げた。1つは、アメリカの農業を、農民に機械化や科学的農法を励ますことにより効率化すること、もう1つは、農村の教会、学校、医療施設、自発的組織、家庭生活などを向上させることを通して、農村社会を高めることであった（Jellison 4）。革新主義時代、農民であるワイルダーは、この農村生活運動の渦中にいたと考えられる。

3 農業新聞の記者としてのワイルダー

(1) 『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長ケースとワイルダー

ロッキーリッジ農場で、養鶏に力を注いでいたワイルダーは、地域でも有名な養鶏家となった。このため、時折養鶏に関して農業集会等でのスピーチを依頼されるようになった。ある時、予定していた集会での講演に行けなくなってしまったワイルダーは、スピーチ原稿を主催者に送り、それを代読してもらおうという方法をとった。その時、偶然その会場に居合わせたのが、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の後の編集長となるジョン・F・

ケース (John F. Case) であった。彼女の原稿に心を動かされたケースは、ワイルダーに『ミズーリ・ルーラリスト』への投稿を促し、1911年2月18日付の同新聞に、彼女の最初の記事となる「小規模農場の恩恵」(“Favors the Small Farm Home”)が掲載された。以降ワイルダーは、1911年から1924年の13年間に渡り、アルマンゾと共にロッキーリッジ農場で農業を営みながら、農業新聞の記者としても活躍することになる。特に、1919年からは「農場の家」(“The Farm Home”)というタイトルで、また、1921年からは「農場の女性としての考え」(“As A Farm Woman Thinks”)というタイトルで連載コラムを担当した (Hines, *Farm Journalist* 183-240, 253-312)。

ワイルダーが記者として記事を書いていた時代を含む1895年から1920年にかけて、農業新聞は発行部数を増やした。『ミズーリ・ルーラリスト』の場合、1905年に発行部数が5,000部であったのに対して、1910年には10,500部、1915年には54,991部、1920年には90,042部と大幅に増やしている (Fry 4-5)。農業新聞の購読数の増加は、農村経済の繁栄と、すべての農民、すべての農村の人々に農業新聞を届けたいという各新聞社の願いによるものが大きかった (Fry 9)。各農業新聞は、購読者を増やすために工夫を凝らし、たとえば、『ルーラリスト』は、1904年の冬に、新規購読者の購読料を通常半額の25セントにしたり、1906年には、3か月のお試し購読を10セントで提供したりした。さらに、3年間の予約購読で料金を割安にしたり、新規購読者及び継続購読者にポケットナイフ、種の入った袋、銀製のティースプーンなどをプレゼントしたり、プレミアムとしてウェブスターの辞書を提供するなどの工夫をした (Fry 10-11)。このようにして、編集長たちは、自分たちのメッセージをできる限り多くの農民に伝えることに最大の関心を向けた (Fry 18)。作物、養牛、養豚、養羊、養鶏、酪農業、園芸のそれぞれに関する部門を設け、さらに、農村女性の興味を引く家庭の部門も追加した (Fry 19)。ワイルダーが担当したコラムは、この家庭部門に該当する。

中西部の人々にとって、読むことは、19世紀末から人生においてなくてはならないものとなっていた (Fry 37)。人々は、地方新聞、農業新聞、全国向けの雑誌などを読み、また、小説、歴史、伝記、教科書、宗教書、農業書など様々な本も読んでいた。多くの農民は、1紙だけではなく複数の新聞を購読した (Fry 39-43)。農民が新聞を読む理由は大きく3つあった。1つ目は、地域で行われる活動や催し物などについて知って参加することにより、コミュニティの横のつながりを強めたり維持したりするための購読である。2つ目は、農作業のない12月から2月にかけて、家族が居間に集まり、一人が声を出して読むのを皆で聞くなど、自分自身と家族の娯楽のための購読である。3つ目は、農作業や、畑や、家庭についての様々な生活の上で役に立つ情報を得るための購読であった (Fry 53-37)。1910年代初頭、農務省は、農民がどのような情報源を用いているのか、また、どの情報が最も農業を行う上で役に立ったのかを調べたところ、農業新聞と答えた農民が最も多かったという結果が出ている (Fry 67-68)。ミズーリ州の農民も、半数以上が農業新聞を購読していた (Fry 71)。また、農業新聞は、農民だけではなく、農業大学の教授や学生たち

も購読しており (Fry 73)、革新主義時代は農業新聞が開花した時代でもあった。

ワイルダーが記者をしていた『ミズーリ・ルーラリスト』は新しい新聞社であり、1902年にマシュー・V・キャロル (Matthew V. Carroll) が『ルーラリスト』を設立したことに始まる。キャロルは、1902年から1910年まで編集長も努めた。1910年にアーサー・キャッパー (Arthur Capper) が『ルーラリスト』を買収し、名前を『ミズーリ・ルーラリスト』とした。1913年に、キャッパーに編集長として迎えられたケースは、その後1955年までの長期に渡り重責を担い続けた。ケースは、『ミズーリ・ルーラリスト』を月2回発行し、1年間の予約購読料を50セントとした。1920年にはヘンリー・ウォレス (Henry Wallace) による農業新聞である『ウォレスズ・ファーマー』 (*Wallaces Farmer*) の発行部数を上回るほどの発展を見せた (Fry 8-9)。編集者として優れた資質を持つケースにスカウトされたのがワイルダーであり、彼との出会いは、ワイルダーに大きな影響を与えたと考えられる。

ケースは、1876年に、ミネソタ州 (Minnesota) ライアン郡 (Lyon County) の農家に生まれた。数年後、ケース一家は、サウス・ダコタ州 (South Dakota) グラント郡 (Grant County) でホームステッドを手に入れるが、1888年には、ミズーリ州、アンドルー郡 (Andrew County) の農場に移住した。その後、成長したケースは印刷工としての仕事を皮切りに出版業に携わっていくことになる (Fry 33-34)。『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長に就任後の1915年、ケースは自らの農場を買い、読者に「農場を所有したことで、農場で暮らす皆さんをより近い距離に感じ、皆さんからの役に立つ手紙や提言をより興味を持って読むことができます」と記事の中で紹介している。1919年には、『ミズーリ・ルーラリスト』がセント・ルイス (Saint Louis) に編集室を設置したため、ケースの一家は、その50マイル西にあるライト市 (Wright City) 郊外の小さな農場に引っ越した (Fry 34)。自ら農場で生活することにより、農民の生活を理解し、農民の役に立つ農業新聞を編集したいという彼の意志と共に、農村生活への愛情によるものと考えられる。ワイルダーも、ミネソタ州やサウス・ダコタ州で開拓農民の子どもとして育ち、後にミズーリ州に移住しているため、ワイルダーとケースは同じ地域で類似した経験を多く持つと共に、農村生活に深い愛着を感じていることから、共感する部分が多かったと考えられる。

1918年2月、ケースは、『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の中で、ワイルダーについての紹介文を書いている。ケースは、ワイルダーが長い期間、記事を書くことに真摯に取り組んでおり、大事な『ミズーリ・ルーラリスト』のメンバーの一人であると述べている。ワイルダーが、農場で生まれ育ち、現在も夫と共に農場を営んでいること、記事を書いている女性の中で、彼女のように農民と農民の抱える問題を熟知している人はいないこと、農民に共感を持って記事を書いていることなどを紹介している。そして、ワイルダーは、農場を営む上で、あらゆる意味において、彼女の夫の良いパートナーであると述べている。また、マンスフィールドに農場融資協会ができた時、秘書兼会計係を務め、監査員の役人は、彼女の仕事ぶりを高く評価しているとし、彼女の友人の、「近隣で冬に誰も卵を鶏に

産ませることができない時に、ワイルダーは産ませることができる」という言葉を引用している。サウス・ダコタ州デスメットで結婚し、そこであらゆる種類の農作業や機械の取り扱いを学んだワイルダーは、農民としてのスキルとパイオニア精神を持ち合わせた人物であると紹介している。このように忙しいワイルダーが、記事を書く時間を持つことを不思議に思うかもしれないが、彼女は働くことが好きで、また、書くことは喜びだと答えたとしている。ワイルダーは、最初の記事以来、ミズーリ州の女性にコラムを通して話しかけ、インスピレーションや刺激を与え続けていると述べている。ワイルダーの記事を読めば、彼女は大学卒だろうと思うかもしれないが、高校に1年通っただけだということを知り驚くことだろうと述べている。しかし、彼女の生来の能力と、読書から得た知識と、人生経験からの学びは、彼女に必要な教育を提供したと述べている。そして、ワイルダーが農民のために良い記事を書けるのは、彼女が農民をよく知っており、心の底から、地域の向上を願っているからであり、地域の人々はワイルダーが確立した名声を誇りに思っていると書いている。そして、記者として、また、州のリーダーとして、彼女の能力は皆に評価されていると結んでいる (Hines 22-23)。自らも農民をよりよく知り、農民の役に立つ農業新聞となるようにと、農業も営むケースは、地域をよく知り、地域の向上に尽力する農民の記者であるワイルダーに、大きな尊敬と信頼を寄せていたと考えられる。一方、ワイルダーは、都市の改革主義者と直接接する機会の多いケースから、改革主義運動の動向について多くの情報を得ていたと考えられる。

(2) 農業新聞の記事を通しての農村女性への助言

農村生活委員会の報告書の発表後の1909年から1920年にかけて、農村生活運動家たちは、農村生活が向上するようにと活発に活動し、会合を開いたり、本を出版したりすると共に、農業新聞のジャーナリストたちに、彼らのメッセージを農民に届けるようにと協力を求めた (Fry xxi)。『ウォレスズ・ファーマー』の発行者であり編集長でもあったヘンリー・ウォレスは、ローズベルト大統領が設置した農村生活委員会の7人の委員の一人であると共に、報告書の作成に携わった。ウォレスに象徴されるように、農業新聞が、農村生活運動の直接的な影響を受けていたことは明らかである。『ウォレスズ・ファーマー』のみならず、他の農業新聞も、農村生活委員会の報告書にある助言を読者に紹介した (Fry 106)。一般に、農業新聞の編集者は、農場で育ち、その後大人になって農場を離れたという人物が多く、読者と経験や経済的状況を同じくしていた (Fry 35)。また、発行者と編集者は、大きな都市で仕事をしていたので、20世紀初頭の様々な改革主義運動の提案者たちと接触する機会を多く持った。したがって、農業新聞の発行者や編集者は、農民と都市の改革主義運動家たちの両方から影響を受けていた (Fry)。つまり、農業新聞は、農村の人々に農村生活運動家たちの考えを伝えるための、最も有力な方法であり、同時に、農村生活運動家たちの考えに対する農民の反応を提供する場所でもあった (Fry “Good Farming” 40)。

農村生活委員会は、「農村女性の救済は、農村生活の全体の向上を通してなされなけれ

ばならず、農村女性にはさらなる援助が必要である」(Report 105)という報告書を提出している。農村の妻たちが農村家族の土台であり、農村家族は農村社会の土台であることから、彼女たちの不満が懸念されていた。もし、農村女性が落胆し、農村の少女が農場の少年と結婚することをやめれば、アメリカの農業は崩壊の危機に直面すると考えられていた(Danbom, *Resisted Revolution* 62)。しかし、当時の農村生活は厳しい状況にあり、都市では便利な器具が普及しているのに対し、農村の女性は相変わらず、祖母の使っていた用具を使い、重労働を背負っていた(Danbom, *Resisted Revolution* 5-6)。そこで、農村生活運動家たちは、農村女性の労働を軽減するために、農村の人々が、セントラルヒーティングや、ミシン、冷蔵庫、オーブン、電気、水道のような家財を購入することや、農村女性がもっと能率よく掃除したり、家計簿をつけたり、料理を単純化したり、コミュニティでの洗濯に参加したりすることによって過酷な仕事を平易にすることを推奨した(Danbom, *Resisted Revolution* 62)。

この奨励を農村に届けるのに一役買ったのが農業新聞の家庭部門であった。農業新聞の家庭部門の編集者は、様々な角度から記事を書いているが、農村の女性の直面する問題点の大きく5点について、農村生活運動家たちからの提言に基づいて記事を掲載した。1つ目は、女性の家事労働を軽減するための機械の購入を夫に促すこと。2つ目は、女性に新しい家事の方法を紹介すること。3つ目は、女性が得意とする養鶏における成功例を紹介すること。4つ目は、農場の経営において妻は、夫にとって最良のパートナーであることを説くこと。5つ目は、女性に彼女たち自身で農場を所有し運営することを勧めること、という以上5点に関する記事であった(Fry 141)。ワイルダーの書いた『ミズーリ・ルーラリスト』の家庭部門の記事は、農村女性に向けて、これら5つの内容のすべてについて助言を与えている。

1点目の家事労働の軽減のための機械の購入についてワイルダーは、1913年6月28日付の記事で、農家の女性の仕事は、クリーム分離器、自家製缶詰め器、台所戸棚、パンやケーキ用の泡立て器、掃除機などを取り入れることで作業時間を大幅に節約することができることを説いている(Hines 22-26)。また、1916年4月20日の記事では、水を近くの川まで汲みに来る人々を見かけたことについて触れ、ワイルダー夫妻がいかに泉から台所やその他の場所に水を引いたかの具体的な例を紹介し、農村の人々が水汲みに大変な労力を費やすことへの改善方法を示している(Hines 66-68)。

2点目の家事の新しい方法についてワイルダーは、1916年3月20日の記事で、彼女が実際に行っていることをいくつか例示している。たとえば、パイやプリンや保存加工したものを作るのではなく、新鮮なフルーツはそのまま食べるのが健康的であり経済的であると述べ、彼女自身も、缶詰めにするのをやめたことを紹介している。また、もし家の一部が汚れた場合は、1年に1度の大掃除の時までほうっておくのではなく、すぐやってしまうことがいいし、窓ふきなども元気のある時に適宜やるのが良いと、過去の習慣にとらわれずに行うことを推奨している。さらに、欲しいものはリストを作り、無くてはならないも

のを選択すると、案外大きな出費にならないと述べている (Hines 58-62)。

3点目の養鶏については、ワイルダーは、1915年4月5日付の記事に鶏の餌に関わる内容を載せている。その中で、地域で有名な養鶏家であるワイルダーは、鶏の餌として何を与えるかは、鶏自身のためにもまた、卵のためにも非常に重要であると説いている。トウモロコシは、冬の間、鶏の体を保温するのに必要であるが、トウモロコシだけを与えるのでは、鶏を太らせるだけで、卵を得ることができないと述べている。そして、トウモロコシは高価であるので、ササゲやビートも与えるとよいとしている。また、ヒマワリの種を与えることで、卵の数を増やすことができると紹介している。さらに、家庭で余った野菜、例えばキャベツやカブなどは取っておいて与えると、生でも調理したものでも鶏は好んで食べると助言している (Hines 34-35)。

4点目については、1919年8月5日の記事で、農民とその妻の仕事について触れている。農民は、鍛冶屋であり、大工であり、道路建設者であり、土木技師であり、獣医でなければならぬ。そして、穀物を育て、土を適切に利用し、害虫と戦い、天候を克服しなければならない。さらに、優れたビジネスマンでもなければならない。一方、農民の妻は、農作業において頭と筋肉を必要な時に提供しなければならないと述べ、農場経営において妻は夫にとって最良のパートナーであると説明している (Hines 194-95)。

5点目の農場を女性が運営することについては、1914年6月20日の記事でダーネル夫人 (Mrs. Durnell) について紹介している。ダーネル夫人は、20年間夫と共にセント・ルイスで暮らし、三人の子どもを育てた。しかし、2番目の女の子と3番目の女の子が共に肺の病気になり、子どもたちの健康回復のために、オザークに連れてきた。健康が回復する兆しが見えたので、ダーネル夫人は小さな畑と家を、自分と老後の夫のために買い、婦人と娘たちは丸太小屋に引っ越し、農業を始めた。婦人は、試行錯誤で農業を始めたのだが、農業新聞や州立大学の研究所からの情報は、農業を営む上でよい援助となった。多くの男性がアルファルファを育てることに失敗した中、ダーネル夫人は成功した。家庭菜園は、最も多くの種類と量を育て、しかも最も少ない労力で済むように注意深く計画された。小さな農場ではすべてのものが、注意深く扱われ、無駄にされるものは何もなかった。見捨てられて荒れた土地に、ダーネル夫人は永住の家を作り、牛と鶏と果樹園と家庭菜園で必要なものをそろえることができた。そして、「子どもを育てるのに農場ほど良い場所はありません。農場は新鮮な空気、太陽の光、きれいな水、健康な食べ物、楽しい野外生活に溢れているからです」というダーネル夫人の言葉で記事を締めくくっている (Hines 30-34)。

以上のように、農業新聞が農村生活運動の広報の役割を果たしていたこと、ワイルダーの書いた記事が農村生活運動家たちが奨励していることと一致していること、革新主義時代において、中西部の編集長やジャーナリストの多くが、農村生活運動のリーダーであったことから (Jellison 2, 187)、ワイルダーは、農民と農民の抱える問題を熟知し、心の底から農村生活の向上を願いながら農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の記事を書いた農

村生活運動家の一人であったと認めることができる。

4 地域共同体のリーダーとしてのワイルダー

ワイルダーは、『ミズーリ・ルーラリスト』の記事を書く傍ら、地域の活性化のために2種類の活動も行っている。1つは、農村女性のためのクラブ活動の推進であり、もう1つは、マンスフィールド農場融資協会での秘書兼会計係の仕事であった (Anderson, *A Biography* 183-84)。

ワイルダーは、1916年、エラ・クレグ (Ella Craig) と共に、ギリシャの知恵の女神にちなんだアセニアンズクラブ (Athenians Club) を設立した (Fraser 242)。『ミズーリ・ルーラリスト』の1916年5月5日の記事の中で、アセニアンズが自己修養を目的に組織された女性のクラブであること、参加する女性は精神陶冶と見聞を広げるために、1年間の見通しを持った勉強会を開いて活動していること、町の女性と農村部の女性と一緒に参加していることを紹介している。そして、町の女性も農村部の女性も、文学を愛し様々な知識を広げたいと願っていることには違いが無いこと、職業や住んでいる所が違う人々と交流し、互いの意見を交換することは、それぞれの見識を広げる良い機会になることを説き、特に農村部の女性のクラブ活動への参加を促している (Hines 68-71)。また、ワイルダーはアセニアンズの他にも、マンスフィールドのジャスタミアクラブ (Justamere Club) の組織化も手伝った (Fraser 242)。

また、ワイルダーは、1917年から、自身の住むオザーク地区の農民のために組織されたマンスフィールド農場融資協会の秘書兼会計係として働き、近隣の農民たちが安い利子で資金が得られるように援助し、その正確な仕事ぶりは、ワシントンから訪れた監査員から高く評価された (Anderson, *A Biography* 185)。農場融資協会は、1908年にセオドア・ローズベルト大統領が設置した農村生活委員会の提言に由来する。ローズベルトの任期中には実現されなかったが、彼の後継者である、ウィリアム・ハワード・タフト (William Howard Taft, 1857-1930) とウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson, 1856-1924) が、委員会の主要な勧告の1つであった協同組合による農村金融システムを創設した。ウィルソンは、1916年に、農業金融法 (Federal Farm Loan Act) を制定し、地域を基本とした全国農場融資協会 (National Farm Loan Associations) の設立を認め、加入した農民には低金利で返済期間の長いローンを提供した。農民は、100ドルから1,000ドルまで借りることができた。何百もの協会ができ、マンスフィールドにも協会が設立された。ワイルダー夫妻の友人であるジェフ・クレグ (Jeff Craig) が、1917年の秋、他の農民とマンスフィールドに農場融資協会を設立すると、夫妻はそれに加わった。マンスフィールド・ミラー (Mansfield Mirror) 紙には、5.5%の金利の連邦政府ローンについての宣伝記事が、マンスフィールド農場融資協会の名前で掲載され、代表者の名前に、ジョン・W・ブレントリンガー (John W. Brentlinger)、そして秘書の欄にはワイルダーの名前が掲載されている (Fraser 239-240)。ブレントリンガーはミズーリ州立農科大学の指導によるマンス

フィールドにおける農業普及事業の委員会の委員長であり、農村生活運動の州の指導者であった。ブレントリンガーとワイルダーが直接的に強いつながりを持っていたことは、ワイルダーが農業普及事業、即ち、農村生活運動に深く関わっていたことを証明している。ブレントリンガー及びワイルダーの尽力により、マンスフィールド農場融資協会は、19人の会員が集まり、3万ドル以上の貸し付けが行われて軌道に乗った。ワイルダーは、1919年3月20日付の『ミズーリ・ルーラリスト』に「農場融資計画」(“Here’s the Farm Loan Plan”)というタイトルで記事を書き、農場融資協会を宣伝し、翌年には、何百ものローンの相談を受けている。通常の銀行の金利が8%であるのに対し、農場ローンの金利は5.5%であったので、1,000ドルを農場融資協会から借りると通常の銀行から借る場合と比べて、10年間で農民は335.73ドルを節約できることになる。農場融資協会は、地元の友人や隣人によって運営されていたので、信頼がおかれ、ワイルダーは公共の奉仕者として働いた (Fraser 241-242)。多忙にもかかわらずワイルダーがこの活動に取り組んだ背景には、アルマンゾとの結婚後、重い負債の返却に苦しんだ自らの経験から、安い金利によるローンで、農民の生活を助けたいという強い願いがあったと考えられる。

革新主義時代のワイルダーは、農作業、新聞記者の仕事、女性クラブの活動、農場融資協会の秘書兼会計係としての仕事を精力的にこなし、農村生活運動と深く関わった。革新主義時代に農村生活運動の広報の役割を担った農業新聞の家庭部門の編集長となったワイルダーは、地域共同体でその活動の幅を広げ、農村生活運動の指導者としての地位を確立していったと考えられる。

5 進歩主義教育とワイルダー

農村生活運動家たちは、農業を効率化させ、農村生活の質を向上させるためには、農村教育が不可欠であると考え、彼らの意見を反映する農業新聞は、農業教育を支援する記事や社説を書いた。『ウォレスズ・ファーマー』でウォレスは、農場の少年たちが理解すべき多くの価値ある事実と共に、農場生活への愛を公立学校で教え込むべきだと述べている。また、『ルーラリスト』も発刊初年度から、農村の学校における農業教育を推奨した (Fry 120)。農業新聞各紙は、農業教育に関する成功例を掲載すると共に、子どもたちが農作物や家畜の育成に携わるコンテストやフェアを催す支援もした。

『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長であるケースは、ミズーリ州ポーター (Porter) にある学校で、マリー・ターナー・ハーバー (Marie Turner Harvey, 1869-1952) が農業と家政の授業を発展させたことを記事で取り上げている。ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の娘のイーブリン・デューイ (Evelyn Dewey, 1889-1965) が、ハーバーの学校について本を書いたことにより、彼女の学校は全米の注目を集めていた (Fry 122)。このことは、農業新聞が農村生活運動と共に、教育に関する革新主義運動である進歩主義教育運動家の影響も大きく受けていたことを示している (Fry 122)。

ワイルダーも、1915年にサンフランシスコでジャーナリストとして活躍していた娘の

ローズの家に滞在し、当時開催されていたパナマ・太平洋万国博覧会（Panama-Pacific International Exposition）を見学した際、マリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870-1952）の授業を直接見ている。そして、『ミズーリ・ルーラリスト』の同年12月5日の記事に以下のように書いている。

教育方法への関心の増加や、ここ数年で急速に発達したチャイルド・トレーニングの仕組みが、教育パビリオンを博覧会の最も人気のある建物の1つにした。このパビリオンでは、学業や教育方法、及びニューヨーク州からフィリピン、中国、日本に至るまでの子どもたちの手工芸品が陳列されている。また、イタリアからモンテッソーリ女史が渡米し、このパビリオンの中で小さな子どもたちのための授業を行った。（Hines 45）

記事の中で紹介されているモンテッソーリは、新教育の流れをくむイタリアの医学博士であり教育者で、活動できる環境を整えれば、子どもたちは自らを教育する力を持っているという教育法を唱えた（Clifford 11）。1910年に出版された『モンテッソーリ教育法』（*The Montessori Method*）は、20の言語に翻訳され、アメリカにおいてもベストセラーとなった。1911年にモンテッソーリの教育法による最初の学校がニューヨーク州で開学され、以来1913年までに、この教育法による学校は、アメリカ国内で100を数えるようになった。ワイルダーが記事で述べている通り、1915年、モンテッソーリはアメリカを訪れ、パナマ・太平洋万国博覧会で、見学することのできるガラスで覆われた教室で、4か月間、21名の幼児を教えている（Clifford 12）。

また、農村女性への助言と共に、ワイルダーは教育に関わる記事を、『ミズーリ・ルーラリスト』に書いており、1916年4月5日の記事では、子どもの早期教育は、子どもの人生に驚くべき影響を与えると述べている。そして、ある聖職者が、子どもの早期教育がその生涯に与える大きな影響について、特に最初の7年間の重要性について説いていることに共感している。母親の影響がどんなに子どもにとって大きいかを示し、子どもの人格を形成することは、明日の男女を、さらに、国、世界を形成することにつながっていると述べ、家庭教育及び早期教育の重要性を指摘している。

1920年2月5日の記事では、私たちの生活はエキスパートのアドバイスによって支配されがちであるが、たとえ間違いを犯したとしても、自分たち自身の考えを持って行動することが大事であると述べている。そして、経験こそが最良の教師であり、私たちの人格を思考と経験とで開拓していくべきだと訴えている（Hines 213）。この表現は、伝統的教育と新教育との対比を表していると受け取れる内容であり、経験を重要視するデューイ（John Dewey, 1859-1952）の考え方と共通している。

以上の記事から、若い頃、農村で教員をしていた経験を持つワイルダーが、教育に対して高い関心を持ち、新教育を唱えるモンテッソーリやデューイらの教育者の考え方に共感、

あるいは影響を受けていることがうかがわれる。保田は欧米での新教育運動について「19世紀末から20世紀初頭にかけて、欧米では新教育運動と呼ばれる教育改革の運動が爆発した。ドイツでは改革教育学・アメリカでは進歩主義教育と呼ばれ、いずれも子どもの自由・自発性・自己活動・経験等に教育的意義を与える運動であった」(50-54)と説明している。

ワイルダーの教育に関わる記事の内容から、ワイルダーは、子どもの人格形成に重きを置く考え方をしており、進歩主義教育を支持する教育観を持っていたことがわかる。農民ジャーナリストとして農村生活運動に関わったワイルダーは、特に進歩主義教育者の中でも、自然学習による農村教育に取り組んだリバティ・ハイド・ベイリー (Liberty Hyde Bailey, 1858-1954) に近い教育観を持っていた(高野「ローラ・インガルス・ワイルダーと農村教育」)。ベイリーは、ウォレスと共に農村生活委員会のメンバーであり、その議長を務めた農村生活運動の中核を担った人物である。

ワイルダーは、1924年1月15日の記事で、ハートビル (Hartville) にある高校で開かれた品評会のことを詳細に記している。様々な品評会に参加した経験を持つワイルダーであるが、この品評会は極めて重要であると考えている。生徒同士の協力と競争は、子どもたちが国家の、そして世界の良い市民となることに役立つと述べている。この品評会は、子どもたちによって子どもたちのために開催されたと紹介している。具体的に、それぞれの高校の展示物について触れ、ニュー・マウンテン・デール (New Mountain Dale) 高校は、44種類の缶詰のフルーツを展示したこと、ロジャーズ・スクール (Rodgers School) は15種類の牧草と、78種類の天然木を展示したこと、ホール・スクール (Hall School) は18種類の森の木の葉を展示したこと、リトル・クリーク・スクール (Little Creek School) は27種類の森の木の葉と、21種類の穀物、22種類の種、14種類の昆虫、10種類の有毒な雑草、70種類の天然木を展示したこと、プレザント・ヒル・スクール (Pleasant Hill School) はカブ、カボチャ、ジャガイモ、メロン、穀物、牧草、雑草、ロープの結び方、農園地図、パッチワーク、鉢植え、37種類の缶詰のフルーツ、11種類のリンゴ、部屋いっぱいの鶏、一匹の子牛と、2つの豚小屋を展示したことなど、展示物を詳しく紹介している。そして、学校の授業の展示物や、健康、農業、養鶏、酪農に関する展示が強調された品評会であったと報告している。

ベイリーは、農産物品評会の理想的な在り方について、「私は、農産物品評会が、農村の人々にとって真の出会いの場所であることを望んでいる。特に、子どもたちに向けて特別な努力をはかりたいと思う。農産物品評会において、農業機械や家畜は大事けれども、最も大切なのは人間である。私は、農産物品評会を、1つの大きなピクニックであり集会の場であり野外研究日としたい。そして、農村生活の発展に関わる最も優れた要素を持ち寄る場としたい」(Country-Life 169)と述べている。ベイリーは、農産物品評会が、農民にとって自分たちの生活をより良いものにしていくための集いとなり、また、子どもたちにとって学びの場となることを望んでいた。ワイルダーが記事で紹介した品評会は、ベイリーが望んでいた教育的な農産物品評会であった。

ジョン・J・フライ (John J. Fry) は、農業新聞が農業の改革主義運動である農村生活運動と共に、教育の改革主義運動である進歩主義教育運動からも影響を受けていたと述べているが、改革主義運動家たちと直接会う機会を持った『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長ケースから、ワイルダーは進歩主義教育についても多くの情報を得ていたと考えられる。

6 おわりに

前にも述べたが、ロマインズとフレイザーは先行研究で、ワイルダーが、地域の農村女性たちのために、クラブ活動を組織し、休憩室や教室を設立したこと及び、マンスフィールド農場融資協会での活動が、農村生活運動と関わりがあることを言及している。本小論では、彼女たちの言及をさらに一歩進めて、ワイルダーが革新主義運動に参加した革新主義者の一人であったことを検証するために、伝記、当時の農業新聞の置かれていた状況、彼女が書いた農業新聞の記事、地域における様々な活動についての分析を行った。

伝記から、ワイルダー夫妻は、サウス・ダコタ州では、度重なる悪天候、病気、重い負債などの様々な困難を経験したこと、また、再起をかけた新天地ミズーリ州での農業は、土地の選択を始めとして、家庭菜園、果樹園経営、畜産業など、農業全般について学びながら慎重に営んだことを確認した。そして、ワイルダーの農業における喜びや苦しみを含み様々な実体験が、彼女に農民と農民の抱える問題を熟知し、農民に共感を持って新聞記事を書くことを可能にしたことに繋がっていることも確認した。

また、当時の農業新聞の置かれていた状況についての調査から、農村生活運動家たちは、農業新聞が、彼らの考えを農民に伝えるための最も有効な方法であると捉え、発行者や編集長に協力を求めていることが明確となった。そして、セオドア・ローズベルト大統領が設置した農村生活委員会は、農村女性の救済が必要であることを訴え様々な奨励をしたが、この奨励を農村に届けるのに一役買ったのが、農業新聞の家庭部門であったこともはっきりした。

ワイルダーの書いた農業新聞を具体的に分析すると、彼女の記事は、女性の家事労働を軽減するための機械の購入を夫に促すこと、女性に新しい家事の方法を紹介すること、女性が得意とする養鶏における成功例を紹介すること、農場の経営において妻は夫にとって最良のパートナーであることを説くこと、女性に彼女たち自身で農場を所有し運営することを勧めることという、農村生活運動家たちが提言する5つの内容をすべて網羅していることがわかった。さらに、彼女の記事の中には、モンテッソーリについて触れた記事や、デュレイやベイリーの思想に重なる記事があり、ワイルダーが教育における革新主義運動である進歩主義教育家の影響も受けていることがわかった。

また、農業新聞の家庭部門の編集長を務めながら、地域のクラブ活動に関わると共に、マンスフィールド農場融資協会での秘書兼会計係の仕事をしたことで、農業新聞を通じて革新主義運動家たちの考えを伝えることに留まるのではなく、コミュニティーで実際に行

動することによって活動の幅を広げたワイルダーは、農村生活運動の指導者としての地位を確立していったという、農業新聞と地域活動との関連性が見えてきた。彼女が革新主義者であると言及する先行研究は今までなかったが、これまでの分析から本小論は、ワイルダーが革新主義運動に取り組んだ革新主義者の一人であったと結論付ける。

参考文献

- Anderson, William. ed. *A Little House Sampler: A Collection of Early Stories and Reminiscences*. U of Nebraska P, 1988.
- . *Laura Ingalls Wilder: A Biography*. New York: HarperCollins, 1992.
- Azelvandre, John P. “Constructing Sympathy’s Forge: Empiricism, Ethics, and Environmental Education in the Thought of Liberty Hyde Bailey and John Dewey.” *Philosophy of Education*, 2001.
- Bailey, Liberty Hyde. *Cornell Nature-Study Leaflets*. Albany: J. B. Lyon, 1904.
- . *Ground-Levels in Democracy*. New York: Ithaca, 1916.
- . *Report of the Commission on Country Life*. Washington: Government Printing Office, 1909.
- . *Report of the Commission on Country Life*. New York: Macmillan, 1917.
- . “Some Aspects of the Country-life Movement.” *The North Carolina High School Bulletin*, vol. 5, no. 3, 1914.
- . *The Country-Life Movement in the United States*. New York: Macmillan, 1911.
- . *The Country-Life Movement in the United States*. New York: Macmillan, 1915.
- . *The Harvest*. New York: Macmillan, 1927.
- . *The Holy Earth*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1916.
- . *The Nature-Study Idea*. New York: Macmillan, 1909.
- . *The Outlook to Nature*. New York: Macmillan, 1915.
- . *The School-book of Farming: A Text for the Elementary Schools Homes and Clubs*. New York: Macmillan, 1920.
- . *The State and The Farmer*. University of Minnesota, 1996.
- . *The State and The Farmer*. New York: MacMillan, 1908.
- . *The Training of Farmers*. New York: Macmillan, 1909.
- . *What Is Democracy?* New York: The Comstock Publishing Co., 1918.
- Banks, Harlan P. “Liberty Hyde Bailey 1858-1954: A Biographical Memoir by Harlan P. Banks.” Washington D.C.: National Academy of Sciences, 1994.
- Bogue, Margaret Beattie. “Liberty Hyde Bailey, Jr. and the Bailey Family Farm.” *Agricultural History*, vol. 63, no. 1, 1989.
- Bowers, William L. “Country-Life Reform, 1900-1920: A Neglected Aspect of

- Progressive Era History.” *Agricultural History*, vol. 45, no. 3, 1971.
- Collins, Carolyn. Christina Eriksson. *The World of Little House*. New York: HarperCollins, 1996.
- Conlogue, William. “Managing the Farm, Educating the Farmer: *O Pioneers!* And the New Agriculture.” *Great Plains Quarterly*, vol. 21, no. 1, 2001.
- Connors, James J. “Liberty Hyde Bailey: Agricultural Educator and Philosopher.” *NACTA Journal*, vol. 56, no. 4, 2012.
- Danbom, David B. “Rural Education Reform and the Country Life Movement, 1900–1920.” *Agricultural History*, vol. 53, no. 2, 1979.
- . *The Resisted Revolution: Urban America and the Industrialization of Agriculture, 1900–1930*. The Iowa State University Press, 1979.
- Ellsworth, Clayton S. “Theodore Roosevelt’s Country Life Commission.” *Agricultural History*, vol. 34, no. 4, 1960.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*. Pierre: South Dakota Historical Society Press, 2017.
- Fry, John J. “Good Farming—Clear Thinking—Right Living.” *Agricultural History*, vol. 78, no. 1, 2004.
- . *The Farm Press, Reform, And Rural Change, 1895–1920*. New York: Routledge, 2005.
- Hines, Stephen W. *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist*. University of Missouri Press, 2007.
- . *Little House in the Ozarks: A Laura Ingalls Wilder Sampler The Rediscovered Writings*. Nashville, Tennessee: Tommy Nelson, 1991.
- . *“I Remember Laura” Laura Ingalls Wilder*. Nashville: Thomas Nelson, 1994.
- Jack, Zachary Michael. *Liberty Hyde Bailey: Essential Agrarian and Environmental Writings*. Cornell University Press, 2008.
- Jellison, Katherine. *Entitled to Power: Farm Women and Technology, 1913–1963*. Chapel Hill: U- of North Carolina Press, 2017.
- Larson, Olaf F. Thomas B. Jones. “The Unpublished Data from Roosevelt’s commission on Country Life.” *Agriculture History*, vol. 50, no. 4, 1976.
- Miller, John E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman behind the Legend*. Columbia, MO: U of Missouri Press, 1998.
- Peters, Scott J. “‘Every Farmer Should Be Awakened’: Liberty Hyde Bailey’s Vision of Agricultural Extension Work.” *Agricultural History*, vol. 80, no. 2, 2006.
- . Paul A. Morgan. “The Country Life Commission: Reconsidering a Milestone in American Agricultural History.” *Agricultural History*, vol. 78, no. 3, 2004.

- Romines, Ann. *Constructing the Little House: Gender, Culture, and Laura Ingalls Wilder*. Amherst: U of Massachusetts P, 1997.
- Tremmel, Robert. "Country Life and the Teaching of English." *Research in the Teaching of English*, vol. 29, no. 1, 1995.
- Wunderlich, Gene. "Two Essays on Country Life in 20th Century America." American Agricultural Economics Association, Denver, August 1-4, 2004.
- Wilder, Laura Ingalls. *The Frist Four Years*. 1971. New York: HarperCollins, 2004.
- . *West from Home: Letters of Laura Ingalls Wilder to Almanzo Wilder San Francisco 1915*. ed. MacBride, Roger lea. New York: Harper & Row, 1974.
- 赤坂雅裕「ペスタロッチからの警鐘」『文教大学国際学部紀要』第26号, 第1号, 2015.
- 有賀貞「アメリカ革新主義論」『国際基督教大学学報 IIB 社会科学ジャーナル』1965.
- 五十嵐敦子「パーカストとモンテッソーリー「自由」の原理を中心に一」『白鳳大学発達科学部論集』第2巻, 第1号, 2005.
- 井垣章二「遙かなるか児童の世紀」『同志社社会学研究』第2号, 1998.
- 上野正道「新歩主義期のカリキュラム改革における市民性教育の構想：アメリカ民主主義の問題を中心にして」『関西大学 教育科学セミナー』37巻, 2006.
- 宇佐美寛「L・H・ベイリの「自然学習」—アメリカ進歩主義教育運動の農本主義的側面—」『千葉大学教育学部研究紀要』(18), 1969.
- . 訳『自然学習の思想』明治図書出版, 1972.
- 大久保哲夫「ペスタロッチにおける政治と教育(2)—IdealismusからRealismusへ—」『島根大学論集 教育科学』12巻, 1963.
- . 「ペスタロッチの国民教育論—“An die Unschuld”を中心に—」『島根大学論集 教育科学』10巻, 1961.
- 岡本仁宏「アメリカ革新主義研究の展開と共和主義」関西学院大学紀要『法と政治』40, 1989.
- 小田隆裕他『辞典現代のアメリカ』東京：大修館書店, 2004.
- 川瀬八洲夫「新教育理論の形成と発展に関する研究—アメリカ進歩主義教育の形成—」『東京家政大学紀要』第13集, 1973.
- 木内信胤・市橋靖子『アメリカ農業の研究』東京：世界経済調査会, 1965.
- 黒澤英典「J・H・Pestalozziの『探求』の考察～新しいペスタロッチ像を求めて～」『武蔵大学人文学会雑誌』第42巻, 第2号, 2010.
- 佐々木保孝「L. H. ベイリーの農業拡張論」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第50号, 2001.
- . 「コーネル大学における農業拡張の組織化」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第52号, 2003.
- 佐々木豊「アメリカ都市コミュニティの再生—革新主義時代における「スクール・ソーシャ

- ル・センター」運動—『詩学』第61巻，第1・2号，1991.
- 杉浦宏「ジョン・デューイとアメリカ進歩主義教育運動」『教育哲学研究』第4巻，1961.
- 鈴木由美子「近代家庭教育論再考：—ペスタロッチー・フレーベル・モンテッソーリから何を読み取るか—」『人間教育の探求』第11号，1998.
- 高野弘子「ローラ・インガルス・ワイルダーと農村教育：『ルーラリスト』の記事とリバティ・ハイド・ベイリーの農村生活運動の思想を比較して」『高崎経済大学論集』第62巻，第3・4号合併号，2020.
- 。「農業という視点から見たローラ・インガルス・ワイルダーの人生とその作品」『Ferris Research Papers』vol. 6，2016.
- 中野和光「進歩主義教育時代の中等カリキュラムの性による分化に関する一考察」『福岡教育大学紀要』第45号，第4分冊，1996.
- 畠山望「アメリカ合衆国革新主義時代の女性社会運動史再考—ローカルな視点から」『白百合女子大学 言語・文学研究論集』第20巻，2020.
- 林瑞婉「革新主義時代の大量雑誌における改革の言説と社会教育：『レディーズ・ホーム・ジャーナル』とジェーン・アダムス」『同志社アメリカ研究』第40号，2004.
- 福田博子「ペスタロッチの『隠者の夕暮れ』における若干の考察」『八洲学園大学紀要』第8号，2012.
- 。「ペスタロッチの『クリストフとエルゼ』における教育論」『八洲学園大学紀要』1号，2005.
- 本田和子「児童の世紀」を振り返る—その二—『幼児の教育』第96巻，第7号，1997.
- 牧野俊重「アメリカのプロGRESSIV・ムーヴメントについて(1)」『敬愛大学経済文化研究所紀要』第13号，2008.
- 松田健人・原田拓夢「教育とエビデンス議論の構成要件解明のための教育思想史的研究：ペスタロッチとモンテッソーリの幼児教育思想に着目して」東京大学大学院教育学研究科付属学校教育高度化・効果検証センター，no. 31，2019.
- 宮本健市郎「アメリカ新歩主義教育運動における学校建築の機能転換：子ども中心の教育空間の試み(1)」『教育学論究』創刊号，2009.
- 室谷哲「19世紀末アメリカ農民運動再考—経済的要因をめぐる一試論—」『土地制度史学』23，1981.
- 森久佳「都市化・産業化に対応するデューイ・スクールの試み—帆門者の目から見た授業実践の特色—」『都市文化研究』4号，2004.
- 保田恵莉「幼児教育の追求とモンテッソーリ教育」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第22号，2014.

スウェーデンボルグの「照応」の教義の エマソン、鈴木大拙への影響

高梨 良夫

1 はじめに

これまで論者はR. W. エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の超越主義思想 (Transcendentalism) と鈴木大拙 (1870-66) の大乘仏教、特に禅思想との比較的考察を試み、両者の思想の類似点と相違点を指摘してきた。¹ またエマソンの思想をキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付ける試みの一環として、ドイツのキリスト教神秘主義の思想家ヤコブ・ベーメ (Jacob Böhme, 1575-1624) のエマソンに対する影響に関する考察も試みてきた。² 本稿においては、エマソンと鈴木は共に思想形成の過程において、スウェーデンのキリスト教神秘主義思想家スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772)³ の教義の影響を多分に受けているという事実に着目することにより、エマ

1 拙稿「エマソンと鈴木大拙—「エマソンの禅学論」に関する比較的考察—」『長野県短期大学紀要』第69号 (2014年)、79-90頁、「エマソンと鈴木大拙—『東洋的な見方』を中心とする比較的考察—」『長野県短期大学紀要』第70号 (2015年)、81-91頁、「Ralph Waldo Emerson and Daisetsu Suzuki: A Comparative Investigation on their Views of Nature, Mind, and Language,」*Thoreau in the 21st Century: Perspectives from Japan*, ed. Masaki Horiuchi (The Thoreau Society of Japan: Kinseido, 2017), pp. 246-60、「アメリカ超越主義と鈴木大拙—エマソンからソローへ—」『グローバルマネジメント』第2号 (2020年)、9-23頁。

2 拙稿「エマソンとヤコブ・ベーメ思想の類似性をめぐって—」『長野県短期大学紀要』第73号 (2018年)、33-43頁、「エマソンとヤコブ・ベーメ—コールリッジを媒介として—」『グローバルマネジメント』第3号 (2020年)、64-80頁。

3 スウェーデンボルグはスウェーデンの自然科学者・哲学者・宗教家。自然科学を学んだが、その応用についての工学に関心を抱き、鉱山局に勤めながら自然科学者として業績を残した。自然の根本を探求するなかで、科学の経験的認識の限界を超えた様々なビジョンを見始め、聖書の霊的な意味を霊の世界との交流の体験に基づいて明らかにするという使命を自覚し、後半生を宗教家として送った。霊や天使の体験に基づき天国と地獄、死後の世界について語り、啓蒙主義のヨーロッパに衝撃を与えた。また信奉者達によって「新エルサレム教会」が設立された。(『世界宗教大事典』、平凡社、1991年等を参照) スウェーデンボルグの思想については、高橋和夫『スウェーデンボルグの「天界と地獄」—神秘思想家の霊界世界を解き明かす—』(PHP、2008年)、『スウェーデンボルグの思想—科学から神秘世界へ—』(講談社現代新書、1995年) 参照。またスウェーデンボルグのエマソンに対する影響については注12、スウェーデンボルグの鈴木大拙に対する影響については注19を参照。本稿の独自性は、スウェーデンボルグのエマソンと鈴木に対する影響に関する比較的考察を試みることにあり、論者の知る限り先行研究はない。

ソンと鈴木思想に関する比較的考察、さらにエマソンの思想をキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付けようとする試みを続行する。

2 エマソンとスウェーデンボルグ

エマソンがスウェーデンボルグの「照応」の教義を学ぶ直接の契機となったのは、超越主義思想を本格的に展開し始めるよりもかなり以前の、ハーヴァード大学神学部大学院 (Divinity School) 在学中のことであった。1826年9月13日の兄ウィリアム (William Emerson, 1801-68) 宛の手紙には、スウェーデンボルグ主義者の薬剤師 Sampson Reed (1800-80) の『精神の成長に関する考察』 (*Observations on the Growth of the Mind*, 1826) というパンフレットを読んで強い感銘を覚えたという記述が見い出される。⁴ ボストンには1818年8月にスウェーデンボルグ教会 (The New Church) が設立され、1827年9月からは『ニュー・エルサレム・マガジン』 (*The New Jerusalem Magazine*) を発行し、スウェーデンボルグの思想の普及に努め、当時のニューイングランドの超越主義者達にも多大な影響を及ぼしていた。エマソンは1828年にはスウェーデンボルグの著作の英訳版『靈魂と身体の交流』 (*Intercourse between the Soul and the Body or Influx*) を直接購入して読んでおり、1837年までにはスウェーデンボルグの著作を数冊所蔵していた。また1835年1月6日には、ボストンのスウェーデンボルグ教会を実際に訪れ、儀式の簡素さに感心している。⁵

スウェーデンボルグから学んだ「照応」 (Correspondence) の思想が明確に示されているのは、1829年6月14日に試みた「夏」 (“Summer”) という題目の説教⁶ である。この説教は「天文学」 (“Astronomy”) と同様、7年後に出版される『自然論』 (*Nature*, 1836) の中心的主題を既に提出しており、『自然論』に直接つながってゆく内容を備えた興味深い説教と言える。エマソンはまず自然界の美しさと、自然美のなかで生きる人間の喜びについて語り、自然界は人間に神の遍在という教訓が書き記されている書物であると説いている。また自然は美の効用を持つだけでなく、人間や動物の命を養うという役割を果たしており、自然は神の慈愛の現れであるとも述べる。そして自然の存在している究極の目的は、人間を神と一体にさせることにあるとするエマソンの思想の最も根本的な教義

4 *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, eds. Ralph L. Rusk (vols. 1-6) and Eleanor M. Tilton (vols. 7-10), 10 vols. (New York: Columbia University Press, 1939-95), vol. 1, p. 173.

5 *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, eds. William H. Gilman, Ralph H. Orth et al., 16 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1960-82), vol. 5, p. 4; hereafter cited as *JMN*, with volume and page number.

6 *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*, eds. Albert J. von Frank et al., 4 vols. (Columbia: University of Missouri Press, 1989-92), vol. 1, Sermon No. 39, pp. 296-300; hereafter cited as *CS*, with volume and page number. エマソンの説教の題目については、Arthur C. McGiffert, Jr. が *Young Emerson Speaks: Unpublished Discourses on Many Subjects by Ralph Waldo Emerson* (Boston: Houghton Mifflin, 1938) の巻末に収録されている “A List of the Sermons” (pp. 263-71) において、エマソンが題目を付けていない説教全てに仮の題目を付けているので、それに従った。

が提示される。さらに「外的自然のなかには、人間のなかにある何らかの象徴や象形文字でないものは何もない」⁷と述べる。ここには自然は神の言葉を象徴的に人間に伝達する役割を果たしているという、エマソン独自の言語観の萌芽を既に見出すことが出来る。

1831年12月3日の日記には、「照応」の教義が、「魂と物体は調和している。それ故人間が魂を深く知れば知る程、それだけますます外界の自然に対する愛も強くなるのだ」⁸と記されている。また1832年5月7日の日記には、弟チャールズ（Charles Chauncy Emerson, 1808-36）が収集した貝殻を観察した時に、自然物が精神界を象徴していることを実感したという、「貝殻の入った一箱の飾り棚は、人間精神全体を表現しているのではないかと私は思う。全地球の植物や獣の歴史や、雲のあらゆる姿を描いた絵についても同様のことが言えるだろう。全てのものは象徴的な意味を持っているのだ」⁹という記述がある。さらに1832年5月27日に試みた説教「天文学」においては、天文学と宗教との関係を指摘し、人間は天体を観察、研究することを通じて、神に関する正しい知識を持つに至ると、次のように説いている。

目と光を創り、地球を透明な大気で包んだ神は、このようにしてその被造物である人間に、星を観察して星の法則を書き記すことを教えました。このようにして、神は天を開き、宗教を改革し、精神を教育するようにしたのです。自然の温和な、愛情深い、しかもぞくぞくさせる声により、神は人間をより高い真理へと導き、人間が能力をあげて研究すれば、神自身についてのますます正しい知識を与えることで報いるのです。¹⁰

以上からエマソンの内面には、1832年10月のボストンのユニテリアン教会の牧師職辞任以前に、「照応」の思想が形成されていたという事実を理解することが出来る。こうした「照応」の思想の形成過程は、ヨーロッパ旅行中のパリの動植物園での体験に直接的に結び付いてゆくのである。エマソンは、1833年7月13日にパリの動植物園で、自然界と人間精神との「照応」に関する啓示を得、神秘的な体験を持ったという以下の記述を日記に記して

7 Ibid., 299: "There is nothing in external nature but an emblem, a hieroglyphic of some thing in us."

8 *JMN*, 3:310: "The soul and the body of things are harmonized, therefore, the deeper one knoweth the soul, the more intense is the love of outward nature in him."

9 Ibid., 4:14: "I suppose an entire cabinet of shells would be an expression of the whole human mind; a Flora of the whole globe would be so likewise; or a history of beasts; or a painting of all the aspects of the clouds. Every thing is significant."

10 CS, 4:158, Sermon No. 157: "He who made the eye and the light and clothed the globe with its transparent atmosphere did thereby teach his creature to observe the stars and write their laws. Thereby he opened the heavens to them to reform their religion and to educate the mind. By the mild, affectionate yet thrilling voice of nature he evermore leads them to a higher truth, and rewards every exertion of their faculties by more just knowledge of Himself." 斎藤光訳『自然について』「エマソン選集」第1巻（日本教文社、1960年）、12頁を参考にした。また以下の本論中のエマソンのエッセイ、日記、講演、説教からの引用文の訳出に際しては、斎藤光・他訳『エマソン選集』全7巻（日本教文社、1960-61年）、酒本雅之訳『エマソン論文集』上・下巻（岩波文庫、1972-73年）を参考にした。

いる。

ここでは我々は、自然の尽きることのない豊かさに感銘を受ける。当惑するくらい次々と続いている生物の姿の系列を見ていると、宇宙はこれまでによりも驚くべき謎であると思われてくる——ほのかな色合いの蝶、彫刻を施したような貝殻、鳥、獣、魚、昆虫、蛇——そして有機体を模している岩石に交じって、上昇しようとする生命の萌芽が至る所に認められる。どんなに奇怪で、野蛮で、あるいは美しい形の生物でも、それを観察している人間に本来備わっている属性を表現していないものはない——まさにそこにいるさそりと人間との間に神秘的な関係がある。私は自分の内部に、百足を——大ワニ、鯉、鷲、狐を感ずる。私は不思議な共感に動かされる。私はいつも言っているのだ——「自分は博物学者になろう」と。¹¹

以上スウェーデンボルグの「照応」のエマソンの思想形成に対する影響を指摘し、エマソン自身が人間精神と自然との間の「照応」関係を体験したという具体的例を挙げてきた。¹² 「照応」の教義は、『自然論』及び講演「アメリカの学者」(“The American Scholar,” 1837)に結実しており、次のように記されている。

世界は象徴として存在しています。語られる言葉の部分部分が隠喩なのです。自然全体が人間精神の隠喩だからです。精神の本性を支配する法則は、さながら鏡のなかで対面するように、物質の法則に符合しています。¹³

自然が魂の対極であり、どの部分をくらべてみても、きちんと魂に合致していることが分かるようになります。一方が印形いんぎょうで、もう一方は押印の跡です。自然の美しさは、人間自身の精神の美

11 *JMN*, 4:199-200: “Here we are impressed with the inexhaustible riches of nature. The Universe is a more amazing puzzle than ever as you glance along this bewildering series of animated forms, — the hazy butterflies, the carved shells, the birds, beasts, fishes, insects, snakes, — and the upheaving principle of life everywhere incipient in the very rock aping organized forms. Not a form so grotesque, so savage, nor so beautiful but is an expression of some property inherent in man the observer, — an occult relation between the very scorpions and man. I feel the centipede in me — cayman, carp, eagle, and fox. I am moved by strange sympathies, I say continually, “I will be a naturalist.”

12 エマソンとスウェーデンボルグ及びエマソンの照応論については、Kenneth W. Cameron, *Emerson the Essayist: An Outline of His Philosophical Development Through 1836, with Special Emphasis on the Sources and Interpretation of Nature*, 2 vols. (Hartford, Conn.: Transcendental Books, 1945), vol. 1, pp. 228-52; Yoshio Takanashi, *Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (New York: Palgrave Macmillan, 2014), pp. 91-94; 拙書『エマソンの思想の形成と展開—朱子の教義との比較的考察—』(金星堂、2011年)、126-31頁; Clarence Hotson, “Emerson and the Swedenborgians,” *Studies in Philology*, vol. 27 (1930), pp. 517-45参照。

13 *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, eds. Alfred R. Ferguson, Joseph Slater, Douglas E. Wilson et al., 10 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971-2013), vol. 1, p. 21, *Nature*; hereafter cited as *CW*, with volume and page number: “The world is emblematic. Parts of speech are metaphors because the whole of nature is a metaphor of the human mind. The laws of moral nature answer to those of matter as face to face in a glass.”

しさです。自然の法則は、人間自身の精神の法則です。すると自然は人間にとって自分の力量を量る尺度となります。自然のなかで知らないところがあれば、それだけ人間は自分自身の精神を自分のものにしていないこととなります。そして、結局、「汝自らを知れ」という古代の教えと、「自然を研究せよ」という近代の教えとは、同一の金言となってしまいます。¹⁴

さらにエマソンは「アメリカの学者」において、「このような人生哲学のために大きな貢献をしながら、かつて一度もその著作に正当な評価を与えられたことのない天才が一人います。一つまリエマニュエル・スウェーデンボルグです。…しかし彼は自然と魂の情感との間の連関を理解して、人々に教えました。目に見え、耳に聞こえ、手で触れることの出来る世界の象徴的な、つまり霊的な性質を洞察しました」¹⁵と記し、自らの「照応」の教義はスウェーデンボルグの影響を受けていることと告白している。またエマソンは連続講演「代表的人物」の一環として、1845年12月25日に「神秘に生きる人—スウェーデンボルグ」(“Swedenborg, or the Mystic”)を試み、さらに1849年12月には『代表的人物』(*The Representative Men*)を出版し、第二章でスウェーデンボルグを取り上げている。¹⁶

3 鈴木大拙とスウェーデンボルグ

鈴木大拙は1897年2月に渡米し、イリノイ州シカゴ郊外ラサールのオープン・コート社でポール・ケーラス(Paul Carus, 1852-1919)のもとに1908年2月までの11年間滞在した。その間1901年と1903年にオープン・コート社を訪れ、滞在していたスウェーデンボルグ主義者で仏教研究家のA・J・エドマンズ(Albert Joseph Edmunds, 1857-1941)と知り合ったことが、スウェーデンボルグの思想に関心を持つようになった契機と言われている。鈴木は1908年2月にはロンドンで開催された国際スウェーデンボルグ協会年次大会に招かれ、スウェーデンボルグの著作の邦訳を依頼された。1909年3月に帰国後は、『天界と地獄』(1910年)、『神智と神愛』(1914年)、『新エルサレムとその教説』(1914年)、『神慮論』(1915年)を邦訳・出版している。¹⁷ また1912年には再びイギリスに渡り、スウェーデンボルグ

14 *CW*, 1:55: “The American Scholar”: “He shall see that nature is the opposite of the soul, answering to it part for part. One is seal, and one is print. Its beauty is the beauty of his own mind. Its laws are laws of his own mind. Nature then becomes to him the measure of his attainments. So much of nature as he is ignorant of, so much of his mind does he not yet possess. And, in fine, the ancient precept, Know thyself,” and the modern precept, “Study nature,” become at last one maxim.”

15 *Ibid.*, p. 68.: “There is one man of genius who has done much for this philosophy of life, whose literary value has never yet been rightly estimated; — I mean Emanuel Swedenborg, ... But he saw and showed the connexion between nature and the affections of the soul. He pierced the emblematic or spiritual character of the visible, audible, tangible world.”

16 *CW*, 4:51-81.

17 スウェーデンボルグの原典はラテン語で執筆されている。『天界と地獄』はロンドンのスウェーデンボルグ協会発行の英訳版 *Heaven and Its Wonders and Hell*、『神智と神愛』は *Divine Wisdom and Love*、『新エルサレムとその教説』は *The New Jerusalem and Its Heavenly Doctrine*、『神慮論』は *Divine Providence* からの邦訳である。

協会年次大会で日本におけるスウェーデンボルグについて講演を行った。¹⁸ さらに1913年には評伝『スエデンボルグ』を出版し、10年間程にわたるスウェーデンボルグに対する共感と傾倒は並々ならぬものであり、そのキリスト教神秘主義思想の多大な影響下にあったことを明らかに示している。¹⁹ 鈴木は日本にスウェーデンボルグの教説を本格的に紹介した最初の日本人であろう。²⁰

鈴木が渡米し、ケーラスのオープン・コート社で雑誌編集・東洋思想の英訳の補助の仕事をするようになったのは、鎌倉の円覚寺管長で鈴木の禅の師 釈宗演（1859-1919）が、1893年にシカゴで開催された万国宗教会議に出席し、ケーラスの知遇を得たことが契機となっている。²¹ ケーラスはドイツ系アメリカ人で、科学と宗教との一体化を提唱する雑誌 *Open Court* の編集に携わり、また *Monist* を創刊し、*The Gospel of Buddha* (1894)²² などの著者でもあった。また鈴木はオープン・コート社滞在中に *Lao-Tze's Tao-Teh King* (1898)、*Açvaghosha's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana* (1900)、*Outlines of Māhāyana Buddhism* (1907) を出版している。²³ 鈴木の老荘思想及び大乘仏教関連文献の英訳、執筆、出版が、スウェーデンボルグに傾倒した時期と重なっていることに注目すべきであろう。以上のように、鈴木がスウェーデンボルグの思想に興味を示したのは、評伝『スエデンボルグ』に以下のように記されているように、大乘仏教の教義との類似性を強烈に意識したからであった。²⁴

スエデンボルグが神学上の所説は大に仏教に似たり。^{プロブリアム} 我を捨てて神性の動くままに進退すべきことを説くところ、真の救済は信と行との融和一致にあること、神性は^{ウイズダム} 智と^{ラブ} 愛との化現なること、而して愛は智よりも高くして深きこと、^{デイヴァイン・プロヴァイデンス} 神慮はすべての上に行き渉りて細大漏ら

18 吉永進一「大拙とスウェーデンボルグーその歴史的背景ー」『宗教哲学研究』第11号（2012年）、39-41頁に鈴木の英語講演の和訳が掲載されている。

19 スウェーデンボルグの鈴木への影響については、同上、33-50頁、吉永「学問・経験・スウェーデンボルグ」『現代思想』第48巻、第15号（青土社、2020年）、188-90頁、Shi'ichi Yohinaga, "Suzuki Daisetsu and Swedenborg: A Historical Background," *Modern Buddhism in Japan* (Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014), pp. 112-43、那須理香『鈴木大拙の「日本的靈性」ーエマヌエル・スウェーデンボルグ、新井奥遼との対比からー』（春風社、2017年）、143-264頁、安藤礼二『大拙ー東洋と西洋をつなぐー』（講談社、2018年）、92-128頁、蓮沼直應『鈴木大拙ーその思想構造』（春秋社、2020年）、117-24頁などを参照。

20 『天界と地獄』は『鈴木大拙全集』第23巻、149-556頁、『スエデンボルグ』は第24巻、1-67頁、『新エルサレムとその教説』は69-153頁、『神慮論』は155-576頁、『神智と神愛』は第25巻、1-274頁に収録されている。

21 鈴木は万国宗教会議での釈宗演の演説草稿を英訳している。

22 鈴木は渡米前の1895年に既に『仏陀の福音』として邦訳、出版している。『仏陀の福音』は『鈴木大拙全集』第25巻、275-509頁。同じくケーラス著 *Amitābha: A Story of Buddhist Theology* も『阿弥陀仏』として511-87頁に収録されている。

23 *Lao-Tze's Tao-Teh King* (1898) は『老子道德経』の英訳でケーラスとの共訳、*Açvaghosha's Discourse on the Awakening of Faith in the Mahayana* (1900) は馬鳴（めみょう）『大乘起信論』の英訳、*Outlines of Māhāyana Buddhism* (1907) は、鈴木が再版を嫌い、ようやく2016年になって佐々木閑訳『大乘仏教概論』（岩波文庫）が出版された。その経緯については、同書「訳者後記」参照。

24 吉永「大拙とスウェーデンボルグ」、34-37頁によると、明治20年代の日本の仏教界においては、アメリカで仏教雑誌 *Buddhist Ray* を発行していた Philangi Dasa (1849-94) の影響を受けて、スウェーデンボルグは仏教と結びつけて考えられていた。

すことなきこと、世の中には偶然の事物と云うもの一点も是れあることなく、筆の一運びにも深く神慮の籠れるありて、此處に神智と神愛の発現を認め得ること、此の如きは何れも、宗教学者、殊に仏教徒の一方ならぬ興味を惹き起すべきところならん。²⁵

4 エマソンの超越主義思想と鈴木の大乗仏教の教義の比較的考察

4-1 神との「合一」体験と「見性」体験

エマソンは、自らの内部に「内なる神」を発見した驚きと神との直接的な「合一」体験を、極めて率直に日記、説教で以下のように語っている。

道徳的人格から宗教的人格への回心は黎明の後の昼間のようなものである。地球が回転するにつれてますます明るく照らされ、そして最後には、目が太陽を見る、すなわち魂が神を感知する特別な瞬間が到来する。²⁶ (1830年6月2日の日記)

熟考するということは、媒介を経ずに直接神から真理を受け取ることだ。それこそ生きた信仰である。… この信仰は、自分が無（nothing）であることを感じている人間にだけおとずれてくる。神が君に語りかけるのは、使節の力を借りずに、君自身を通してなのだ。²⁷ (1831年7月29日の日記)

宗教思想の革命が我々の周囲に影響を及ぼしつつあります。それは今までに起こったあらゆる革命のなかでもっとも重大なものに私には思われます。すなわちそれは全世界から個人を引き離し、今初めてその大きさにつくづく見入っている人間固有の本性を満足させるような信仰を、個人が持つように求めています。… 人は、天地を満たす声が、神は人のなかにおり、天使が群れをなしている、と言っているのを聞き始めているのです。私は自分が神とつながっているという驚くべき啓示が、自分をふさぎ込ませてきたあらゆる疑念を解消するものであることに気づいたのです。²⁸ (1833年10月27日の説教)

25 『鈴木大拙全集』第24巻、8頁。

26 *JMN*, 3:186, June 2, 1830: "Conversion from a moral to a religious character is like day after twilight. The orb of the earth is lighted brighter and brighter as it turns until at last there is a particular moment when the eye sees the sun and so when the soul perceives God."

27 *Ibid.*, 279, July 29, 1831: "To reflect is to receive truth immediately from God without any medium. That is living faith. ... It will come only to one who feels that he is nothing. It is by yourself without ambassador that God speaks to you."

28 *CS*, 4:215, Oct. 27, 1833, Sermon No. 165: "There is a revolution of religious opinion taking effect around us, as it seems to me the greatest of all revolutions which have ever occurred, that, namely, which has separated the individual from the whole world and made him demand a faith satisfactory to his own proper nature, ... Man begins to hear a voice in reply that fills the heavens and the earth, saying, that God is within him, that there is the celestial host. I find that this amazing revelation of my immediate relation to God, is a solution to all the doubts that oppressed me."

一方鈴木は自らの「見性」体験を、西田幾多郎（1870-1945）に宛てた1902年9月23日の書簡に、以下のように記している。

之に就き思ひ起すは、予の嘗て鎌倉に在りし時、一夜期定の坐禅を了へ、禅堂を下り、月明に乗じて樹立の中を過ぎ帰源院の庵居に帰らんとして山門近く下り来るとき、忽然として自らをわする、否、全く忘れたるにはあらざりしが如し、されど月のあかきに樹影参差して地に印せるの状、宛然画の如く、自ら其画中の人となりて、樹と吾との間に何の区別もなく、樹は吾れ、吾れはれ樹、本来の面目、歴然たる思ありき、やがて庵に帰りて後も胸中稔然として少しも凝滞なく、何となく歓喜の情に充つ、当時の心状今一々言詮し難し。²⁹

鈴木は、座禅を終えた夜、月光に照らされた木立のなかを帰る途中、「無我」の境地に達し、樹木と自己との間の区別が消え失せ、一体となった心の喜びを記している。

以上エマソンと鈴木のみ秘体験に関する記述を示した。二人に共通するのは、超越主義思想及び大乘仏教の教義を概念的に構成、展開しているだけでなく、その根底には、エマソンの場合は、神との「合一」体験、さらに自然と人間との間の神秘的な「照応」関係を洞察した体験、鈴木の場合は、禅修行を通じての「見性」体験があったという事実である。両者は異なった宗教文化圏に属しながらも、「自己」を超えた超越的な世界との神秘的体験を持ったという点において共通している。³⁰

4-2 「照応」と「相応」

エマソンと鈴木が読んだスウェーデンボルグの英訳書 *Heaven and its Wonders and Hell* においては、霊的世界と自然界との関係について、“The whole natural world corresponds to the spiritual world, and not merely the natural world in general, but also every particular of it; and as a consequence everything in the natural world that springs from the spiritual world is called a correspondent.”³¹ と記されている。鈴木はこの箇所を、「全自然界は、之れを総体の上より見ても、分体の上より見ても、悉く霊界と相応あり、故に何事たりとも、自然界にありて、其存在の源泉を霊界に取るものは、之れを名づけてその相応者と云ふ」³² と訳している。それに対してエマソンの『自然論』の

29 『鈴木大拙全集』増補新版、第36巻（岩波書店、2003年）、222頁。

30 両思想家の体験は、ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）が『宗教的体験の諸相』（*The Varieties of Religious Experience*, 1902）において神秘的な宗教体験の特徴を示した、「言い表わしようがないこと」（ineffability）、「認識的性質」（noetic quality）、「暫時性」（transiency）、「受動性」（passivity）の全てに該当している。ウィリアム・ジェイムズ著、榊田啓三郎訳『宗教的体験の諸相（下）』（岩波文庫、1970年）、183-85頁；William James, *The Varieties of Religious Experience* (NY: Mineola, Dover Publications, 2002), pp. 380-81.

31 Swedenborg, *Heaven and Its Wonders and Hell*, trans. John C. Ager (West Chester, Penn.: Swedenborg Foundation, 2009), ch. 12, no. 89, p. 73; hereafter cited as *Heaven and Hell*.

32 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、201頁。

訳者酒本雅之は“Every appearance in nature corresponds to some state of the mind.”³³を「自然のなかに見られる姿はすべて精神の何かの状態に照応している」と訳し、“correspond”に「照応」の訳語を用いている。論者は鈴木「相応」は“correspondence”の訳語としては不適切と考える。「照応」は、二つの異なるものの間に内的連関性が認められる一方で、その間には「区別」があることもまた示している。「相応」は仏教用語で、「合致」、「一致」、すなわち二つの異なるものの「一元化」を暗示し、さらに対立しているように見える二つの事象・事物の「一体不離」、「不一不二」、すなわち「相即」にも通じると考えられるからである。³⁴「相応」はむしろ英語の“conformity”に近い。この「照応」と「相応」の微妙な相違に、スウェーデンボルグの Correspondence の教義に対するエマソンと鈴木「相即」の理解の相違が認められるのではないか。

スウェーデンボルグの影響を受けたエマソンは“correspondence”を様々な用語で説明しているが、『自然論』に「自然は精神の象徴 (symbol) である」³⁵と記しているように、「象徴」と同義に用いている。エマソンは「歴史的」キリスト教の教義を否認したとはいえ、言葉による創造という『聖書』の創造観は保持していて、自然を神の「顕現」(revelation)、象徴的言語と考えている。「顕現」とは、内的な言葉としての精神が、外的な言葉としての物質的形態を有する自然となって顕れ出ることである。不可視の霊の領域と可視の自然の領域の間には区別、階層の相違が存在するが、言葉を通じて連関、調和、すなわち「照応」している。さらにエマソンは、「人間が墮落すると、続いて言葉も墮落する」³⁶とあるように、人間の墮落を言葉の墮落に結びつけている。そして「詩人」の役割を、可視の自然のなかで隠されている不可視の象徴的言語を見抜き、外的な言語を内的な言語に変容させることにより、人間の想念と事物の本質との間に統一性を回復することとしている。³⁷

鈴木はスウェーデンボルグの Correspondence の教義を「即非の論理」として自らの大乘仏教理論に応用している。鈴木は『浄土系思想論』(1942年)において、スウェーデンボルグの「霊界」、天国と「自然界」、「地獄」の関係を、仏教の「極楽」と「娑婆」に重ね合わせている。そして極楽とは浄土、天国、霊性の世界、娑婆とは人間と自然の世界あるいは穢土、地上、地獄、感覚と知性の世界としている。しかしながら同時に鈴木は、浄土と娑婆は相対立していながらも、「浄土は娑婆なくしては存在不可能と云わなくてはならない」³⁸、「浄土は娑婆の外に超然たる存在を固守しているものではなく、娑婆そのものの中から生まれなければならぬ」³⁹と述べ、極楽と娑婆は隔絶した世界ではなく、連関しており、「一如」であるとしている。そして鈴木は、こうした極楽と娑婆の間の「自己

33 CW, 1:18; 『エマソン論文集』上巻、58頁。

34 『岩波仏教辞典』第二版(岩波書店、1989年)参照。

35 CW, 1:17: “Nature is the symbol of spirit.”

36 Ibid., 20: “The corruption of man is followed by the corruption of language.”

37 CW, 3:8-15. さらに『エマソンの思想の形成と展開』、92-93頁参照。

38 鈴木大拙『浄土系思想論』(岩波文庫、2016年)、「我観浄土と名号」、283頁。

39 同上書、302頁。

同一にして同一ならざる」、「二にして一、一にして二」、「非連続の連続」、「不即不離」、「相互映出」の関係を、彼独自の「即非の論理」で説明している。⁴⁰「即非の論理」とは「Aは非Aだから、それ故にAである」という概念・論理の否定によって絶対的肯定が成立するという、形式論理学の世界では成立し得ない論理であり、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」と同義とされている。またこれは事象と事象とが相互に「相即相入」し密接不離とされる華嚴教学の「事事無碍法界」^{じじむげほっかい}にも通じると論じる。さらに鈴木は「浄土」の「娑婆」の関係を「一如性」という語で、以下のように説明する。

一如性と云うのは、一が一でなく、二が二でなく、不一不二、又は不即不離ということを云い現わさんとするのである。浄土と娑婆は二つで一つでない。が、この二つは個個独立して対峙するものでなく、その間に不一不二の連貫がある。相離れてはその一も立つことが不可能である。それだからと云って、二は即一であるかと云うに、そうでない。この超分別性を一如と云うのである。⁴¹

以上の概念、論理実体を否定する説明から、「極楽」と「娑婆」の間には、エマソンの認められるような言語的、理法的要素は介在していないと結論付けることが出来るであろう。少なくとも鈴木は分別、論理、観念からの離脱を主張している。エマソンは、一方では鈴木と同様に、現象的世界のみを対象とする外的言語としての「悟性」(understanding)の限界を説きながらも、普遍的、靈的、超感覺的世界を内的言語、理法として把握する「理性」(Reason)の働きの重要性を強調しているのである。

4-3 「大霊」と「法身」

スウェーデンボルグは *Heaven and Its Wonders and Hell* に、“... they call heaven the greatest man and the Divine man—Divine because it is the Divine of the Lord that makes heaven.”と記し、主なる神が創造したものである天界を“the greatest man and the Divine man”と表現し、鈴木はこれを「大神人」と訳している。⁴²一方エマソンは、神を“God”、“Lord”、“Father”とするキリスト教の人格的神概念から離脱してゆき、「大霊」(Over-soul)という超越主義的で超人格的な究極者概念を抱くようになっていった。「大霊」は個々人の魂(soul)を超越した、宇宙の普遍的、本源的、統一的な原理であろう。スウェーデンボルグの「大神人」、エマソンの「大霊」に相当するのが鈴木「如来」、^{ほっしん}「法身」である。鈴木は『大乘仏教概論』(1907年)において、「毘盧遮那仏」^{びるしゃな}、「無量寿仏」などとして顕現する、如来としての法身について、「現象の限界を超越しているのに、いたるところに内在して輝かしく自らを顕現し、我々がその中で生きて活動し、その存在を

40 同上書、「極楽と娑婆」、13頁。

41 同上書、33頁。

42 *Heaven and Hell*, ch. 8, no. 59, p. 47; 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、185頁。

成り立たせている」⁴³、さらに個別的特性を持たず、「事物の組織化された統合体、あるいは宇宙的統一性の原理」⁴⁴と説明している。

以上からエマソンの「大霊」と鈴木「法身」は宇宙の超越的原理としての共通性を有するとはいえ、エマソンの場合には、「内なる神」(God-within)が個別の「魂」に内在しながらも、「魂」を克服、超越して、普遍的な「大霊」を志向するのに対し、鈴木「法身」には個々の事物の自立性を認めることは出来ない。鈴木は『神秘主義—キリスト教と仏教—』において、「そもそも自我ありと思うことが、すべての過失と悪徳の始まりなのだ。うまく行かぬすべての物事の根源には無知がある。… 仏教によれば、世界は業縁の入り組んだ網の目のようで、その背景にそれを思うがままに操作する像などはいらぬ。現実のありのままの真相を洞察するために何よりも先ず必要なことは、無明の雲を取り払うことである」⁴⁵と記している。鈴木は、「我」は固有の本質(自性)を持たず(=無自性)、色・受・想・行・識の五蘊ごうんの構成要素から成り立っているに過ぎず、万物は「空」であり「因果」と「縁起」によって相依相関そうえしながら生起、変化するため、自我、事物を固定的に実体視し、執着する「無明」からの「覚醒」を説く大乘仏教の根本的教義に従っている。⁴⁶

スウェーデンボルグは *Heaven and Its Wonders and Hell* において、“... the internal is what is called the spiritual man, and the external what is called the natural man; also that the one is distinct from the other as heaven is from the world; also that all things that take place and come forth in the external or natural man take place and come forth from the internal or spiritual man.”⁴⁷と記しており、この『天界と地獄』の箇所を鈴木は、「内的とは霊の人にて、外的な人とは自然の人を謂う、両者の相違は猶ほ天界と世間との相違の如し。外人即ち自然の人が為す所、及びそのうちに在るものは、すべて内人即ち霊の人に由るものと知るべし」⁴⁸と訳している。さらに鈴木は、「この超個の人が本当の個己である」⁴⁹と述べる。「超個己」はスウェーデンボルグの「霊の人」、「内人」に、「個己」は「自然の人」、「外人」に相当する。さらにスウェーデンボルグの「霊の人」、鈴木「超個己」は、エマソンの「大霊」(Over-soul)に、「自然の人」、「個己」は「魂」(soul)、「自己」(self)に相当すると言えよう。エマソンは説教「宗教と社会」において、「私は外的な自己と内的な自己、すなわち二重の意識の区別があることを認め

43 鈴木大拙『大乘仏教概論』(岩波文庫、2016年)、238-39頁。

44 同上書、242頁。

45 鈴木大拙著、坂東性純・清水守拙訳『神秘主義—キリスト教と仏教—』(岩波文庫、2020年)、222頁；Daisetsu T. Suzuki, *Mysticism: Christian and Buddhist* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1957), pp. 136-37: “To think that there is the self is the start of all errors and evils. Ignorance is at the root of all things that go wrong. ... According to Buddhism, the world is the network of karmic interrelationships and there is no agent behind the net who holds it for his willful management. To have an insight into the truth of the actuality of things, the first requisite is to dispel the cloud of ignorance.”

46 『岩波仏教辞典』参照。

47 *Heaven and Hell*, no. 92, p. 74.

48 『鈴木大拙全集』第23巻、「天界と地獄」、202頁。

49 鈴木大拙『日本の靈性』(岩波文庫、1972年)、86頁。

ます。… 二つの自己があり、一方は、他方が行わず、是認しないものを、行い、是認します。すなわちこの誤りを犯し、激情に支配されやすい、死すべき自己の内部に、至上の平穏な不死の精神が座しているのです⁵⁰と語り、外面的、皮相的、利己的な「自己」と内面的、本源的、普遍的な「自己」の二つの「自己」意識があると述べている。鈴木もまた以下のように記している。

我々の外なる自己は意識の表面で働いている浅薄なものであり、この浅薄さは二つに分かれるところから来ています。我々が「これが私の自己である」とか「これが私の内なる自己である」と考えるとき、その自己は必ず二つに、自己とそれに対するものに分割されます。われわれが自己を意識すれば、必ず考える自己と考えられる自己—主観と客観—が出てきます。⁵¹

以上のようにエマソンと鈴木は、自己の超越と内在、外的自己と内的自己、主観と客観、自己意識の二重性について類似した考えを展開している点において、顕著な共通性が認められる。

4-4 「宗教的情感」と「靈性」

スウェーデンボルグは *Divine Love and Wisdom* に、“... the spiritual of man has so far passed over into his natural, that he does not know what the spiritual is, and thus does not know that there is a spiritual world, the abode of spirits and angels, other than and different from the natural world.”⁵²と記している。この『神智と神愛』の箇所を鈴木は、「人の靈性は深くその自然性の中に埋没し去りたるを以て、彼は靈性の何たるを知らず、従ひて精霊及び天人の棲息せる靈界ありて、その世界は自然界以外のもの、自然界と相異なるものなるを知らざればなり⁵³と訳している。鈴木独自の造語「靈性」はスウェーデンボルグの“the spiritual”に相当する。スウェーデンボルグが“the spiritual”と“the natural”を対比させているのと同様に、鈴木は「靈性」と「娑婆」を対比させ、「娑婆」が感覚と分別の世界であるのに対して、「靈性」は「無分別の分別」の世界を意味し、靈性の世界を極楽浄土としている。感覚の働きすなわち五感（見、聞、香、味、触）を通じて入ってくる千差万別の世界を分類し、法則を見出すのが知性であるが、知性は分別の働きで、自我と事物という二元的な対立のなかで事物を知覚する。「靈性」

50 CS, 4:215, Oct. 27, 1833, Sermon No. 165: “I recognize the distinction of the outer and the inner self, of the double consciousness, ... there two selves, one which does or approves that which the other does not and approves not; or within this erring, passionate, mortal self, sits a supreme, calm, immortal mind, ...”

51 佐藤平訳『真宗入門』（春秋社、1983年）、34頁。鈴木が1958年にニューヨークの American Buddhist Academy で行った英語講演の邦訳。

52 Swedenborg, *Divine Love and Wisdom*, trans. John C. Ager (West Chester, Penn.: Swedenborg Foundation, 2009), ch. 2, no. 85, p. 43.

53 『鈴木大拙全集』第25巻、「神智と神愛」、57頁。

はこうした二元的対立を乗り越える宗教的意識であると、鈴木は『日本的靈性』(1944年)に次のように記している。

精神または心を物(物質)に対峙させる考えの中では、精神を物質に入れ、物質を精神に入れることができない。精神と物質との奥に、いま一つ何かを見なければならぬのである。二つのものが対峙する限り、矛盾・闘争・相克・相殺などということは免れない。それでは人間はどうしても生きていくわけにはいかない。なにか二つのものを包んで、二つのものがひきょうずるに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つであるということを見るものがなくてはならぬ。これが靈性である。今までの二元的世界が、相克し相殺しないで、互譲し交換し相即相入そうそくにゆうするようになるのは、人間靈性の覚醒にまつよりほかないのである。いわば精神と物質の世界の裏うらにいま一つの世界が開けて、前者と後者とが、互いに矛盾しながらしかも映発するようにならねばならぬのである。これは靈性的直覚または自覚によって可能となる。靈性を宗教意識と言つてよい。⁵⁴

さらに続けて鈴木は「精神」と「靈性」との相違について、「精神は分別意識を基礎としているが、靈性は無分別智である」⁵⁵と述べ、靈性は精神のなかに働きながらも精神とは異なる、自我を超越する際に働く精神よりも一層高次元の直覚力であるとしている。鈴木によれば、感覚、感情、分別などの「精神」の働きは「個己」の次元のものに過ぎず、「靈性」の覚醒は「個己」でありながら「超個己」の次元に達することで初めて可能となる。

エマソンは、鈴木「の靈性」に相当する語句“spiritual nature”をエッセイ「大靈」に、「靈的な存在が人間の内部にそっくり備わっていることが分っている。…結果に他ならぬ人間が終わりを迎え、原因に他ならぬ神が始まる魂の内部には、どんなかんぬきも壁もない。…我々は一方の側面を靈的本性(spiritual nature)の深淵に、神の様々な属性にさらしている」⁵⁶と記している。また鈴木は「靈性」を「宗教意識」とも言い換えているので、「靈性」に近似している語は、エマソンの「宗教的情感」(religious sentiment)、「道徳的情感」(moral sentiment)であろう。エマソンは「神学部講演」(“The Divinity School Address,” 1838)において、以下のように述べている。

この法のなかの法とも言うべきものを認識すると、精神の内部にある種の情感が目覚めます。これは私たちが宗教的情感と呼ぶもので、私たちに至上の幸福を与えてくれます。…しかし道徳的情感が心のなかに目覚め始めると、「法」がすべての自然を支配しているという保証を与えてくれ、

54 『日本的靈性』、16-17頁。

55 同上書、17頁。

56 *CW*, 2:161: “We know that all spiritual being is in man. ... that is, as there is no screen or ceiling between our heads and the infinites heavens, so is there no bar or wall in the soul where man, the effect, ceases, and God, the cause, begins. ... We lie open on one side to the deeps of spiritual nature, to all the attributes of God.”

またそれ自体が保証ともなります。そして全世界、時間、空間、永遠が、突然いっせいに歓喜に包まれるように思えます。この情感はみずから神聖であり、また神聖にする力をそなえています。まさに人間の至福です。人間を限りない者にしてくれるのです。この情感を通して、初めて魂は自分自身を知るのです。⁵⁷

エマソンもまた鈴木と同様に、「宗教的情感」、「道徳的情感」は論理、分析的能力としての「知性」(intellect) と同時に働きながらも、「知性」とは別の能動的で直観的な能力としている。エマソンが「宗教的情感」、「道徳的情感」という語を好んで用いたのは、現実世界を超越した不可視で神聖な領域に対する敬虔、畏敬の気持を示し、人間の心に生来備わっている自然な心情と直接的に結びついていると考えたからである。⁵⁸

さらに鈴木「の「靈性」はエマソンの「理性」(Reason)とも親和性を持っている。エマソンは『自然論』において、「理性」を「普遍的な魂」(universal soul)、「精神」(Spirit)と同一視して、次のように記している。

人は、個人としての自分のいのちの内部あるいは背後に普遍的な魂があり、そのなかに、大空さながら、「正義」、「真理」、「愛」、「自由」の本性がさし昇り、輝くことを知っている。この普遍的な魂を人は「理性」と呼ぶ。それは私のものでも、あなたのものでも、彼のものでもなく、我々の方がそれに属している。…我々は知的に考えると「理性」と呼ぶものを、自然との関係で考える場合には「スピリット精神」と呼ぶ。「精神」は「創造主」である。⁵⁹

普遍的で永遠の理想、靈的世界を対象とする「理性」に対して、「悟性」は現象を概念化する知覚能力である。「理性」が普遍性を志向しており、「悟性」よりも高級な能力である点では、鈴木「の「靈性」と「分別」の区別との共通性がみられる。しかしエマソンの「理性」は、人間の魂の内部に宿る知的、道徳的本性であり、真理、本源的原理、正義、愛を志向ながら、神との直接的合一を可能にする人間のみ^に付与されている神的、創造的能力である。エマソンの“Spirit”を「精神」としたが、「靈」よりも「精神」の方が人間の意志を強調することが出来るからであり、分別意識を「精神」とする鈴木との相違に注意する必要がある。鈴木「の「靈性」は、「浄土」、「阿弥陀仏」とも同義で、道徳的善悪を超越し、

57 CW, 1:79: “The perception of this law always awakens in the mind a sentiment which we call the religious sentiment, and which makes our highest happiness. ... But the dawn of the sentiment of virtue on the heart, gives and is the assurance that Law is sovereign over all natures; and the worlds, time, space, eternity, do seem to break out into joy. This sentiment is divine and deifying. It is the beatitude of man. It makes him illimitable. Through it, the soul first knows itself.”

58 『エマソンの思想の形成と展開』、139-44頁参照。

59 CW, 1:18-19: “Man is conscious of a universal soul within or behind his individual life, wherein, as in a firmament, the natures of Justice, Truth, Love, Freedom, arise and shine. This universal soul, he calls Reason: it is not mine or thine or his, but we are its; ... That which, intellectually considered, we call Reason, considered in relation to nature, we call Spirit. Spirit is the Creator.”

宗教的自覚、「覚醒」を成就する霊的な「働き」である。また仏としての本質、仏になり得る可能性を意味する「如来蔵」、^{ぶつしょう}「仏性」にも通じ、人間のみならず全ての衆生^{しゅじょう}にも潜在的には内在しているとされ⁶⁰、エマソンの「理性」とは明らかに異なる。

5 おわりに

鈴木は1915年にスウェーデンボルグの『神慮論』の邦訳を刊行し、1908年の『天界と地獄』から続けていたスウェーデンボルグの著作の翻訳作業を終えた。鈴木は評伝『スエデンボルグ』において、スウェーデンボルグの欠点を、「文章が如何にも冗漫にして、同じような事を繰り返し説く」、「五感の世界と離れたる他界のことなるが故に、普通の人々には少々信を置き難きところ少なからず」、「所述が細目に渉り過ぎたる」⁶¹などと指摘している。その後直接的な言及は頻繁にはされなくなるが、鈴木独自の大乘仏教思想の形成過程には、熱心に受容したスウェーデンボルグの教義を大乘仏教の用語に変換、応用していった形跡が認められるのである。また鈴木は *Mysticism: Christian and Buddhist* (1957) を出版し⁶²、大乘仏教とキリスト教神秘主義思想の類似性に関する考察の対象は、スウェーデンボルグからドイツ中世の神秘思想家エックハルト (Meister Eckhart, ca.1260-ca.1328) に移っていった。

スウェーデンボルグの著作の邦訳を終えてから鈴木は、1921年に京都の大谷大学教授に招聘され、大乘仏教の本格的な研究活動に専念するようになってゆく。まず鈴木は禅仏教の研究に専念し、論考、著書を邦語、英語で執筆、出版してゆく。英文著書として代表的なものは、日本文化の欧米社会への案内書としての *Essays in Zen Buddhism* (1927, 1933, 1934)、*Zen and Its influence on Japanese Culture* (1938) などである。さらに禅仏教と並ぶもう一方の鈴木の大乗仏教の教義の中核である浄土系仏教にも研究対象を広げてゆき、『浄土系思想論』(1942年) を出版する。

一方エマソンは1840年代になると1830年代に認められたようなスウェーデンボルグに対する共感⁶³は薄れ始め、『代表的人物』においては、以下のようなスウェーデンボルグに対する批判もまた随所に述べられるようになる。

スウェーデンボルグが打ち立てた世界構造の中心には自発性が欠けている。それは動的ではあるが生気がなく、生命を生み出す力に欠けている。そこには個性的なものが少しもない。宇宙は巨

60 『涅槃経』においては「一切衆生悉有仏性」の句で表現される。「衆生」とは一切の生物。インドでは有情の生物だけに仏性があるとされるが、中国では草木土石の無情のものにもあるという議論がなされた。鈴木が滞米中に英訳・出版した『大乘紀信論』は、如来蔵説、唯識説に基づいており、東アジアにおいて覚性は本来衆生に本来的に具有されているという本覚思想が展開された。日本の天台本覚思想は本覚が内在という思想を一步進めて、現実の事象がそのまま絶対の真理であると肯定する思想を展開した。『岩波仏教辞典』参照。さらに「如来蔵」、「仏性」については、『如来蔵と仏性』「シリーズ大乘仏教」第8巻(春秋社、2014年)、『如来蔵思想』「講座大乘仏教」第6巻(春秋社、1982年)などを参照。

61 『鈴木大拙全集』第24巻、「スエデンボルグ」、9-10頁。

62 鈴木『神秘主義』、「マイスター・エックハルトと仏教」、11-65頁;「“一刹那”とさとり」、130-57頁参照。

大な一つの結晶体で、それを構成している原子も、重なり合っている地層も、すべてが一糸乱れぬ秩序を保ち、とぎれのない統一を保ってはいるが、やはり冷たく静まりかえっている。個性や意志を備えていると思われるものは一つもない。存在と存在の間をつなぐ巨大な鎖が、中心から末端まで広がっていて、あらゆる運動から自由と性格をすっかり奪っている。⁶³

象徴を認識することによって、万物の誌的な構造や、精神と物質との本源的な結びつきを理解したこの人物が、その認識から当然生まれてくるはずの詩的な表現の道具を、何一つ持たないままに終始したということは、誠に注目すべきことである。… いずれにしても彼の著書には、旋律も情緒もユーモアもなく、生気の失せた散文の平面には、どのような浮彫も刻まれてはいないのである。彼が描き出す豊かで正確なイメージには、ほんの少しの楽しささえも感じられない。少しも美しくないからである。我々は光の欠けた風景のなかを、ただ寂しくさまようばかりだ。これら死人の園のひとすみにさえ、鳥の歌声が聞こえたことは一度もなかった。⁶⁴

エマソンの批判は、スウェーデンボルグの「照応」の教義は、感性界は英知界からの「流出」とする新プラトン主義の影響を多分に受けており、統一的な秩序を保ちながらも、生命のダイナミックな動き、個性、意志、自発性、自由、詩的感情などが認められないという点に向けられている。この背景としては、『自然論』の精神と自然とが正確に「照応」し合い、自然を秩序正しく整然とした万物の階梯とみる静的な自然観から、自然はより高次の段階をめざす不断の進化 (evolution) であり、変化 (metamorphosis)、流動 (flux) であるとする、より動的な自然観に次第に推移していたことを指摘することが出来る。⁶⁵ 以下は1840年に完成し、『詩集』(*Poems*, 1847) に収録された詩「森のしらべ」(“Woodnotes, II”) の一節である。

63 酒本雅之訳『代表の人間像』「エマソン選集」第6巻(日本教文社、1961年)、95-96頁; *CW*, 4:74-75, “Swedenborg, or the Mystic”: “Swedenborg’s system of the world wants central spontaneity; it is dynamic not vital, and lacks power to generate life. There is no individual in it. The Universe is a gigantic crystal, all whose atoms and laminae life lie in uninterrupted order, and with unbroken unity, but cold and still. What seems an individual and a will, is none. There is an immense chain of intermediation extending from centre to extremes, which bereaves every agency of all freedom and character.” エマソンは1845年12月に “Swedenborg, or the Mystic” を講演している。

64 同上書、106-07頁; *Ibid.*, 80: “It is remarkable that this man who by his perception of symbols saw the poetic construction of things and the primary relation of mind to matter, remained entirely devoid of the whole apparatus of poetic expression, which that perception creates. ... Be it as it may, his books have no melody, no emotion, no humour, no relief to the dead prosaic level. In his profuse and accurate imagery is no pleasure, for there is no beauty. We wander forlorn in a lacklustre landscape. No bird ever sung in all these gardens of the dead.”

65 エマソンは、ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) のように種の変化を説く科学的進化論を受容してはおらず、自然界において、生物は下等なものから高等なものに分類され、全自然を同一性が貫き、段階的に連続しているという進化思想を受容していた。J. W. Beach, “Emerson and Evolution,” *University of Toronto Quarterly*, vol. 3 (1934), pp. 226-60参照。

すべての形態は変化する。
 だが実体は永続する。
 広大な創造は常に新しく、
 神の即興のうちに成る。
 神の心より一つの意志が発し、無数の行為となって現れる。
 かつて世界は、卵が石になっていたように眠っていた。
 そして脈も音も光もなかった。
 そして神が「鼓動せよ！」と言うと運動が始まり、
 そして巨大なかたまりは巨大な海となり、
 運動はさらに進行し、
 世界の絶え間のない計画を作った永遠の牧神は
 一つの形態に決してとどまらず、
 永遠に逃げて行く、
 波や炎のように、新しい形態につぎつぎに変形してゆく …⁶⁶

こうした自然観の変化は、以下に示すように、1836年の『自然論』初版には、プロティノス (Plotinus, ca.205-ca.270) から引用した、精神の自然に対する優位を示すエピグラム (左) が掲げられていたのに対し、1849年の『自然論』再版には、自然が人間精神へと進化するプロセスを示す独自の詩 (右) が掲げられたことにも明らかに示されている。

自然は知恵の像あるいは模倣であり、
 魂の最終的なものに過ぎない。自然は、
 行うのみで、知ることのないものである。⁶⁷

無数の環を持つ霊妙な鎖が、
 すぐ近くの環を最も遠くの環に結ぶ、
 目はいたるところきざしを眺めとり、

66 CW, 9:112: "All forms are fugitive,
 But the substances survive.
 Ever fresh the broad creation,
 A divine improvisation,
 From the heat of God proceeds,
 A single will, a million deeds.
 Once slept the world an egg of stone,
 And pulse, and sound, and light was none;
 And God said, "Throb!" and there was motion,
 And the vast mass became vast ocean.
 Onward and on, the eternal Pan,
 Who layeth the world's incessant plan,
 Halteth never in one shape,
 But forever doth escape,
 Like wave or flame, into new forms ..."

67 CW, 1:1: "Nature is but an image or imitation of wisdom,
 the last thing of the soul; nature being a thing
 which doth only do, but not know."

そして薔薇はあらゆる言語を語る、
そして虫は、人間になろうと努めながら、
形態のすべての螺旋をのぼりゆく。⁶⁸

エマソンは既に述べたように、ユニテリアン教会の牧師から出発したが、教会制度に対する疑念から牧師職を辞し、講演者、文筆家、詩人として再出発した。この背景には彼の内的自己の深刻な苦悩と「内なる神」の発見、自然との合一という神秘的体験があった。そしてエマソンは次第により普遍的な思想、宗教、自然観を希求する超越主義的な思想を抱くようになってゆく。そうした正統的なキリスト教から離脱してゆく過程で、スウェーデンボルグの「照応」の教義の影響を受け、またインドの宗教、哲学にも関心を広げていった。⁶⁹

鈴木がスウェーデンボルグの教義から強い影響を受けた背景には、既に述べたように、鈴木自身の「見性」体験を出発点として、何よりも自らが渡米して、ケーラスのオープン・コート社で東西の思想を統合しようとするアメリカ思想の動向に直接的に触れた長期間の滞米生活がある。また近代化が急速に進展する当時の時代状況に適応するために、日本仏教の改革と近代化が要請されていた。当時の日本の知識人、宗教人が直面していたのは、欧米のキリスト教の精神的、文化的価値観の受容と対決という問題であるが、仏教者にとって最も親和性を認めることが出来たのは、スウェーデンボルグの教義などの異端視されていたキリスト教神秘主義思想であった。⁷⁰

エマソンと鈴木に共通しているのは、二人の生きた時代の要請でもあった、キリスト教、大乘仏教という伝統的宗教の制度と教義から離脱し、またニューイングランド、日本という文化的、地域的境界を越え、人類一般に普遍的に適用可能な宗教、思想に再構築する探求を試みたという点であろう。そうした日米の二人の思想家の試みにおいて、スウェーデンボルグの「照応」の教義が触媒的な役割を果たしたという事実を否定することは出来ない。

※本稿は2021年度日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C、研究課題：グローバル・エマソン、課題番号：19K00464）による研究成果の一部である。

68 Ibid., 1:7: “A subtle chain of countless rings
The next unto the farthest brings;
The eye reads omens where it goes,
And speaks all the languages the rose;
And, striving to be man, the worm
Mount through all the spires of form.”

69 エマソンの牧師職辞任と講演者への転向については、『エマソンの思想の形成と展開』、64-74頁参照。またエマソンは1840年にヴェーダ聖典、1845年には『バガヴァッド・ギーター』を読んでいる。

70 吉永「大拙とスウェーデンボルグ」、34-39頁、安藤『大拙』、102-04頁参照。

A Comparison of the Online Version and Paper-based Version of TOEIC L&R

Jean-Pierre Joseph RICHARD

Abstract

In Spring 2020, an online version of the Test of English for International Communication for Listening and Reading (TOEIC L&R) became available. The Institute for International Business Communication, IIBC, (2020d) indicated that the paper-based version and the online version are parallel; however, no published studies have discussed the reliability or validity of the online version. In February 2021, volunteer first-year participants ($N = 56$) at the University of Nagano (UoN) were randomly assigned to complete the paper-based test one day before or after the end-of-year online version. Before combining the paper-based test scores from different days, the data were rigorously checked. Three research questions were investigated. For RQ1, correlational analyses indicated that the two listening tests ($r = .742$) and the two reading tests ($r = .676$) had strong correlations. However, for RQ2, paired samples t-tests revealed that the mean scores for the two listening tests were significantly different with a near large sized effect (Cohen's $d = .924$); whereas the reading tests had a negligible difference (Cohen's $d = .308$). Finally, for RQ3, independent sample t-tests revealed similarities in scores on the paper-based tests for two cohorts, but differences in scores between the paper-based tests and the online tests. In all, the results raise concerns about the reliability and validity of the online version of the TOEIC L&R. One important limitation is that the online TOEIC L&R was sat by the students without proctors present.

In 2020, the COVID-19 pandemic impacted educational institutions, including disruptions to the academic calendar, a shift to online learning, and changes in

testing programs. The University of Nagano (UoN) was no exception. At UoN, incoming students complete at home the Computerized Assessment System for English Communication (CASEC); then they complete the paper-based Test of English for International Communication for Listening and Reading (TOEIC L&R) a few weeks later on campus once classes have begun. However, due to COVID-19, the paper-based TOEIC L&R was replaced by the new TOEIC L&R Online test which students completed at home.

CASEC test results indicated that the 2020 cohort had comparable scores with previous cohorts; however, results from the online TOIEC L&R indicated that the 2020 cohort had significantly higher scores than cohorts who completed the paper-based TOEIC L&R¹. Score differences on the TOEIC L&R between the 2020 cohort and previous cohorts might be due to four main possibilities: (1) the late start of the academic year allowed students to prepare; (2) students had higher test-taking motivation while taking the online TOEIC L&R compared with those who sat the paper-based TOEIC L&R; (3) the online TOEIC L&R was taken without proctors and multiple students subverted test-taking procedures; (4) the paper-based and online TOEIC L&R tests are not parallel; or combinations of the above. This study will compare results from a test-retest research program in which first year participants at UoN ($N = 56$) completed the paper-based and online versions of the TOEIC L&R on consecutive days, and by comparing data from the paper-based TOEIC L&R for the previous cohort ($N = 202$).

TOEIC L&R

Standardized language tests, such as the TOEIC L&R, are used for admissions, placement, program evaluation, hiring and promotion (Im et al, 2019). At UoN, this test is used for individual and program evaluation, is partially used for class placement in Year 2, and many upper grade students use scores from this test for job hunting. In Japan, more than 2.2 million examinees, including more than 1 million students, completed the TOEIC L&R in 2019 (IIBC, 2020a). Due to the important roles that this test plays, it is imperative that it be consistent and reliable across administrations (*e.g.*, for example at the beginning and end of one academic year) and across test formats (*e.g.*, pre-updated and updated versions of the paper-based TOEIC L&R; the paper-based and the online versions of the TOEIC L&R).

1 Although beyond the scope of this paper, ANOVAs indicated CASEC scores were similar; but TOEIC L&R scores were significantly higher for the 2020 cohort. See Appendix A.

As to the former, Wei and Low (2017) demonstrated that repeater test-taker data could be used to monitor the TOEIC L&R across administrations, concluding that their analyses “support the reliability and validity of the TOEIC scores” (p. 18). As to the latter, the paper-based test format was updated in May 2016. Analyses with examinees in Japan and Korea sitting the updated paper-based test compared with a large reference sample from the pre-updated paper-based test indicated that the updated version performed psychometrically as well as the pre-updated version (Cid et al, 2017). Moreover, mean scale score differences between the pre-updated and updated versions were minimal, 1.39 points for Reading and 3.11 points for Listening (Cid et al). Kanzaki (2017) compared the pre-updated and updated versions of the TOEIC L&R with Japanese students ($N = 141$), observing strong correlations (Listening: $r = .80$; Reading: $r = .84$), and mean scale score differences between versions were 0.96 for Listening and 11.46 for reading. To date, however, there appear to be no studies comparing the paper-based TOEIC L&R and the newer online version.

Limited information is available regarding the online version of the TOEIC L&R. A search using Google in December 2020 for “*TOEIC*® L&R Online”, in Japanese and English, resulted in links to university co-ops, cram schools, and press releases. The first news article that was found, from March 2020, reported that the Institute for International Business Communication (IIBC) would begin from April 2020 an online version of the TOEIC L&R (Nikkei Shimbun, 2020 March 10). With the exception of various news aggregator websites, no other news stories were identified in this preliminary search. One press release from the fall of 2020 indicated that more than 1100 Japanese organizations had used the online version of the TOEIC L&R test since April 2020 (IIBC, 2020e). An announcement from IIBC described the online version as: 「本物を！ ETS開発の正式なテスト従来のスコアと意味は変わらない」 [The real thing! ETS formal test, the interpretation is the same as a traditional score] (IIBC, 2020c). A second announcement from IIBC, indicated that the score interpretation of the two versions were the same, 「評価やスコアの意味合いは、公開テストや従来のIPテストと同様で、スコアが同じであれば、英語力も同等です」 [the meaning of evaluations and scores is the same as in public tests and conventional IP tests, and if the scores are the same, the English proficiency is also the same] (IIBC, 2020d), although they added with the caution that online tests taken at home may not be controlled.

In addition to Google, three newspaper websites (Yomiuri, Asahi, Japan Times) were searched in December 2020 for TOEIC-related stories. None were found which referred to the new online test. Next, an online web search in December 2020 using

Google Scholar with variations of “TOEIC® L&R Online” in Japanese and English found no related articles. A second search in March 2021 found one (Suzuki, 2021) that merely summarized the operating procedures for TOEFL, Eiken, and TOEIC since the beginning of the pandemic, but which did not report on the performance of the online tests. Lastly, a search of the TOEIC research database in December 2020 and March 2021 at ETS (<https://www.ets.org/toEIC/organizations/research/topics/>) found no papers related to the TOEIC Online L&R. In short, there is limited information available related to the online version of the TOEIC L&R, and the claim that the online test scores are equivalent to the paper-based test scores appears to be untested.

Research Questions

The first research question is interested in the correlations of scores from both skills across the online and paper-based TOEIC L&R tests. Although Kanzaki (2017) identified strong correlations between the pre-updated and updated forms for the paper-based TOEIC test for listening and reading, the correlations between the scores from the online and paper-based TOEIC L&R are unknown. The second research question investigates whether the results from the paper-based TOEIC L&R are the same as those from the online TOEIC L&R, per skill of listening and reading. Kanzaki observed a small difference in scale points between the two listening tests, but a much larger difference between the reading tests. However, whether the scores from the paper-based and online versions of the TOEIC L&R are similar or not are unknown. The final research question compares the 2019² and 2020 cohorts on the end-of-Year 1 TOEIC L&R. These results could provide more support for any claims about the reliability and validity of the online TOEIC L&R.

Methodology

UoN and its English Program

UoN, a small, regional, public university located in the northern part of central Japan, opened in 2018. The required English program is semi-intensive over two years. Year 1 students have four 100-minute English lessons per week, and Year 2 students have two-to-four 100-minute lessons per week, depending on the faculty. Electives for students in Years 3 and 4 are available. In the weeks before entering, incoming students complete at home CASEC for class placement. This computer

² The 2018 cohort did not complete the TOEIC L&R at the end of their first year.

adaptive test, developed by the Japan Institute for Educational Measurement, takes approximately 40-50 minutes. It includes four sections: vocabulary ($k = 16$), phrasal expressions and usage ($k = 16$), listening for the main idea ($k = 17$), and listening for specific information ($k = 11$) (CASEC, n.d., a). Official score reports, received upon test completion, include a chart of the examinee's performance on each section, approximate TOEIC and STEP Eiken comparison scores, and estimated can-do abilities (CASEC, n.d., b).

In addition to CASEC, UoN students complete the TOEIC L&R at the beginning and end of Year 1 and at the end of Year 2. The 2018 and 2019 cohorts completed the paper-based TOEIC L&R supervised at the university within approximately one week of entering the university. This paper-based test (Table 1) has 200 questions: listening ($k = 100$, 45 minutes) and reading ($k = 100$, 75 minutes) (IIBC, 2020b). In 2020, the start of the academic year was postponed by approximately six weeks and the online TOEIC L&R replaced the paper-based TOEIC L&R. The online computer adaptive TOEIC L&R, was given in May 2020. For this test (Table 2), for each of listening and reading, examinees have the same sets of 25 questions in Unit 1 and depending on the degree of correctness each candidate receives a different set of 20 questions in Unit 2 (IIBC, 2020c).

Table 1. *TOEIC L&R Paper-Based Test Format*

Section	Part	Questions (Type)	Questions (k)	Minutes
Listening	1	Photographs	6	45
	2	Question-Response	25	
	3	Conversations	39	
	4	Short talks	30	
Reading	5	Incomplete sentences	30	75
	6	Text completion	16	
	7	Single passages	29	
		Multiple passages	25	

Table 2. *TOEIC L&R Online Test Format*

Section	Unit	Computer Adaptive	Questions (Type)	Questions (k)	Minutes
Listening	1	No	Photographs	3	25
			Question-Response	4	
			Conversations	9	
			Short talks	9	
	2	Yes	Question-Response	5	
			Conversations	9	
		Talks	6		

Reading	1	No	Incomplete sentences	5	37
			Text completion	4	
	2	Yes	Reading comprehension	16	
			Incomplete sentences	7	
			Text completion	4	
			Reading comprehension	9	

Participants

Approximately 25% of the Year 1 population ($N = 56$) at UoN participated. Recruitment was done via an online form distributed in December 2020 through email. The research program provided for up to 100 Year 1 students to participate. The email indicated that participants would not be remunerated. In all, 67 students were recruited, and 58 completed both versions of the TOEIC L&R of whom 57 consented for their data to be used. Of these 57, 93% were from the largest faculty at the UoN, although this faculty represents 70% of the student population at UoN. Following the detailed analyses described in the following section, one participant was deleted from the data set, resulting in a pool of 56 participants. In addition to this group of participants, to answer RQ3, data from 202 participants from the 2019 cohort were also used.

To avoid a test fatigue effect, half of the participants were each randomly assigned to complete the paper-based test one day before or after the online test. See Table 3.

Table 3. *Test Dates and n-sizes.*

	Day 1 (Feb 8, 2021)	Day 2 (Feb 9, 2021)	Day 3 (Feb 10, 2021)
Test	Paper-based TOEIC L&R	Online TOEIC L&R	Paper-based TOEIC L&R
<i>n</i>	<i>n</i> = 29	<i>n</i> = 57	<i>n</i> = 28

Descriptives and Analyses

Before combining the scores from the paper-based test from Day 1 and Day 3, the data underwent multiple inspections. First, two independent sample Student's *t*-tests were run to investigate whether mean scores were similar. The data were analyzed using JASP, a free and open-sourced program for statistical analyses (JASP Team, 2020). The data met assumptions for parametric testing. The *t*-tests were nonsignificant and effect sizes were negligible (following Plonsky & Oswald, 2014, where $d = .40$ is small, $d = .70$ is medium, and $d = 1.00$ is large) with the confidence intervals crossing the zero: Listening [$t(55) = 0.86, p = .39$, Cohen's $d = .23$ (95% CIs = $-.29, .75$)]; and Reading [$t(55) = 0.71, p = .48$, Cohen's $d = .19$ (95% CIs = $-.33, .71$)]. This

indicated that the mean scores for the paper-based TOEIC L&R, for each section of Listening and Reading, from Day 1 were likely similar to the mean scores for the respective tests from Day 3, possibly allowing for the data to be combined.

Data inspection continued. Table 4 displays the number of participants whose scores between the two versions (*i.e.* paper-based and online) differed by ± 35 scale points. This value, ± 35 , was chosen because it represents the Standard Error of Difference (*SEdiff*) between two administrations of the paper-based TOEIC L&R (ETS, 2019). In the current study, 55% of the participants had score differences within the *SEdiff* range (*i.e.*, between -35 and 35) possibly indicating no difference in scores. However, approximately 45% of the participants had differences in scores outside the *SEdiff*. For Listening and Reading, 24 and 18 participants respectively had higher scores on the online test; compared with two and nine who had higher scores on the paper-based test.

Table 4. *Number (%) of Participants with Scale Score Differences of ± 35 Points between the Online and Paper-based TOEIC Tests ($n = 57$)*

Difference	TOEIC Listening	TOEIC Reading
>35	24 (42.11%)	18 (31.58%)
-35 to 35	31 (54.39%)	30 (52.63%)
<-35	2 (3.51%)	9 (15.79%)

Note. >35 = participants scored higher on the online test; <35 = they scored lower on the paper-based test.

The TOEIC L&R tests were administered on consecutive days; thus, differences beyond ± 35 points are likely due to either test or within-subject variability (*e.g.*, differences in motivation). Table 5 shows differences in scale scores for Listening and Reading for each participant. Day 1 and Day 3 indicate which day the participants completed the paper-based TOEIC L&R. A range of scale score differences can be seen; however, the value of 225 stands out. This value indicates that one participant's online listening test score from Day 2 was 225 points higher than their paper-based listening score from Day 3. This difference, 6.4 times greater than the *SEdiff*, and 2.1 times larger than the nearest value for listening tests of 110, over a 24-hour period might be accounted for by differing motivational levels.

Finally, 3x2 chi-square tests of independence were run to investigate test-day bias, by comparing the number of participants in the three scale score difference categories (*i.e.*, >35, -35 to 35, and <35) by Day 1 or Day 3. No significant associations for Listening [$X^2(2, N = 57) = 0.44, p = .81, \text{Cramer's } V = .09$] or Reading [$X^2(2, N = 57) = 0.85, p = .65, \text{Cramer's } V = .12$] were observed. Removing the participant with the

scale score difference of 225 does not change the non-association [Listening, $X^2(2, N = 56) = 0.26, p = .88, \text{Cramer's } V = .07$].

Table 5. *Individual Participant's Score Differences between the Online and Paper Versions of the TOEIC L&R (n = 57)*

Difference	TOEIC Listening		TOEIC Reading	
	Day 1	Day 3	Day 1	Day 3
		225		
			140	
			120	
	110 110 100	110 110 110		105
				100
		95		95
	85			
		80		
>35	75 75 75 75	75	75	75 75 65
	70		70	
		65 65 65		
			60 60	
			55	
	50	50 50		50
	45	45		45
			40	40 40
	35 35 35	35		
		30	30 30	30 30
	25 25 25 25	25	25 25 25 25	25 25
	20	20 20	20	
	15 15	15 15 15		15 15 15
	10		10 10	10
		5 5 5	5	
-35 to 35	0 0 0			
	-5		-5	
		-10	-10 -10	-10
	-15		-15 -15	-15 -15
	-20	-20	-20	-20
		-25	-25	
				-30
	-40	-40		-40
				-50
			-60 -60	-60
<-35			-65	-65
			-75	
				-125

Note. Positive values indicate participants scored higher on the TOEIC online test.

Figures 1 and 2 allow for a visual inspection of each participant's paired scores (*i.e.*, paper-based and online) for Listening and Reading. To create these figures, scores

from the paper-based tests were organized in ascending order (green line), hence the appearance of a near linear line for these scores. These scores were used as a baseline on which to map the scores from the online test (blue line) because the former is thought to be known. For both listening and reading, it appears that the paired scores frequently varied.

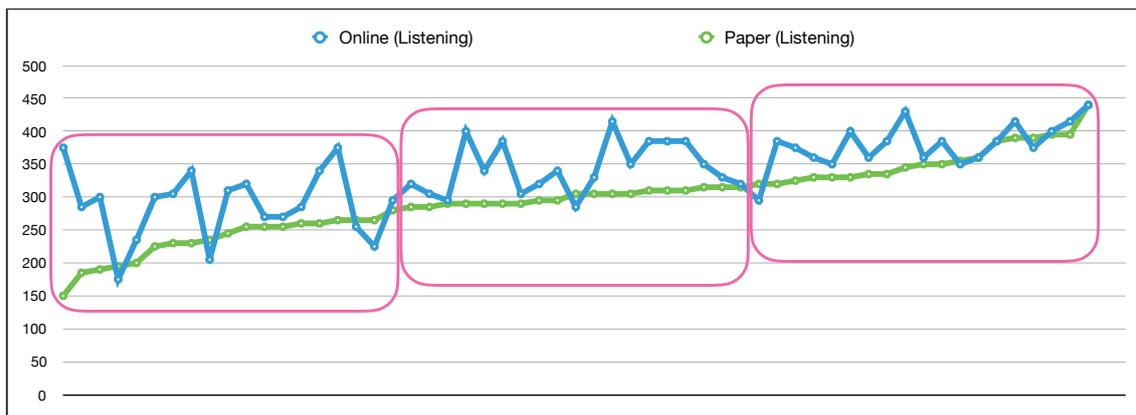


Figure 1. Participants' paired scores for the online and paper-based TOEIC Listening test ($N = 57$). Mean differences: Lower (left) $m = 64.21$ (95% CIs = 40.46, 87.96), $sd = 52.82$, $n = 19$ [after removing the most left pair difference of 225 points: $m = 55.28$ (95% CIs = 42.94, 67.62), $sd = 26.72$, $n = 18$], Middle (center) $m = 46.32$ (95% CIs = 31.00, 61.64), $sd = 34.07$, $n = 19$, Upper (right) $m = 28.16$ (95% CIs = 16.82, 39.51), $sd = 25.23$, $n = 19$.

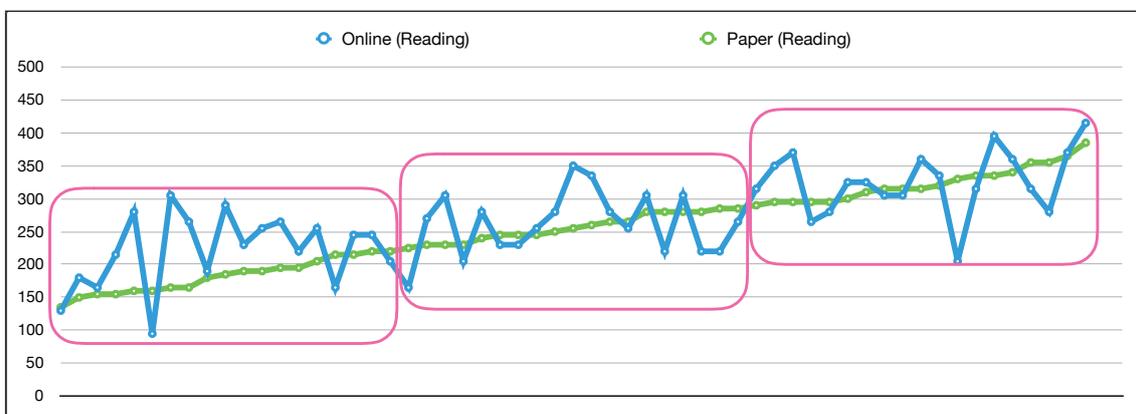


Figure 2. Participants' paired scores for the online and paper-based TOEIC Reading test ($N = 57$). Mean differences: Lower (left) $m = 53.42$ (95% CIs = 35.73, 71.12), $sd = 39.34$, $n = 19$, Middle (center) $m = 40.00$ (95% CIs = 28.32, 51.68), $sd = 25.98$, $n = 19$, Upper (right) $m = 36.58$ (95% CIs = 22.99, 50.17), $sd = 30.23$, $n = 19$.

By dividing the participants into groups of 19³ (rounded rectangles in Figures 1

³ Participants were divided into three groups because groups were equal in size and participants with the same paper-based scores were not in different groups. Comparing three groups might have created artificial group differences. Two and four groups were also investigated. See Appendix B.

and 2), listening scores appear to stabilize in the upper right one-third of Figure 1. This would indicate that students scoring higher on the paper-based TOEIC listening test also generally scored higher on the online test, and that differences between these two TOEIC listening tests were narrower for higher scoring participants. A one-way ANOVA tested whether there were statistical differences between the scale score differences for these three groups (*i.e.*, higher, middle, lower). Assumptions of normality were met. For Listening, the ANOVA was significant with a near large effect [$F(2, 54) = 4.04, p = .02, \omega^2 = .096$], with the Lower and Upper groups being significantly different from each other. One participant, in the most left of Figure 1, has a difference of 225 scale points between these two listening tests. Temporarily removing this participant also resulted in a significant ANOVA with a medium-sized effect [$F(2, 53) = 3.41, p = .04, \omega^2 = .079$], with once again the Lower and Upper groups being different. For Reading, the ANOVA, however, indicated that there were no statistical differences between differences in test scores between these three groups (*i.e.*, Lower, Middle, Upper) [$F(2, 54) = 1.44, p = .25, \omega^2 = .051$]; however, the effect size was small-to-medium.

Finally, before combining the data from participants who completed the paper-based TOEIC L&R on Day 1 with those who completed this test on Day 3, the participant who scored 225 points higher on the online listening test than on the paper-based test was permanently removed. Descriptive statistics for the participants ($N = 56$) are displayed in Table 6. The online Listening test data were somewhat negatively skewed. The remaining variables had acceptable values for skewness, kurtosis, and the Shapiro-Wilk test. Histograms, density plots and Q-Q plots were visually inspected, and no unexpected observations were made, with no outliers. Thus, the variables were assumed to be normally distributed; however, taking into consideration the performance of the listening tests on the analyses described above, caution might be warranted. An earlier draft of this paper ran all further analyses with and without the participant with the gap of 225 points on the listening tests. Descriptive statistics for the participants including this participant can be seen in Appendix C.

Table 6. *Descriptive Statistics for TOEIC L&R per Skill per Format (N = 56)*

	Listening		Reading	
	Online	Paper	Online	Paper
<i>M</i>	336.79	299.64	270.27	254.11
Lower 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	321.87	255.27	252.84	237.39
Upper 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	351.71	314.02	287.70	270.83
5% Trimmed <i>M</i>	339.40	299.60	271.30	253.70
<i>SD</i>	56.97	54.90	66.54	63.83
Median	340	305	275	235
Variance	3245.84	3013.51	4427.65	3106.49
Min (Max)	175 (440)	185 (440)	95 (415)	135 (385)
Range	265	255	320	250
<i>IQR</i>	85.00	66.25	95.00	93.75
Skewness (SE)	-0.58 (.32)	0.06 (.32)	-0.03 (.32)	-0.02 (.32)
Kurtosis (SE)	0.24 (.63)	.062 (.63)	.92 (.63)	-0.04 (.63)
Shapiro-Wilk (<i>P</i>)	.97 (.17)	.99 (.70)	.97 (.25)	.99 (.95)

Results

Research Question 1 – TOEIC L&R Online and Paper-based Score Correlations

Correlation analyses investigated the strength of the relationships between the online and paper-based TOEIC tests for listening and reading. The data met the assumptions required for parametric testing; thus, Pearson's r was used. There was a significant correlation between the online and paper-based TOEIC Listening tests [$r = .742$ (95% CIs = .596, .841), $p = <.001$], and there was a significant correlation between the online and paper-based TOEIC Reading tests [$r = .676$ (95% CIs = .503, .797), $p = <.001$].

Research Question 2 – TOEIC L&R Online and Paper-based Score Comparisons

Paired samples t-tests were run comparing mean scores for each of Listening and Reading (*i.e.*, paper-based and online). The data met the assumptions for parametric tests; thus, Student's t-tests were run. Results are shown in Table 7. Following the Bonferroni correction, the p -value for Reading ($\alpha_{\text{altered}} = .05/2 = 0.025$) remained statistically significant. Table 7 also includes effect sizes with confidence intervals. For Listening, the effect size was near large, and for Reading, the effect size was near small, with wide boundaries for both.

Table 7. Paired Samples Student's *t*-Tests for TOEIC L&R Online vs Paper-Based

TOEIC	Statistic	df	<i>p</i>	Effect Size	95% CI for Effect Size	
					Lower	Upper
Listening	6.916	55	<.001	0.924	0.608	1.235
Reading	2.303	55	0.025	0.308	0.038	0.575

Note. The effect size for Student's *t*-test is Cohen's *d*.

Research Question 3 – 2019 and 2020 Cohort TOEIC L&R Data Comparisons

This question was answered using independent samples *t*-tests comparing scores from the end-of-Year 1 paper-based TOEIC L&R for 2019 ($N = 202$) with the scores from the paper-based and online version of the TOEIC L&R from the main group of participants in this study ($N = 56$). For descriptives for the 2019 cohort, see Appendix C. The Shapiro-Wilk Test of Normality and Levene's Test of Equality of Variances were violated for the comparison of the two groups' paper-based scores for Reading; thus, the Mann-Whitney test was used because this test does not require the assumption of normality nor homogeneity of variance (Goss-Sampson, 2020). For the paper-based and online comparison of scores for Reading, the Shapiro-Wilk Test of Normality was violated; however, equality of variance was met. For this comparison, both the Student's *t*-test and the Mann-Whitney test were used. As shown in Table 8, for Listening and Reading, the differences in mean scores for the paper-based tests were nonsignificant (initially for Listening, and for Reading following the Bonferroni correction). Also, the effect sizes were negligible for Listening and Reading. However, the differences in mean scores between the paper-based and online tests were significant with a medium-sized effect size for Listening, and small-to-medium for Reading, with wide confidence intervals.

Table 8. Independent Samples *t*-Test for TOEIC Listening and Reading Scores

TOEIC	Comparison	Statistic	df	<i>p</i>	Effect Size	95% CI for Effect Size	
						Lower	Upper
Listening	Paper-Paper	1.530	256	<.127	0.231	-0.066	0.528
	Paper-Online	5.559	256	<.001	0.840	0.533	1.144
Reading	Paper-Paper	4547.500		<.025	0.196	0.027	0.354
	Paper-Online	4.180	256	<.001	0.631	0.330	0.932
	Paper-Online	3669.500		<.001	0.351	0.193	0.492

Note. *The effect sizes for the Student's *t*-tests are Cohen's *d*; except for Mann-Whitney test for Reading Paper-Paper which is given by the rank biserial correlation.

Discussion

This study reported on a test-retest design in which approximately 25% of first-year students at UoN completed the paper-based and online TOEIC L&R tests on consecutive days at the end of one academic year. The participants were randomly assigned to complete the paper-based TOEIC L&R either on Day 1 of the research program or Day 3, and the online TOEIC L&R on Day 2. Before combining the data from Day 1 and Day 3, the data underwent close inspection. Mean scores on these two days were similar. It was observed that a large percentage of participants, for both listening and reading, scored ± 35 scale points different on the two tests (*i.e.*, online and paper). It was also observed that higher performing participants on the paper-based TOEIC listening test generally performed higher on the online TOEIC listening test. The same phenomenon was not observed for the two reading tests. Before combining the data from test days, one participant was permanently deleted. The correlations (RQ1) between the two listening tests ($r = .742$) and two reading tests ($r = .676$) were large; however, these correlations were smaller than those observed by Kanzaki (2017) for two versions of the paper-based TOEIC L&R ($r = .80$ and $r = .84$, respectively). The paired sample Student's *t*-tests results (RQ2) indicated that the mean scores for the two listening tests significantly differed, but after applying the Bonferroni correction, the mean scores for the two reading tests did not, with a medium-sized effect size for the former. Comparing the scores of the 2019 cohort with the participants in this study (RQ3), the results from the two paper-based TOEIC L&R were similar; however the results from the paper-based TOEIC L&R (2019) were significantly different from the online version of the TOEIC L&R (2020).

Mean differences for Listening (37.15) were greater than for Reading (16.16), and these values were much greater than those observed by Cid et al (2017) (1.39 and 3.11 respectively) The value for Listening was also much greater than that observed by Kanzaki (2017 (0.96); however, the value for Reading was comparable (11.46). However, Cid et al and Kanzaki compared two versions of the paper-based TOEIC L&R, whereas this study compared the paper-based and online versions. Score differences between the two versions in this study, in particular for Listening, along with the noted phenomenon that the Listening tests had narrower differences for higher-performing participants, might challenge the claim from IIBC that the two tests, online and paper-based, produce comparable results. Unfortunately, one important limitation with the current study relates to test security. The online version of the TOEIC L&R was completed offsite without proctors overseeing test

security. The possibility of students subverting standard test-taking procedures in order to gain unfair advantages is not zero. However, while this possibility is not zero, no advantages are gained for doing so.

Assuming that both the online and paper-based TOEIC L&R are reliable, producing comparable scores, other explanations are needed, in particular for the differences in listening scores. One possible factor is test-taking motivation (*i.e.*, participants might have been more motivated to complete the online test, for which they had higher scores). A second possible factor is academic dishonesty when completing the online TOEIC L&R (*e.g.*, sharing answers while sitting the test together, reporting questions to those who sat the test later, sitting the test for a another). But why were mean score differences for the listening tests so much greater than those for the reading tests? Might we assume that dishonest participants were those with the greatest differences between the online (higher) and paper-based (lower) scores? Appendix D displays Student's *t*-test simulation data for paired samples. The rows, with diminishing *n*-sizes, display the *t*-test results after removing at each new step the top 5% of scores with the greatest differences between the online and paper-based TOEIC Listening tests. In all, 45% of the participants would need to be eliminated before the *t*-test is nonsignificant and the effect size crosses the zero. For Reading, removing less than 4% of the top values with the greatest differences between the online and paper-based tests resulted in a nonsignificant *t*-test. In other words, assuming that score difference is accounted for by academic dishonesty, we need to be convinced that approximately half of the participants successfully engaged in academic dishonesty on the online listening test, but not on the online reading test. Although unprovable, it is difficult to believe that nearly half of the participants completed the online test under these conditions with these results.

Assuming that some participants were dishonest when sitting the online TOEIC L&R, what might UoN or other institutions do in the future? To ensure that students follow proper procedures during the online test, institutions might benefit from adopting the following procedures. First, require students to complete an academic integrity pledge before the online exam. Remind students of the academic integrity codes and the consequences for breaking those codes, and require students to agree to or sign, even electronically, the pledge. Second, restrict the test window by starting the test at the same time for all examinees. This would remove the possibility of one examinee reporting questions to others, or one examinee taking the online test for multiple participants. Third, sit the test within an online meeting with cameras turned on, such as during an online synchronous class via Zoom or Microsoft Teams.

This eliminates the possibility that people other than the examinees complete the exam. If this is not possible due to hardware or software limitations, an alternative could be to track IP addresses that reveal the locations of the examinees. Alternatively, safe exam browser software that locks down browser windows and applications that can open during an online test could be used. Safe exam browsers, however, would increase the cost of the test.

However, assuming that participants sat the online test honestly and seriously, the results of this study raise a number of points. Specifically, the results would fail to meet several underlying claims of language assessment validity (Chapelle, 2021). For example, if the online tests are overestimating each participant's scores, compared with the paper-based test, and if the different sections are performing differently, the test scores do not accurately reflect or explain the tested construct of English listening and reading for international communication. Consequently, the participants are likely unable to accept the meaning of the scores. This would be especially true for students whose two scores, on consecutive days vary greatly. These results would also impact generalizability as they do not appear to reflect consistent, or reliable, performance. Therefore, the scores would fail to accurately summarize test-taking performances. However, as has been stated, the possibility of some students having engaged in academic dishonesty is not zero; therefore, challenges to validity need to be accepted cautiously.

Conclusion

This paper compared the mean scores from two TOEIC L&R tests (*i.e.*, the paper-based version and the newer online version). Participants were randomly assigned to complete the paper-based TOEIC L&R test either one day before or one day after the online TOEIC L&R test. The paper-based test results were closely inspected before being combined into one data set. This inspection revealed that (a) a large percentage of participants, for both listening and reading, scored outside the SEdiff of ± 35 scale points on the two tests (*i.e.*, online and paper); and higher performing participants on the paper-based TOEIC listening test were more likely to also score higher on the online TOEIC listening test, but the same was not observed for the two reading tests. While paired-skill correlations were large, the paired-sample Student's t-test results indicated that the two listening tests were significantly different with the online test being approximately 37 scale points higher, and the reading tests were not significantly different after applying the Bonferroni correction. This paper is important because there are heretofore no published papers which have compared

the paper-based TOEIC L&R test with its online version. For listening, the differences between the higher online scores and lower paper-based scores challenge the claim from IIBC that the two tests result in parallel scores with parallel interpretations. Test-taking motivation variation might be one factor to explain the differences in scores as shown by the comparisons between scores from the CASEC test at the beginning of the year and the paper-based TOEIC L&R test at the end of the year. Unfortunately, this paper had one important limitation—test security. While the participants sat the paper-based TOEIC L&R test with proctors present, they sat the online test at their homes without proctors. Thus, the probability that some participants used nonstandard test-taking procedures is not zero, and this is a potential factor in the differences in scores. However differences between the results from the pairs of listening tests and the pairs of reading tests lessen this possibility. Finally, one additional possibility was recently suggested. An audiophile has suggested that audio quality differences between the paper-based listening test where the participants sat in a university classroom using built-in ceiling speakers and the online listening test where many participants might have sat the test while using higher quality earphones or headphones that they are used to might account for some of the difference, in particular might account for higher scores on the online listening test.

Acknowledgements

This research was supported by a grant from UoN President Kindaichi Masumi. Prof. Saka Junichi and other English faculty members provided material support. Two research assistants, Oshima Shiori and Sakuyama Rinka assisted with preliminary analyses.

References

- CASEC. (n.d., a). *About CASEC*. <https://global.casec.com/about/>
- CASEC. (n.d., b). *CASEC official score report*. <https://casec.evidus.com/about/feedback.pdf>
- ETS. (2019). *Score User Guide: TOEIC Listening and Reading Test*. <https://www.ets.org/s/toEIC/pdf/toEIC-listening-reading-test-user-guide.pdf>
- Chappelle, C. (2021). Validity in language assessment. In P. Winke & T. Brunfaut, *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Language Testing* (pp. 11-20). New York: Routledge.
- Cid, J., Wei, Y., Kim, S., & Hauck, C. (2017). *Statistical Analyses for the Updated*

- TOEIC® Listening and Reading Test. Research Memorandum: *ETS RM-17-05*. ETS. <https://www.ets.org/Media/Research/pdf/RM-17-05.pdf>
- Field, A. (2020). *Discovering Statistics Using SPSS* (5th ed.). Sage Publications.
- Goss-Sampson, M. A. (2020). *Statistical analysis in JASP: A guide for students*. *JASP v0.14*. <https://doi.org/0.6084/m9.figshare.9980744>
- Howell, D. C. (1997). *Statistical methods for psychology* (4th ed.). Duxbury Press.
- IIBC. (2020a). TOEIC Program Data & Analysis: Number of examinees and average scores in FY2019. https://www.iibc-global.org/library/default/english/toEIC/official_data/pdf/DAA_english.pdf
- IIBC. (2020b). About the TOEIC® Listening & Reading Test. <https://www.iibc-global.org/english/toEIC/test/lr/about.html>
- IIBC. (2020c). *TOEIC Program IP* テスト(オンライン). https://www.iibc-global.org/toEIC/corpo/guide/toEIC/online_program.html
- IIBC. (2020d). 特集。場所と時間を問わずに活用できるIIBCのオンラインプログラム。 [Special Feature: IIBC's online program that can be used at any time and place.] https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter/n1141_feature_01.html
- IIBC (2020e). TOEIC®リスニング&リーディングIPテスト(オンライン)、AIを活用した試験冠詞サービスの開発に関するお知らせ [Notice regarding the development of TOEIC (R) Listening & Reading IP test (online) and AI-based test monitoring service]. <https://www.iibc-global.org/iibc/press/2020/p165.html>
- Im, G. - H., Shin, D., Cheng, L. (2019). Critical review of validation models and practices in language testing: their limitations and future directions for validation research. *Language Testing in Asia*, 9, 14. <https://doi.org/10.1186/s40468-019-0089-4>
- JASP Team (2020). *JASP* (Version 0.13.1) [Computer software].
- Kanzaki, M. (2017). New and old TOEIC L&R: Score comparison and test-taker views on difficulty level. *PanSIG Journal 2017*, 104-112.
- Nikkei (2020 March 10). IIBC、TOEIC Programの団体特別受験制度（IPテスト）にオンライン方式を追加 [IIBC adds online method to TOEIC Program group special examination system (IP test)]. https://www.nikkei.com/article/DGXLRS530559_Q0A310C2000000/
- Plonsky, L., & Oswald, F. L. (2014). How big is “big”? Interpreting effect sizes in L2 research. *Language Learning*, 64(4), 878-912. doi:10.1111/lang.12079
- Suzuki, Y. (2021). An overview of new operating practices for private English tests during and after the COVID-19 outbreak. *Tokyo University of Marine Science and Technology Bulletin*, 17. 72-77. <http://id.nii.ac.jp/1342/00002042/>
- Wei, Y. & Low, A. C. (2017). Monitoring Score Change Patterns to Support TOEIC

Listening and Reading Test Quality. *ETS Research Report RR-17-54*. https://www.ets.org/research/policy_research_reports/publications/report/2017/jyez

Appendix A

CASEC

The three cohorts had similar mean CASEC scores: 2018 ($m = 566$, $sd = 78$), 2019 ($m = 574$, $sd = 75$), and 2019 ($m = 577$, $sd = 69$). For each cohort, there were several outliers, kurtosis was high and significant with significant values for the Shapiro-Wilk's test. A Kruskal-Wallis one-way non-parametric ANOVA was run to test for group differences by year. CASEC scores were not significantly different by year $H(2) = 2.43$, $p = .297$, $\varepsilon^2 = .003$.

TOEIC Listening

The 2020 cohort seemed to have higher TOEIC listening mean scores: 2018 ($m = 241$, $sd = 63$), 2019 ($m = 234$, $sd = 59$), and 2020 ($m = 281$, $sd = 59$). Skewness, kurtosis, and the Shapiro-Wilk p -values were significant. A Kruskal-Wallis one-way non-parametric ANOVA was run to test for group differences by year, for TOEIC Listening scores. TOEIC listening scores were significantly different by year $H(2) = 84.30$, $p < .001$, $\varepsilon^2 = .121$. Pairwise comparisons showed that Cohort 2018 and 2019 were not significantly different ($z = 1.31$, $p = .10$); however, Cohort 2020 was significantly different from both Cohort 2018 and Cohort 2019 ($z = 7.11$, $p < .001$, and $z = 8.55$, $p < .001$, respectively).

TOEIC Reading

The 2020 cohort seemed to have higher TOEIC listening mean scores: 2018 ($m = 182$, $sd = 59$), 2019 ($m = 186$, $sd = 54$), and 2020 ($m = 228$, $sd = 55$). Skewness, kurtosis, and the Shapiro-Wilk p -values were significant. A Kruskal-Wallis one-way non-parametric ANOVA was run to test for group differences by year, for TOEIC Reading scores. TOEIC reading scores were significantly different by year $H(2) = 100.22$, $p < .001$, $\varepsilon^2 = .144$. Pairwise comparisons showed that Cohort 2018 and 2019 were not significantly different ($z = 1.35$, $p = .09$); however, Cohort 2020 was significantly different from both Cohort 2018 and Cohort 2019 ($z = 9.19$, $p < .001$, and $z = 7.97$, $p < .001$, respectively).

Appendix B

Independent Samples T-Test for Listening (n = 57)

The data were nonparametric (Levene's test of equality of variance $p = .038$). A Mann-Whitney test showed that the mean differences for the lower half (Median = 42.50, $n = 28$) were similar to the upper half group (Median = 25.00, $n = 29$), $U = 526.00$, $p = .06$, with a negligible effect size, $r = .30$.

Independent Samples T-Test for Listening (n = 56)

Removing the participant with the gap of 225 scale points between the two tests resulted in the data meeting the assumptions of normality. The Student's t-test was nonsignificant, $t(55) = 0.91$, $p = .37$, and Cohen's d was small (0.51) but its 95% CIs were wide and crossed zero (-0.03, 1.04).

Independent Samples T-Test for Reading (n = 57)

The data met the assumptions of normality. The Student's t-test was nonsignificant, $t(54) = 1.89$, $p = .06$, and Cohen's d was negligible (0.24), with its 95% CIs being wide and crossing zero (-0.28, 0.76).

ANOVAs for Online and Paper-Based TOEIC Listening with Four Groups (n = 57)

	<i>Post Hoc Comparisons</i>							
	F	Df	p	ω^2	Groups	t	Cohen's d	p_{Tukey}
Listening ($n = 57$)	4.50	3, 53	0.007	0.16	1 vs 4	3.65	1.23	0.00
Listening ($n = 56$) ^a	3.99	3, 52	0.012	0.14	1 vs 4	3.34	1.36	0.01
Reading ($n = 57$)	2.19	3, 53	0.108	0.06	NA			

a. The t-test was rerun after temporarily removing the participant with the largest gap between the online and paper-based scores.

Appendix C

Descriptive Statistics for TOEIC L&R per Skill per Format (N = 57)

	Listening		Reading	
	Online	Paper	Online	Paper
<i>M</i>	337.46	297.02	269.56	253.95
Lower 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	322.74	281.99	252.39	237.52
Upper 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	352.17	312.05	286.74	270.37
5% Trimmed <i>M</i>	335.73	297.55	270.49	253.53
<i>SD</i>	56.69	57.90	66.16	63.27
Median	340	305	270	255
Variance	3213.50	3352.55	4377.04	4002.44
Min (Max)	175 (440)	150 (440)	95 (415)	135 (250)
Range	265	290	320	250
<i>IQR</i>	85.00	70.00	95.00	90.00
Skewness (SE)	-0.62 (.32)	-0.13 (.32)	-0.21 (.32)	-0.02 (.32)
Kurtosis (SE)	0.28 (.62)	0.24 (.62)	.01 (.62)	-0.89 (.62)
Shapiro-Wilk (<i>P</i>)	.97 (.13)	.99 (.81)	.99 (.97)	.98 (.30)

Descriptive Statistics for Cohort 2019 (N = 202) for the Paper-Based TOEIC L&R

	Listening	Reading
<i>M</i>	285.67	233.52
Lower 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	277.13	225.83
Upper 95% <i>CI</i> for <i>M</i>	294.21	241.21
5% Trimmed <i>M</i>	285.00	232.34
<i>SD</i>	61.91	55.74
Median	285	235
Variance	3833.25	3106.49
Min (Max)	125 (475)	110 (415)
Range	350	305
<i>IQR</i>	80.00	75.00
Skewness (SE)	.16 (.17)	.32 (.17)
Kurtosis (SE)	.44 (.34)	.48 (.34)
Shapiro-Wilk (<i>P</i>)	.99 (.26)	.99 (.03)

Appendix D

Paired Sample T-Test Results for Online and Paper-Based TOEIC Listening and Reading

Listening						95% CI for Effect Size	
N	Cumulative% Deleted	Statistic	df	p	Effect Size	Lower	Upper
54	5.26	6.61	53	<.001	0.90	0.58	1.21
51	10.53	6.20	50	<.001	0.87	0.54	1.19
48	15.79	5.72	47	<.001	0.83	0.49	1.15
45	21.05	5.14	44	<.001	0.77	0.43	1.10
42	26.32	4.55	41	<.001	0.70	0.36	1.04
39	31.58	3.92	38	<.001	0.63	0.28	0.97
36	36.84	3.24	35	<.001	0.54	0.19	0.89
33	42.11	2.49	32	0.018	0.43	0.07	0.79
32	43.86	2.25	31	0.032	0.40	0.04	0.76
31	45.61	2.00	30	0.054	0.36	-0.01	0.72
30	47.37	1.74	29	0.090	0.32	-0.05	0.68
Reading							
57	0.00	2.26	56	0.028	0.30	0.03	0.56
56	1.75	2.01	55	0.049	0.27	-0.01	0.53
55	3.51	1.76	54	0.083	0.24	-0.03	0.50
54	5.26	1.53	53	0.129	0.13	-0.63	0.48

Note. Student's t-test effect sizes are given by Cohen's *d*.

a Wilcoxon paired sample t-test for nonparametric data was used, the effect size is given by matched rank biserial correlation

地方大学にみる地域人材育成のあり方 —地域創生の先駆的大学と長野市地域の企業調査を中心に—

宮下 清

概要

大学の役割には教育、研究に加え、社会貢献があげられる。地方創生が求められる近年、地域の社会人育成は大学の地域貢献の一つとしてその重要性が高まっている。本論では特に地方大学を対象に大学の地域人材育成における現状や課題を明らかにすることを目的とする。地域創生に先駆的で社会人育成に実績のある地方大学へのヒアリング調査からわかったことは、いずれの大学もそれぞれが有する資源を活かし、地域に適合する内容や方法で地域人材育成に取り組んでいることであった。また事例とした長野市とその周辺の地域企業に対するアンケート調査から地方大学が果たすべき地域人材育成の現状と課題が伺えた。これらの結果を含めた分析と考察によって、地方の大学は都会の大学が果たしてきた標準的教育による人材育成だけでなく、地域資源を活かした地域人材育成を目指すべきと考えられる。

〈キーワード〉 地方大学、地域貢献、社会人育成、地域人材育成、地域資源

1 はじめに

大学の役割としては、従来から確立されている教育と研究に加え、近年では社会貢献の役割がますます大きくなってきている。これは2006年の教育基本法の改正により、大学の役割と示されたことにより確立されたものである。さらに地方や地域の再生に注目が集まる中、地域人材の育成は大学の地域貢献の一つとしてその重要性が高まっている。

大学の地域貢献の内容としては、大学教育機会の提供、地域を支える専門人材の育成、大学の知的資源の地域社会への還元という3点が指摘されている（長田、2015）。さらに大学の地域貢献の役割について多様に捉えると、①新時代の方向性を社会に示す、②専門的な知識技術を市民に還元する、③地域の価値の再発見、④地域コーディネーター、⑤地域の取り組みの発信と先進事例を地域に紹介、⑥公益的分野の事業の役割、⑦小中高と連携し地域の教育力の向上という7つの役割が示されている（呉、2006）。

文部科学省は、2018年6月に閣議決定された「社会人の学び直しに関する提言」などリ

カレント教育の拡充に向けて多くの取り組みを示している。この背景には社会が高度複雑化して多くの知識や技術などが求められるようになり、いったん大学などで学んだ後にもさまざまな知識の獲得、すなわち学び直しの必要性が高まったことがある。さらに少子化により18歳人口が減少していることもある。これには大学進学率の上昇もあったが、それも限界があり、社会人など多様な学生の入学を増やしたいという大学運営の事情も考えられる。

これまでの「大学による地域人材の育成」として、まず大学の社会人教育をあげることができる。そうした社会人教育では大学が存在する地域は問われず、どのような学位、知識や技術が得られるのかが重要であり、そのための教育プログラムが問われてきた。大学進学率が2割台と低かった1970～80年代に働きながら通学し、大学卒の資格を得たいという社会人が社会人学生となった。その多くは地方から就職のため上京し、働きながら学ぶ社会人学生であり、勤労学生と呼ばれていた。現在の社会人学生は退職後のシニアやパートで働く人など年齢や学習の目的も多様になっている。これまでは社会人が大学で学ぶのは地域社会に貢献したいというより、自らのキャリアアップや能力向上のためという理由が大きかったと思われる。

地方では社会人教育を行う大学があるのはほとんど県庁所在地などであり、働きながら大学に通う社会人も少なく、社会人を受け入れる制度も公開講座などに限られていた。しかし、現在では地方創生の影響や大学の地域貢献重視から、地方の大学においても社会人育成はこれまで以上に重要となっている。そこで本論では地域貢献の役割が特に大きくなっている地方の国公立大学を主たる対象として、大学の地域人材育成の現状や課題を明らかにしたい。

社会人育成に先駆的な地方大学にヒアリング調査を行った結果、いずれの大学でも共通して地域連携や産学官連携が行われ、地域貢献への高い意欲と取り組みがみられた。しかし、その内容や形態、実施方法は大学の歴史や保有する資源、地域の特性や地理的条件、地域と大学との関わりなどから決まるため、多様なものであった。本論では大学へのヒアリング調査に加えて、長野市および周辺地域の企業を対象にしたアンケート調査の結果を含めた検討を行い、地方大学の地域人材育成のあり方を考察する。

2 大学による地域人材の育成

2-1 地域人材育成の意味

大学の地域貢献に含まれる「地域人材」や「地域人材育成」とは、どのような人材や育成を意味するのだろうか。本論では地域人材育成の意味を考えるにあたり、関連用語であり、前提ともなる「地域連携」の意味を明確にしておきたい。「地域連携」とは地域の課題を克服・解決することを目的として地域の様々な主体が連携するものである。地域で連携する主体としては、国や地方自治体、医療機関、企業、NPOや大学などがあるが、本論では大学の地域連携活動を対象とする。

続いて大学の地域連携活動の目的や方法に大きく関わり、本論のテーマでもある「地域人材育成」について考えてみたい。これは「地域の人材育成」また「地域人材の育成」のどちらにも解せる言葉であるが、社会貢献や地域連携における地域人材育成となると「地域の人材育成」の方に主眼が置かれる。つまり広く地域の人たちを対象とする育成が「地域人材育成」になると考えられる。

「地域の人材育成」では、大学のある地域に暮らし、働く人すべてが対象となる。多くは社会人やそれと同年代の人たちであり、具体的には企業や団体に働く人、農業や自営業で働く人、アルバイトやパートタイマーで働く人、家事や介護などをする人たちである。さらに小中学校の児童生徒などが含まれる場合もある。

一方、「地域人材の育成」は、どのような意味になるだろうか。まずは「地域人材」の意味を確認する必要があるだろう。「地域」と「人材」では、それぞれが用語として確立しているが、「地域人材」となると辞書に意味が示されている用語ではない。そのため本論では、地域人材を「一定範囲の地域に住み、働くなどの社会活動を行っている人々」と定義する。この定義によると「地域人材の育成」であっても、「地域の人材育成」であっても、ほとんど同じ意味と解せることになる。

しかし、意図的に「地域人材の育成」を用いる場合、やや限定された使われ方がみられる。西村（2019）は社会人教育において、地域人材の育成が大学に期待されていると記している¹。こうした場合、社会人を対象とする大学院などでは、地域の発展や活性化を引張る地域のリーダー人材という意味で地域人材が使われている。

このように関連する用語の意味は少しずつ異なるものの、それらの区別は時間の経過と共に重なり、また変化する。例えば地方大学の学生が地域企業に就職すれば、地域人材になり、また地域の人材となって大学の地域人材育成の対象に加わることになる。さらに、2010年頃から地方の国公立大学を中心に地域系学部と称する、地域人材育成を目的とした学部の設置があり、そのような地域系学部では学生を地域人材として育成することがみられる。ここでは地域人材育成の対象は所属する学部生となり、地域人材育成とは大学の「地域貢献」と「教育」という双方の機能を一体化させたものになっている²。

2-2 大学による社会人育成

大学の「地域人材育成」は社会人育成に含まれるもので本論の中心概念であるが、その前に一般的でより広い概念である「社会人育成」を検討しておきたい。大学での社会人育成の具体的な方法として、生涯教育や社会人大学・大学院の開設が求められ、社会人が大学で学ぶ機会は徐々に増えている。かつては大学と言えば高校を卒業したばかりの、職業

1 西村（2019）は、大学の社会人を対象とする教育では、地域リーダー養成への寄与が地域から期待されていることを、三重大学大学院地域イノベーション研究科の設立理由としてあげている。

2 伊藤（2019）は、鳥取大学地域学部や宮崎大学地域資源創生学部を対象に、地域人材育成を目指すカリキュラムの課題を論じている。

経験のない20歳前後の若い学生が学ぶ場という認識であった。しかし、現在の大学では仕事をしながら学ぶ人や退職した人などが増え、より多様な学びの場となっている。その中でも、2018年に閣議決定された「人づくり革命基本構想」では、社会人の学び直しである「リカレント教育」の拡充が示された。そこでは、リカレント教育の対象講座を拡大し、産学連携による実務型プログラムなどプログラム開発の支援が提言されている。

社会人が学ぶ方法としては、大学の授業を受講し単位を履修すること、単位は取得せずに聴講することや公開講座などの社会人対象のプログラムに参加するなど、その方法も多様化している。しかし、こうした社会人向けの学習機会は大学だけが提供するものではなく、専修学校や研修機関、さらには試験や資格認定を行う機関や海外の大学など多様な組織が提供している。働く社会人にとっては外部の教育や研修を受講する場合は、多くの講座を探索し選択することになる。またそれ以前に所属する組織の研修、教育訓練、また自己啓発プログラムを受講することも少なくない。

2-3 大学教育と社会人教育

文部科学省の調査結果（2018）では、2015年時点で大学・専修学校などで学ぶ社会人受講者は約49万人で内訳は正規課程が約6割、科目等履修生など短期プログラムが4割である。また大学の公開講座の受講者数は2014年度で約139万人と、20年前の2倍以上、10年前から3割増と増加している。このように公開講座の受講者は増加しているものの、大学で社会人が学ぶ上での課題としては従来から「時間がない」、「費用が掛かる」、「カリキュラムがわからない」などがあげられている（厚生労働省、2019）。

また企業の8割と、その多くは外部の教育研修では民間の教育訓練機関を活用し、大学を活用する企業はわずかである。その理由には「大学を活用するという発想がなかった」、「大学でどのようなプログラムを提供しているかわからなかった」、「教育内容が実践的でなく業務に生かせない」などがあげられている。

これらの結果から、大学の教育内容や方法は学生教育を主たる目的としたものであり、そのまま社会人教育には使えるものは少ないことが判明する。また実際には社会人教育に有効かもしれないが、その確認や提示などはないため、社会人を受け入れる大学教育の存在が知らされていないことも考えられる。一方、企業側からも大学との関わりは普段ほとんどなく、大学が開放している授業や社会人向けのプログラムの理解が不足しているかもしれない。また大学が公開する授業やプログラムも年度で決められたものがほとんどで民間の教育訓練機関のようにプログラムの内容、方法また時期などの柔軟な対処は難しい。

このように大学の地域人材育成における現状にはいくつもの課題があることが明確となる。しかし、大学が社会人の学びのためにどんなプログラムを用意し、多様な制度を設けるべきかどうかなどは簡単に決められる問題ではない。大学は社会人教育で何をすべきか、地域からは何が求められているのか、大学の資源はどれほど活用できるのかなど、検討する課題が多くあり、最善の取り組みは大学と地域、そして時期や場所によって異なる。理

論的には、大学の資源活用と社会人教育のニーズが合致することとなるが、実際にはそれぞれがコミュニケーションをよく取り、摺り合わせていくこと、いわば試行錯誤の中から最適な解が浮かび上がってくる。

現在、大学で社会人が学べる一般的な制度としては、社会人特別入学者選抜、夜間開講制、科目等履修生制度、長期履修学生制度、通信制、専門職大学院、履修証明制度、サテライト教室、大学公開講座などがある。これらは、大学での教育機能を拡充して、応用した制度ということができる。

2-4 地方大学に注目する理由

本論は「大学による社会人育成」から限定された「地方大学による地域人材育成」の現状と課題を明らかにすることを目的としている。これはより一般的で広い大学の社会人育成から地方大学の地域人材育成に絞り込んだものである。それでは、なぜ地方大学に注目するのであろうか。その理由の一つは、大学と地域の人たちとの関係、距離感が異なることが考えられる。地域における大学の存在は、地方と都会では大きく異なり、実際に社会人が大学で学ぶ場合、その違いが大きく影響してくると思われる。ここでは、地方と都会の大学での社会人育成がどれほど違うかを確認し、その理由を整理してみたい。

東京など大都市の大学、いわゆる都会の大学を個々に比べると、地方の大学に比べて地域貢献、地域連携や地域人材育成などを見聞することは少ないと思われる。もちろん、東京や大阪などの大都会でも地元や郷土としての側面はあり、大学が地元の商店街と連携して地域貢献や地域の歴史や文化を取り上げる公開講座を行うことは少なくない。例えば大正大学（東京都豊島区）は地元巣鴨の商店街と共同でアンテナショップを開設しており、立正大学（東京都品川区）は近隣の戸越銀座商店街と連携して様々なプロジェクトに取り組んでいる。

2-5 東京都と長野県にある大学

ここでは、都会として東京都、地方として長野県を例にして、ある地域にどれほどの大学が存在しているのか、住民と大学の数とその割合はどれほど違うかを理解するため、具体的に比較してみたい。東京ではある一定地域（例えば渋谷区や八王子市など）で地域の大学と考えられる大学として、5～10校もの大学があげられる³。また物理的な距離の範囲だけでなく、鉄道網による通学圏にある大学（例えば中央線や小田急線の沿線）を地元の大学と考えれば、さらに多くの大学が地域の大学に加わる。大学だけでなく、高専、短大、専修学校や各種学校など様々な教育機関が地域貢献や人材育成に携わっている。仮に

3 東京・渋谷区にある大学：青山学院大学、国学院大学、実践女子大学、聖心女子大学、津田塾大学、日本赤十字看護大学、ヤマザキ学園大学、文化学園大学、日本経済大学など。

東京・八王子市にある大学：東京都立大学、中央大学、帝京大学、工学院大学、多摩美術大学、創価大学、東京薬科大学、東京工科大学、東京純心大学、拓殖大学、日本文化大学など。

東京を一つの地域とした場合、極めて多くの大学の地域活動が含まれ、ある特定大学の地域連携や社会人育成が注目されることはない。一定範囲の地域で多くの大学が地域貢献として社会人育成に取り組んでいるため、多くの大学が地域人材育成の役割を共同で担っているのである。

一方、地方においては地域にある大学はごく少数に限られる。県庁所在地などを除けば大半の市町村に大学は存在しないか、あっても1～2校となり、その地域で大学との関わりを考えると、特定の大学との結び付きは必然的に強くなる。もし大学に地域人材育成を期待するなら、その地域の大学、つまり地方大学にそれを求めることとなる。大都市であれば、ある一つの大学の地域貢献や人材育成に期待が持てなければ、いくつもの他の大学の中から期待出来る大学を探ることができる。このように地方と都会では大学に対する住民の意識や期待は大きく異なっていると考えられる。

長野県を例にすると、学都とされる松本市（人口約23.9万）の大学は、国立の信州大学（人文など5学部）と私立の松本大学、松本歯科大学の3校である。また県庁のある長野市（人口約36.8万）においても、国立の信州大学（工、教育学部）、公立の長野県立大学、私立の清泉女学院大学と長野保健医療大学の4校となる。他の市町村にある大学は上田市（人口約15.3万）の国立信州大学（繊維学部）と公立長野大学、茅野市（人口約5.5万）の公立諏訪東京理科大学、駒ヶ根市（人口約3.2万）の県立長野県看護大学、佐久市（人口約9.8万）の私立佐久大学、南箕輪村（人口約1.6万）の国立信州大学（農学部）であり、短期大学を含めると佐久市、飯田市と辰野町が加わるが、他の市町村に大学は存在しない⁴。このように長野県にある大学は10校（国立1、但しキャンパスは4、公立4、私立5）、大学を擁する市町村は6（短大を含めて9）である。これは東京の143校（国立12、公立2、私立129）、大阪55校（国立2、公立2、私立51）と比べると、大きな違いがある⁵。

また就業者数も大学数のいずれも大都市の方が地方より多いことは自明だが、住民数と大学数との比率から、一大学あたりの住民数を比較することで、地域における大学の位置づけが伺える。ここでも東京都と長野県を例とすると、それぞれ住民数と大学数は東京都が1,396.3万人と143校、長野県が203.0万人と10校で、一大学あたりの住民は東京都9.8万人、長野県20.3万人となる⁶。実際には該当する都道府県や周辺県の高校生はじめ大学進学に関わる住民数、年齢層、移動可能な地域、都県の面積など住民と大学との関係性や地理的条件などが異なり、単純に比較できないが、長野県では平均すると一大学あたり東京都の2倍以上の地域住民を抱えていると言える。

このデータからは一人あたりの大学数は、東京都は長野県の2倍程度であるが、これは大学数だけの比較であり、実際には東京には学生数の多い大規模大学が集まっているこ

4 松本市、長野市などの人口は2021.2.1現在 長野県毎月人口異動調査による
<https://www.pref.nagano.lg.jp/tokei/tyousa/jinkou.html> (2021.3.18)

5 2020年12月25日発表の文部科学省学校基本調査による

6 東京都の人口は2020.12.1現在、東京都の報道発表による 長野県は注6と同じ

と、通学できる範囲に含まれる人口、面積あたりの大学数や学生数を考えると、その差はさらに大きくなるだろう。この結果はおそらく想像通りかもしれないが、地方の人々にとって大学は数少ない、遠い存在であることが数値からも明らかになる。このように地方の大学は都会の大学に比べて、それぞれ一大学あたりの地域人材育成や地域貢献の役割や住民からの期待が2倍以上と大きくなっている。それこそが本論において、地方大学の地域人材育成に注目する理由である。

3 地域人材育成の大学ヒアリング調査

3-1 ヒアリング調査の概要

産学官連携や地域連携などを通して、大学は地域人材の育成に取り組んでいる。こうした社会人教育を含めた地域貢献は、全国の大学で取り組まれている。しかし、本論では地元となる地域に与える影響が大きく、地域の人たちにとっても存在が大きいと想定される地方大学での人材育成に焦点を当てる。それらの地方大学にみられる共通点、特徴や課題について考察していきたい。さらには東京など都会の大学が想定される一般的な大学の社会人教育や人材育成との違いについて考えていきたい。

地方大学の中でも地域人材育成に先駆的とされる各大学を訪問し、関係される方々からヒアリングを行わせて頂いた。地域の社会人育成を主たる対象にしていたが、学部学生や大学院生を対象にした地域人材育成も同時にまた関連して行われ、それらも含めている。次項からの事例報告では、社会人を主対象にする大学と学生を主対象にする大学とに分けているが、実際には双方が対象としており、ここでの区別は相対的なものに過ぎない。

また人材育成分野としては理工学や農学など理系も一部含まれるが、人文社会系での人材育成を中心としている。その理由は理工系、医療系、農学系などの専門分野は大学の地域貢献や社会人材育成においてもその取り組みが確立されており、人文社会系と同一に論じることはできないと考えるためである。

地域人材育成に取り組む大学でのヒアリングを実施したのは、2019年3月から2020年2月にかけてである。それぞれ1～2時間のヒアリングであり、地域人材育成とその取り組みについてテーマと主たる質問を事前に示し、概要と状況について自由にお話を伺った。

3-2 地域人材育成（社会人主対象）の大学

① 宮崎大学

宮崎大学には全学的な産業人材育成教育プログラムがあり、特筆すべきは県内9つの国公私立大学や経済団体の協力により、ICTによる各地域への授業配信を実現している点である。社会人向けの施策では公開講座、「まちなかキャンパス」での地域連携活動、「地域デザイン棟」での事業がある。

公開講座は大学の教育・研究の成果を活用し、地域住民の生涯学習ニーズの多様化・高度化に応えるものであり、2019年度前期で28講座、後期に31講座が各学部、地域デザイン

棟、まちなかキャンパスで開講されている。地域連携活動では「産学・地域連携センター」が相談窓口となり、地域活性化事業と関連する大学教員・学生とのマッチングを行い、連携事業を実現させている。

こうした産学・地域連携を象徴しているのが地域デザイン棟で、企業寄付によりキャンパス中心地に建設され、戦略的活動拠点として365日24時間開放されている。ここからも社会との連携に基づく地域人材育成が重視されていることが伺える。同棟では上記の公開講座やセミナーのほか、宮大夕学講座という社会人のための平日夜の講座、慶応大学丸の内キャンパス講演会のネット配信、キラキラ政治考という講義や討議や県内の首長による講義が平日夕に行われている。

② 滋賀大学

2017年、データサイエンス学部を設置し、全国的な注目を集めた滋賀大学は彦根高商以来の伝統があり、そして国立大学最大規模の経済学部を擁している。同大学は社会人育成プログラムも大変充実しており、全学組織である「社会連携センター」がその役割を担っている。同センターは社会人育成や小中高生向けの学校支援や教育体験、事業創出・地域創生、研究コンサルティングという多くの役割を果たしている。

2007年開始の「地域活性化プランナー学び直し塾」は自治体職員、NPO職員、一般市民が参加し、6月から翌年1月までに月2回程度集まり、全16回の講座が行われている。2015年からの「公共経営イブニングスクール」は各テーマ（2019年度前期は「AI自治体へのシフト」）で毎月、計6回の講座で自治体職員はじめ市民が受講している。さらに2019年度からは「行政経セミナー」が開催されている。このように自治体職員をはじめとする参加者が政策形成能力、数的解析能力、コミュニケーション能力、プレゼン能力、現場感覚を修得し、また一般市民との議論を通して地域政策の立案能力を高めており、大学による地域人材育成の先駆事例となっている。

③ 信州大学

信州大学は三大都市圏に近く、山岳など自然にも恵まれ、全国から学生が集まる長野県松本市に本部のある国立大学である。表1に示されるように、大学地域貢献度ランキングで2012年以降5年連続一位を獲得しており、地域貢献の先駆的な大学の一つである。

地域人材・社会人の育成については、市民開放授業（全学及び8学部の800の講義が対象で受講者は年間300人）、出前講義（公民館、学校などで年間140講座を実施、約1万人受講）、公開講座（地域住民を対象とした一般向け講座）など多くの実績がある。2018年度からは「信州100年企業創出プログラム」という地域人材育成につながる制度が始まった。このプログラムは「産学官連携推進機構」という全学組織が担当し、首都圏で高い専門性をもち、活躍する人材をリサーチフェロー（客員研究員）として長野県の企業が6か月の研究活動費を負担し受け入れるというユニークなものである。

表1 地域貢献度の大学ランキング

総合順位			大学	設立	本部所在地	総合 得点	組織・ 制度	学生・ 住民	企業・ 行政	グロー カル
2015	2014	2013								
1	1	1	信州大学	国	長野県松本市	87.5	21.0	28.6	26.4	11.5
2	3	2	宇都宮大学	国	栃木県宇都宮市	84.9	22.0	28.8	22.0	12.1
3	12	26	兵庫県立大学	公	神戸市	84.3	21.0	28.0	22.0	13.3
4	2	5	群馬大学	国	群馬県前橋市	83.9	18.5	28.6	22.1	14.7
5	5	13	長崎大学	国	長崎市	82.9	21.0	26.8	23.4	11.7
6	9	13	徳島大学	国	徳島市	81.5	22.0	26.2	23.2	10.1
7	4	3	岩手大学	国	岩手県盛岡市	80.2	22.0	25.8	20.5	11.9
8	7	7	北九州市立大学	公	北九州市	79.3	20.0	23.5	23.9	11.9
9	6	8	大阪市立大学	公	大阪市	79.1	20.0	26.0	21.6	11.5
10	10	6	長野大学	私	長野県上田市	78.8	23.0	24.7	18.2	12.9
11	24	11	大阪府立大学	公	大阪府堺市	78.1	20.0	24.0	22.2	11.9
12	14	3	茨城大学	国	茨城県水戸市	77.1	21.0	26.6	20.8	8.7
13	17	9	松本大学	私	長野県松本市	76.5	23.0	25.6	19.9	8.0
14	44	39	名古屋市立大学	公	名古屋市	75.3	20.0	23.2	23.9	8.2
15	22	18	大阪大学	国	大阪府吹田市	74.2	15.5	23.6	26.0	9.1
16	8	20	豊橋技術科学大学	国	愛知県豊橋市	74.1	17.5	24.4	19.1	13.1
17	45	20	鹿児島大学	国	鹿児島市	73.2	18.5	24.0	23.4	7.3
18	19	19	山口大学	国	山口市	72.9	22.0	18.9	21.3	10.7
19	19	31	静岡大学	国	静岡市	72.1	16.0	24.4	21.4	10.3
20	21	40	高知大学	国	高知市	71.6	22.0	20.4	20.5	8.7

出所：日経グローバルによる全国大学の地域貢献度調査ランキング（2015）に基づき、筆者作成

こうした人材と企業をマッチングし、週1～2日は大学で課題解決や人材育成プログラムに参加し、週3～4日は企業で持続的発展に必要な課題の研究と事業展開を行う。研究活動終了後は受入企業に就職、プログラム参加前の仕事と兼業、または他企業への就職や起業など多様なキャリアが期待されている。優れた研究成果をあげたリサーチフェローには信州大学客員教員の道も開けている。このように本制度は地域で求められる中核人材を首都圏から獲得し、地域人材を創出かつ活用することで地域貢献を果たすという新たなリカレント教育として注目されている。

④ 新潟県立大学

新潟県立大学は1963年開学の県立女子短期大学を前身として、2009年に国際地域学部と人間生活学部で開学し、2015年に大学院国際地域学研究科を設置した。2020年度から国際経済学部の新設と発展している同大学では、国際性の涵養、地域性の重視、人間性の涵養を基本理念としている。

ヒアリング調査では、地域における学生の活動、新潟県立大学の地域に対するアプローチ、地方公立大学としての役割、地域連携センターの活動概要について伺うことができた。地域人材育成の関連では、「特別受講制度」という制度があり、100人位の定年退職者などリタイアされた方が授業に参加しグループワークで積極的に発言しているとのこと。また社会人大学院には県庁職員などが受講していることを伺った。地域連携センターには専任

の教職員はおらず、兼任組織として成り立っている。新潟県立大学では限られた人材、予算そして教育研究の成果を活用し、地域貢献につなげていることが伺える。

⑤ 宇都宮大学

宇都宮大学は2008年以降の日経グローバル誌「地域貢献度調査」で何度もトップクラスの評価を得ている栃木県宇都宮市にある国立大学である（表1を参照）。さらに、地域貢献や地域連携に関わる地域デザイン科学部を2016年に設置している。

地域デザイン科学部は地域の課題解決に寄与するため、「地域活性化の中核的拠点」としての役割を果たすことが期待され、地域人材育成を目的としている。地域の課題に対応して、現場で実践的に行動するためには物的環境・社会環境・地域社会を一体的にデザインすることができる知識と能力が必要として、同学部では文理融合の教育を特色とする。

2019年度にスタートした大学院「地域創生科学研究科」は、活力ある持続可能な地域社会の形成、グローバル化社会への対応、イノベーション創出を基本方針としている。地域課題解決をめざす「地域デザイン科学部」を基盤にした大学院であり、文理融合など多様な分野の混成する研究環境から、時代をリードする人材育成を目指している。

これまで地域連携の中心となっていた地域連携教育研究センターでは、地（知）の拠点事業等による「終章コミュニティワーカー養成講座」などを行い、地域の社会人向けの教育研修プログラムでは、「UUカレッジ」という制度で学部授業をすべて開放している。このUUカレッジでは単位履修はしないため、従来の3分の1程度の費用で受講できるなど多様なニーズに応える制度となっている。現在、地域人材育成に関しては、公開講座、宇大未来塾、UUカレッジという社会人向けの育成施策があり、これらは地域創生推進機構の「宇大アカデミー」に統合され、充実が図られている。

3-3 地域人材育成（学生主対象）の大学

① 滋賀県立大学

1995年設立の滋賀県立大学は、その基本理念として地域志向を掲げている。そのため、全学で「地域共生論」などの地域教育プログラムが開講され、どの学部の学生も地域学を副専攻とし、「近江楽土」という大学独自の称号を取得できる。大学院には「近江環人地域再生学座」との副専攻があり、地域まちづくりの担い手を育成している。所定のプログラムを終了し、検定試験に合格すると、「近江環人」（コミュニティ・アーキテクト）の称号が付与される。

これらの地域教育プログラムは「地域共生センター」が中心となって進められ、社会人と院生が共に学び、地域の実践者とのネットワークも形成されている。地域共生センターでは地域課題の解決や地域共生の教育研究、地域社会で活躍する人材を育成している。社会人コースとして学位に関わらず、科目等履修生として受講することもできるため、リカレント教育として受入が広がっている。

また滋賀県立大学には産業界等との交流を行う「産学連携センター」が設置され、大学

の知的資源を活かして地域再生のリーダー人材を育成し、地域のニーズに答えている。社会人院生はそれぞれのプログラムの活動を通して、ネットワークを形成し、学生、地域、まちづくりなどの支援を行っている。

このように同大学には地域人材育成において、学部生、大学院生と社会人が連携し支援するネットワークができています。各段階でキャリアを積み上げられる学生と社会人の循環システムは滋賀県立大学の地域人材育成の特徴であり、大きな強みと考えられる。

② 福井大学

2016年に国際地域学部が設置された福井大学は、4学部を有する国立大学であり、2019年度現在、13年連続で就職率が国立大学で全国1位となっている。同大学で地域人材育成事業に関するヒアリング調査を行い、主に大学院の「産業現場に即応する実践道場」の取り組み、および社会人教育について伺うことができた。

福井大学には実践教育事業として、大学院修士課程学生向けの「創業型実践大学院工学教育プログラム」、大学院博士課程学生向けの「産業現場に即応する実践道場」さらに「経営・技術革新工学コース」の3プログラムが開講されている。「実践道場」には1科目あたり数名の社会人が参加しており、博士課程にも社会人学生が多いという。こうした授業に参加する社会人学生は同大学の協力会（地域企業を中心とする大学支援組織）から募っているという。経営学などは経済学部のある福井県立大学の教員が担当しており、地域の他大学との連携による事業運営も有効な方法となっている。

これらのプログラム設置の理由としては、経営学（マネジメント）を知らない技術者が幹部になる際、マネジメントの学びが必要になるためとのこと。このように技術系の社会人育成において経営学分野が必要とされているとの指摘は重要なものである。

③ 金沢工業大学

金沢工業大学は石川県にある工学系大学であり、学生を伸ばす教育力や就職率の高さなどから、全国的にも知られる私立大学である。学生の学びを支援する学習支援デスクや学習支援計画書など教育力の高さを裏付ける同大学の施設や仕組みを伺うことができた。

地域の社会人育成に関するリカレント教育プログラムの一つとして2016年度から始められた「社会人共学制度」に注目したい。同制度は社会人、地域の方々や企業の技術者が大学の教育や研究に加わるものである。これにより、社会人が学生と共に学ぶことになり、学生にとっては同世代の在学生のみならず、世代を超えた多くの人々と関わるができる。金沢工業大学ではこの社会人共学制度により、学生が深い学びとコミュニケーションやイノベーションの能力を高めることを狙いとしている。このことから、同大学が学生を主眼に地域人材育成を行っていることが伺える。

社会人共学者とされる大学授業に参加する社会人、すなわち地域人材は自らの目標達成に向けて意欲的に大学講義に参画することになる。社会人共学者は科目履修生のように単位取得は求められないが、授業の協力者として学生をサポートし、またディスカッションを通して、学生の人間力醸成につなげることを期待されている。このように社会人と学生

双方がメリットを享受しうる同制度は大学の地域人材育成のあり方に貴重な示唆を与えている。

④ 長野大学

長野大学は1966年に私立本州大学として長野県上田市に開学、1972年に長野大学となり、現在、社会福祉学部と産業社会学部を改組した環境ツーリズム学部と企業情報学部の3学部を有する。地域に根ざし、地域社会に貢献する大学として2017年度から上田市を設置者とする公立大学となっている。同大学にはこれまで長年にわたって、地域協働型の学びを推進してきた歴史がある。これは日経グローバル誌の「地域貢献度調査」で毎年、高い評価を得ていることから伺える（表1を参照）。長野大学はこのような客観的な外部評価基準を参考指標として、地域貢献の枠組みを着々と築いてきたとのことである。

長野大学には「地域人材の循環システム」と「地域課題の解決システム」の構築を目標として、地域づくり総合センターが設置されている。「地域人材の循環システムの構築」とは地元の若者が入学し、その学生をしっかりと育てて、きっちり企業・組織に送り出す仕組みを作ることで、まさに地域人材の育成を意味する。「地域課題の解決システムの構築」とは地域の総合的な課題について協働で取り組む態勢を作ることである。

同大学の地域協働型の学びとして、地域密着型ゼミナール、フィールド調査やビジネスコンテスト、また信州上田学などのリカレント教育が行われている。さらに上田市が設置し、市内の4大学（長野大学、上田女子短期大学、信州大学繊維学部、長野県工科短期大学校）が共同で運営する「まちなかキャンパスうえだ」では、市民向け講座、市民、NPO、企業や行政など地域と大学との協働、まちなかの学生活動、地域コミュニティや福祉活動などの地域と大学の連携拠点となっている。

⑤ 高崎経済大学

高崎経済大学は1957年に経済学部の単科大学として群馬県高崎市に開学し、1996年に地域政策学部が設置された。新学部の名称にも示されるように地域志向の強い公立大学であり、これまでに高崎市をはじめとする群馬県の産業界など地域に貢献する多くの実績を残している。

日本で初めて設置された地域政策学部は地域社会の発展を担う地域リーダーの育成を目標に掲げている。同学部には「地域政策学科」に加えて、実践性の視点を持つ「地域づくり学科」、地域振興のための観光政策の視点から「観光政策学科」が置かれている。これらの学科に限らず、地域づくりへの学生参加は多く、それらの活動は「地域・社会貢献白書」にまとめられている。

社会人教育など地域人材育成に関しては、「公開講座」「地域を学ぶ地元学講座」「地域をめぐるエクスカッション」「ラジオゼミナール」などが行われている。このような様々な地域貢献活動の中心となっているのが「地域科学研究所」である。同研究所は開学時に設置された「産業研究所」と1998年設置の「地域政策研究センター」が2005年に統合されたものである。地域科学研究所は高崎経済大学の地域貢献拠点として地域貢献事業に積

極的に参加しようとする人文科学、社会科学分野の専任教員が所員を兼務している。このように専任教員が地域貢献事業に携わっていることが高崎経済大学の強みとなっている。

さらに2013年には高崎市の中心街区に学生により運営されるカフェ「あすなろ」が置かれ、学生のキャリア形成支援、大学と地域の絆づくり、中心市街地のにぎわいづくり、市民参加イベントやセミナーの拠点となっている。

3-4 大学ヒアリング調査のまとめ

このように日本全国の10大学を訪問し、地域人材育成に関してのヒアリング調査をおこなった結果、地域貢献・連携の組織、地域人材育成の基礎となる地域資源、地域人材を育成するスタッフや教員について、大学で必要なことが伺えた。ヒアリング調査の結果について、次の3点にまとめることができる。

まず1点は「組織と人材の確保」である。いずれの大学も地域連携や産学（官）連携のための組織を設置し、公開講座などによる地域人材育成に取り組むと共に地域や企業からの要請に応じている。例えば宮崎大学の産学・地域連携センターは企業との共同研究や多様な地域イベント・講座を、また滋賀大学は自治体職員や一般市民向け等多くの講座を提供している。地域連携組織の担当人材は限られる中、活動を充実させるために行うために実務家教員を採用また学部教員の研究員兼務などで必要な人材を確保している。

2点として「地域資源の徹底した発掘と活用」である。それぞれの大学で提供する地域人材育成のプログラムは多様であり、その内容や方法は各大学の保有する人的資源や置かれる状況により異なる。地域資源を活かすためには様々な学問での取り組みが可能であり、経営学・マネジメントに限らず、地域学、地域経営学や地域デザインなどの学際科学も有効となる。

地域資源をどう捉えるかは地域人材育成の内容や方法に大きく影響するため、その歴史を含め徹底的に発掘し、地域の文化や社会を含めた十分な検討が必要となる。例えば滋賀県立大学では琵琶湖や近江商人と関わる地域学を全学で副専攻とする地域教育を導入し、高崎経済大学では地元産業界を背景に地域科学研究所や地域政策学部を設置することで、それぞれの地域資源を活用している。

3点として「学内外人材の活用」である。地域人材育成には学部の教員というより、地域関連組織の教職員、他大学との連携、学外や地域の人材が多く活用されている。地域人材育成は新しい大学の地域貢献に資する機能であり、従来からの学部などの縦割り組織の教職員だけで十分対応することは難しい。例えば信州大学では研究推進、産学官連携、地域連携はそれぞれ全学レベルでの機能別組織と各部局、地域、プロジェクトに基づく組織がマトリックス組織のように連携し多様なスタッフによって取り組まれている。

4 長野市地域の企業アンケート調査

4-1 アンケート調査の概要

地方の大学は地域の企業などから地域人材育成に、どのような期待を持たれ、評価されているかを探るため、2019年9月にアンケート調査を実施した。具体的には長野県立大学を事例として、その地元地域と考えられる長野市をはじめとする長野県北信地区（長野市、中野市、千曲市、飯山市、須坂市、小布施町、信濃町、山ノ内町、飯綱町、高山村）と隣接する東信地区の一部（上田市、坂城町）にある従業員10名以上の企業と市役所、町村役場、商工会議所、商工会を対象として郵送アンケートを行った。アンケートでは長野県立大学が地域貢献に果たす役割について地域人材育成を中心に質問している⁷。

調査対象は、北信地域等の企業263社、市役所や町役場等の公的組織33所である。それら296対象にアンケートを郵送した結果、回収数（率）は企業97社（37%）、公的組織12所（36%）、計109社（以下、全体数を表す単位を社とする）となった。対象先を規模別で見ると、従業員10～49人が58社、50～99人が60社、100～299人が96社、300人以上は63社である（不明19社）。平均では405人、中間値では120人規模の組織となる。業種別では、製造業が87社と最も多く、次いで建設業28社、小売業25社、情報サービス業17社、サービス業15社などとなっている。

4-2 長野市地域での大学の存在と役割

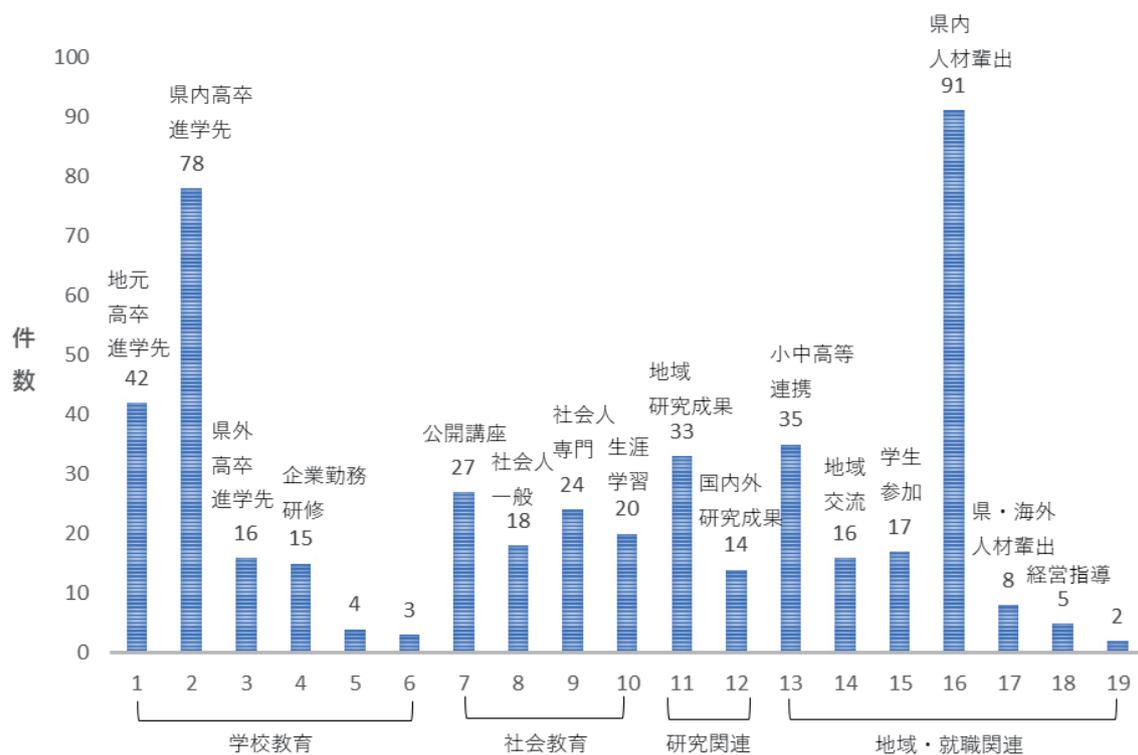
最初の質問では、「県立大学の地域における存在や果たす役割で特に重視しているものはどれですか」と尋ねた。ここでは外部からの大学の存在・役割を探るため、教育（学校・社会）、研究、地域、就職など大学の役割と考えられるものを列記し、それぞれの位置づけを答えて頂いた。集計の結果は、図1に示される通りである。この質問の選択肢は19と多いため、5つ以内での回答との制約を設けている。また大学の役割全体の位置づけを探るため、学校教育、社会教育、研究関連、地域・就職関連と幅広い質問としている。

ここでの結果からは「高校生の進学先」と「人材輩出先」としての役割が大きい。特に「県内に就職する人材の輩出」が109社中91社と最多となり、地域企業にとっての地元の大学としての重要性が明らかになっている。次いで「県内高卒者の進学先」78、「地元高卒者の進学先」が42とこれらを合わせると120社となり、県内や地元の進学先としての役割が最多となっている。

続いて「小中高と連携した教育力向上」「地域への研究成果の発表」がそれぞれ35社、33社となり、大学の地域人材育成といえる「地域の公開講座」「社会人向けの専門教育」「生涯学習」が27社、24社、20社と続いた。このように全体の位置づけとしては、まずは進学先としての教育とその成果としての人材輩出の役割が高くなり、その後に公開講座など

7 本論では「長野県立大学の地域人材育成事業の関する調査研究」にて実施されたアンケート調査の質問項目から、その1部を取り上げている。

図1 県立大学の地域における存在や役割



筆者作成による

が続いた。これらは予想される通りで妥当な結果と思われる。

一方、「県外高卒者の進学先」や「県外・海外に就職する人材輩出」については低い結果となった。地域企業による回答であるが、国内外や国内各地を含む人材の循環による社会的な人材育成という観点は少ない。地元企業などにとっては人材不足感が強い中、やむを得ない面があるものの、短期的で局地的な視点が強くみられる。東京への人材流出を是正し、人材を地元へ供給することが課題ということの証左でもある。

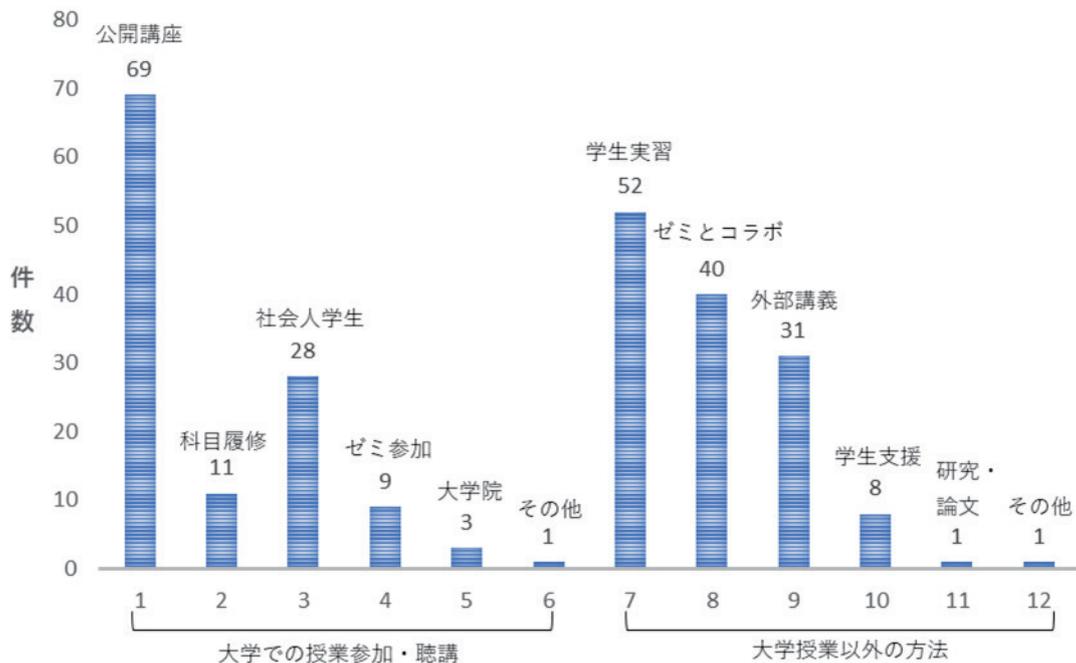
また地域社会人の学位取得や科目履修生受入の重視は少なく、大学授業の履修希望は決して高くない。その他の自由記入欄に「(大学の役割は) 地域活性化を図れる人材の育成」「卒業して県外・海外に行く人材はいらない」、また「(大学の存在は) 教育費負担の軽減を図るための県内大学」「県外流出による教育費負担を減らすため」との記述もあり、県内の公立大学への期待が端的に表れている。

4-3 参加希望・関心のある人材育成方法

次の質問「地域人材育成に関して、参加の希望や関心の制度や方法はどれですか」では、大学の地域人材育成の参加や方法・形態の希望について尋ねた。回答の選択肢には、公開講座や科目履修など大学授業の参加と企業の学生受入や外部セミナーなど大学授業以外の方法が含まれている。

その結果は図2に示される通り、「公開講座の充実」が69社と最も多く、「学生実習の

図2 地域人材育成で参加希望・関心ある制度・方法



筆者作成による

受入」は52社、「ゼミとのコラボ」40社と続いた。さらに、「外部での講義・セミナー」が31社、次に「社会人学生制度の充実」28社、「科目履修制度の設置」11社であった。

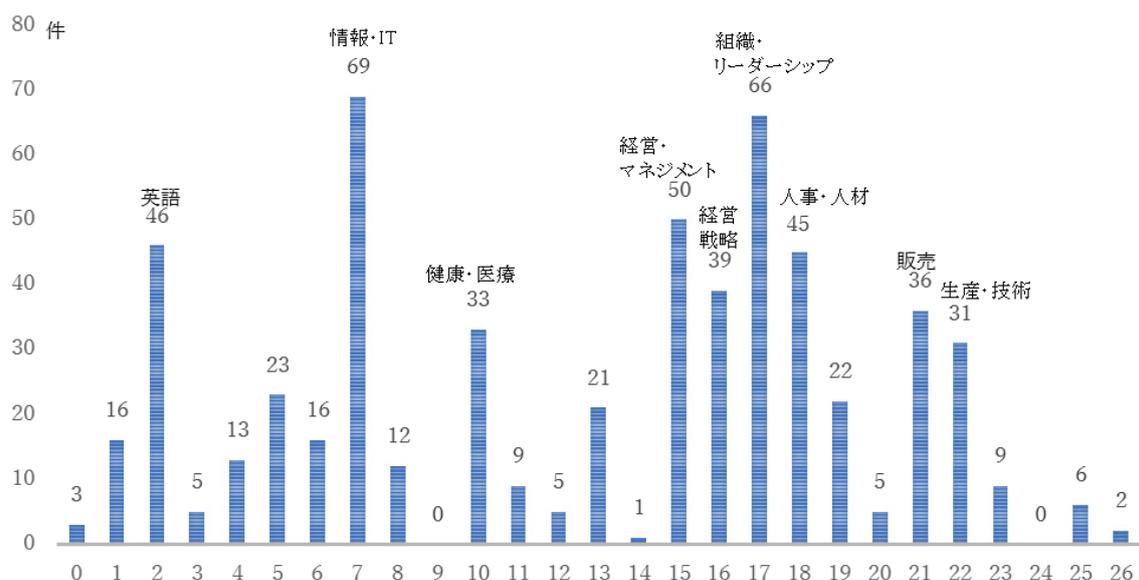
ここから「公開講座」が最も高い評価を得たが、おそらく選択肢の中でよく知られており、また実績のある制度であるためと思われる。「科目履修生」など公開講座以外の大学授業を履修や聴講するものに関心はあまり高くなかった。意外であったのは、大学で行われる講義より、学生を企業等で実習させる「学生実習の受入」や企業の商品開発や課題解決等の共同活動を行う「ゼミとのコラボ」といった授業以外の方法での人材育成に関心が高かったことである。この結果は、大学の地域人材育成の今後のあり方を考える上で重要で検討したい点である。

4-4 参加希望・関心のある教育研修分野

3つ目の質問「地域人材育成に関する教育・研修で、参加希望や関心の高い分野はどれですか」では、大学が提供できる人文、社会、自然科学から健康・医療、芸術、食育・保育などの一般教養分野、そして経営学・マネジメントの分野の研修への参加希望や関心について尋ねた。回答の選択肢にはかなり広範囲な領域を示したが、調査対象とした地域の大学（長野県立大学）で提供可能なものとして、理工系や農学系などの分野は含まれていない。

地域人材育成の教育・研修で希望や関心の高い分野は、図3に示される通り「情報・IT」69社、「組織・リーダーシップ」66社、「経営・マネジメント」50社、「英語」46社、「人事・人材育成」45社、「経営戦略」39社、「販売・マーケティング」36社、「生産・技術」

図3 参加希望・関心ある教育研修の分野



筆者作成による

31社といった結果になった。経営学系学部（グローバルマネジメント学部）のある長野県立大学を想定しているため、実現可能な領域としてマネジメント分野の希望が多くなったかもしれない。それでもマネジメント分野各領域の希望や関心の現状を把握できたことは限られた調査であるが、有意義な結果が得られたと思われる。

4-5 企業アンケート調査のまとめ

地域企業のアンケート結果から、地域からの期待として次の3点が明らかになった。第1は「地域での教育の役割」である。これは高校生の進学先、大卒就職者の輩出先としての大学という存在から当然果たすものであり、地域人材育成の基盤となる教育機能への期待が大きいことが確認できた。

第2に「大学・学生との協働活動」である。公開講座や授業の聴講など従来からの社会人教育の役割に加え、社会人による授業への協力や参加、企業による学生の実習受入れやゼミとのコラボなど大学・学生との協働を通じた活動や交流への期待が高いことは新たな発見である。

第3に「マネジメントへの高い関心」である。調査結果から教育研修の内容として、リーダーシップ、経営、人事、戦略、マーケティングなどマネジメントの分野に、英語、ITや健康・医療等と共に高いニーズがみられた。これは開講可能なのが調査対象である長野県立大学の専門分野と限定された面はあるが、地域人材育成の内容としてマネジメント分野への関心が高いことが判明した。

5 地方大学における地域人材育成

5-1 大学による社会人育成の変化

これまでの大学の事例から伺えるように、大学の地域人材育成として地域に貢献する人材を育成するとの目的は共通するものの、社会人教育、地域人材育成の内容や方法は地域、対象層や実施する大学によってかなり異なっている。また多くの大学が存在し、多様な社会人育成が可能な都会と異なり、大学が少ない地方での人材育成への取り組みは相当限定される。そのため地方の大学は取り組むべき社会人育成について、地域からの期待やニーズを把握した上で、十分な検討が求められる。

大学の地域貢献への取り組みがこれまで以上に進展し、大学に対する地域課題の解決や地域の活性化という期待が高まっている。大学の社会人育成においても学位の取得や能力の向上という個人のキャリア支援という従来からの目的に加え、地域の活性化を担う人材を育成するという新たな目的が現れている。

従来の大学での社会人教育では、生涯教育やリカレント教育としての側面が多く、個人のキャリアを充実させることが主たる目的とされてきた。そのため、地域性は考慮されず、東京など都会の大学での育成がイメージされていたと思われる。今後も社会人育成には標準的で汎用性のある知識や能力の習得が大学に期待されるものの、知識を活用する上で地域を考慮した人材育成、つまり地域人材育成が重要になってくる。

5-2 地方大学の地域人材育成のあり方

地方大学における社会人教育や地域人材育成とは、都会の大学でのそれとは異なる意義や目的が生じている。ここでは地方大学による人材育成の意義と地域人材育成のあり方について検討したい。多くの大学がある都会の社会人は多様なプログラムを選べるが、地方の社会人は限られた大学のプログラムしか選べない。これでは地方の大学で学びたいと考える社会人は限られ、地域人材のキャリア充実をサポートする施策を揃えることは困難である。そこで地方の大学は地域人材育成の意義を再考し、社会人育成のプログラムを地域の視点で再構築することが重要になる。

地方ではその地域性が人材育成に大きな意味を持っている。地域にあった育成がなされることで、地域の人材はより有効な育成が図られ、高い成果を上げることが可能になる。地域の人材は自らのキャリア追求を諦め、地域発展のために犠牲になるのではなく、地域発展に貢献し成果をあげることで、人材育成の進展が図られる。

このような捉え方は従来の大学による人材育成からみると逆転の発想かもしれない。地域の人材はまず地域に貢献し、そのことを通して自身が能力を高め、成長していく。地域人材となった社会人は地域に誇りと愛着を持ち、結果として自らのキャリアアップを果たすことが出来る。これは地域での社会的な人材育成の好循環である。このような人材育成が好循環する場を提供し、そのサイクルを支え、前に進めることが地方大学の地域人材育成のあり方と考えられる。

6 まとめ

これまで大学の社会人教育はリカレント教育、生涯教育が主体であり、社会人のキャリア開発の一つの場とされてきた。社会人が大学や大学院で新たな知識や能力を獲得し、それらを活かして仕事をよりよく遂行し、昇進や転職につなげるのが目的とされてきた。そこでは社会人育成の場は都会の大学で社会人は夜間や土曜の通学が想定されていた。

本論での調査から、地域人材育成とは地域の活性化や地域事業を支えるリーダー人材の育成であることは明らかであり、地方大学にはその地域への貢献すなわち地域社会を活性化し、地域を支える人材の育成が求められている。社会人が地方の大学で学ぶ場合は汎用的な知識や技術の習得だけでなく、学んだことを地域の組織や企業で活かし、地域を活気づける、地域の人々により影響を与えることが期待されている。

地域の社会人は大学で学んだことを地域社会で活かし地域に貢献し、また得たものを学びに還元し、新たな成長につなげていくことが可能となる。大学の保有する専門性や技術を地域の歴史、資源、住民など地域社会とつなげて活用することが、地方大学の地域人材育成には有効であり、その強みを活かすことができる。

個々人のキャリアを支援する都会の大学での社会人教育に対して、地方大学の地域人育成では地域の活性化を担う人材を育成するという目的が加わる。地方の大学による社会人教育には地域貢献につながるという独自性があり、それを考慮してのプログラム作りが求められる。地方大学が取り組む地域貢献としての地域人材育成は、これまでと異なる視点によるものであり、この考え方は大学の社会人教育のあり方に新たな意義をもたらさるう。

謝 辞

本論の調査は長野県立大学の理事長裁量経費事業（2018年12月～2019年11月）として採択された「長野県立大学の地域人材育成事業に関する調査研究」報告書に基づく。本研究調査に助成頂いた安藤国威理事長にこの場を借りて厚く御礼申し上げる。またヒアリングおよびアンケート調査にご協力頂いた皆様および関係の皆様へ深く感謝する。

参考文献

- 飯塚重善（2018）「大学教育における地域連携活動のあり方に関する一考察」『国際経営論集』55、97-111.
- 伊藤奈賀子（2019）「地域人材育成を目指す体系的カリキュラム構築上の課題」『鹿児島大学総合教育機構紀要』2、1-16.
- 長田進（2015）「地域貢献について大学が果たす役割についての一考察」『慶応義塾大学日吉紀要』26、17-28.
- 京都府立大学京都政策研究センター（2015）『「大学・地域連携のあり方に関する調査研究」報告書』1-41.

- 呉尚浩 (2006) 「大学と地域—開かれた学びと地域創造の場づくりのために」『大学地域論』45-90、論創社.
- 厚生労働省 (2019) 「平成30年度能力開発基本調査」厚生労働省.
- 酒井祐輔 (2017) 「地域と共に鹿児島大学が育成する「グローバルな視点を有する地域人材」とは」『かごしま生涯学習研究』1/2、26-39.
- 杉岡秀紀 (2014) 「新しい公共と人材育成：京都発「地域公共人材」の育成事例」『社会科学 (同志社大学人文科学研究所)』40-3、159-177.
- 高垣行男 (2014) 「経営学を通じた大学における地域連携の現状と課題」『駿河大学経済研究所所報』18、27-42.
- 土崎雄祐 (2018) 「宇都宮大学における「とちぎ終章学」の実践」『宇都宮大学地域連携教育研究センター研究報告』15-24.
- 出相泰裕 (2015) 「地域再生に向けての大学における社会人の学び直しの課題」『日本生涯教育学会年報』21-36.
- 中塚雅也、小田切徳美 (2016) 「大学地域連携の実態と課題」『農村計画学会誌』35(1)、6-11.
- 西村訓弘 (2019) 「地方大学による社会連携と大学経営への意義」『産学連携学』15(1)、17-23.
- 日本経済新聞社 (2015) 「大学の地域貢献度ランキング2015」『日経グローバル』No.281、2015.12.7.
- 日本経済新聞社 (2019) 「大学の地域貢献度調査2019」『日経グローバル』No.374、2019.10.21.
- 深沼光 (2019) 「大学と地域の連携—継続の効果と課題—」『日本政策金融公庫論集』7、21-47.
- 宮下清 (2019) 「地方大学が取り組む地域の人材育成～地域・社会連携による大学の地域貢献のあり方～」『人材育成学会第17回年次大会論文集』255-260.
- 宮下清、東俊之 (2020) 『「長野県立大学の地域人材育成事業に関する調査研究」報告書』(長野県立大学 学内資料) 1-39.
- 文部科学省 (2018) 「平成29年度開かれた大学づくりに関する調査研究」リベルタス・コンサルティング.
- 矢口芳生 (2019) 「地域人材の育成と「地域協働型教育」福知山公立大学を例に」『福知山公立大学研究紀要』187-245.
- 米田佐紀子、日高喜志夫、胡紅ほか (2016) 「在外日本企業と日本の地方大学の連携によるグローバル人材育成の課題」『北陸学院大学研究紀要』9、109-122.
- 琉球大学地域連携推進機構 (2018) 『地域貢献型大学としてのブランド確立に向けた地域貢献事業循環型モデルに関する具体的方策等について (最終答申)』琉球大学.

国立公文書館内閣文庫蔵

『新增鷹鶴方』（函号三〇六一三〇七）全文紹介

二本松泰子

（一）はじめに

前近代における朝鮮半島では『鷹鶴方』を称する鷹狩りの伝書は以下の三種類が存在する。

- ①李文烈（兆年）著『高麗古本鷹鶴方』（十四世紀成立）
- ②李瑑著『古本鷹鶴方』（十五世紀成立）
- ③李燭著『新增鷹鶴方』（十六世紀成立）

これらのうち、②③については写本が日本においても伝来している（注1）。特に③の『新增鷹鶴方』は八代將軍徳川吉宗の薬草政策の一環として実施された朝鮮薬材調査の対象に同書が取り上げられて以降、主に武家の間で流行し、大量の写本や国字解のテキストが全国的に流布した。特に国字解は板本が多数出版されている（注2）。著者

の李燭は、李氏朝鮮の第十一代国王である中宗（在位：一五〇六～一五四四）から第十三代国王の明王（在位：一五四五～一五六七）の時代に儀礼・祭事や外交などを司る礼曹で正郎を務めた漢方医である。その内容は、養鷹における薬医法に関する説明が大半を占める（注3）。

本稿では、同書の写本のうち国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鶴方』（函号三〇六一三〇七）の全文を紹介する。当該写本の書誌についてはすでに三保忠夫によって下記の通り報告されている（注4）。

○『新增鷹鶴方』朝鮮 李燭 江戸初期写 内閣文庫所蔵、一冊（306／307）

後表紙（黒）、外題に「（新增）鷹鶴方」（簽〈新〉、後、左、双）とあり、内題に「新增鷹鶴方」とある。寸法は縦二八・一cm、横

二一・二cm。袋綴。楮紙。墨付四八丁（※稿者注・正しくは二十八丁）。一面九行。漢文体。墨筆の片仮名付訓・辞書引用（宋本系『玉篇』等）、朱筆の書入・イ本校合、朱引などがある。これらの書入は道春の手になる。内容は、後掲の早稲田大学図書館蔵本に同じ。巻頭の印記に「林氏之蔵書」（朱方印）、「浅草文庫」（朱長方印、双）、「江雲涓樹」（朱長方印、双、「江」「涓」は陰刻、「雲」「樹」は陽刻）、「内閣／文庫」（朱方印）、「日本／政府／図書」（朱方印）があり、本文末尾に「道春子」（朱筆）、印記、「昌平坂／学問所」（墨長方印）、「内閣／文庫」（朱方印）がある。「道春」は林羅山の法号で、その諱は信勝、字は子信、号は羅山という。生歿、天正十一年（一五八三）〜明暦三年（一六五七）正月二三日。江戸時代初期の儒学者で幕府儒官林家の祖となる。朱子学を修め、慶長一〇年家康に仕え、以下、家綱まで四代の將軍の侍講を務めた。寛永七年私塾を建て、これが後の昌平黌の基となる。「江雲涓樹」は彼の蔵書印の一つ。

右の三保の報告によると、同伝本の書入れをしたのは林羅山とされる。彼が朝鮮の鷹書について関心を寄せていたことは、寛永十三年（一六三六）の朝鮮通信使一行の副使である金世濂（二五九三〜一六四六）が日本での見聞を記した『海槎録』の記録から確認できることはすでに指摘されている（注5）。すなわち、羅山が金世濂に朝鮮の養鷹方について質問すると、金世濂はすかさず上掲①の李文烈（兆年）著『高麗古本鷹鵠方』がすると回答したのである。本稿では、このように鷹狩りの伝書でありながら、日朝の学者から関心を寄せられた当該伝本

を取り上げ、その全文を紹介する。それによって、近世期の日本の放鷹文化のみならず、儒学・薬学・獣医学といった学問分野においても朝鮮由来の鷹書が関わっていた実像を解明するための情報を提示したい。

【注】

1 二本松泰子『鷹書と鷹術流派の系譜』補論「朝鮮放鷹文化享受の一斑―韓国国立中央図書館蔵『古本鷹鵠方』の伝来をめぐって―」（三弥井書店、二〇一八年二月）等。

2 藤實久美子「鷹書と出版文化」（『鷹狩りの日本史』所収、福田千鶴・武井弘一編、勉誠出版、二〇二一年二月）等。

3 田川孝三『李朝貢納制の研究』第二編「進上考」五「鷹子進上」〔附〕安平大君李瑋著鷹鵠方について（東洋文庫、一九六四年十一月）、三保忠夫『鷹書の研究―宮内庁書陵部蔵本を中心に―（下冊）』第二部第八章「李氏朝鮮の王族、医学者に関わる鷹書」（和泉書院、二〇一八年二月）等。

4 注3の三保著書に同じ。

5 注3の田川著書に同じ。

（二）『新增鷹鵠方』の本文

【凡例】

一 翻刻は国立公文書館内閣文庫蔵『新增鷹鵠方』（函号三〇六一三〇七）によった。

- 一 改行は/で示した。改丁は「をもつて示し、(一オ)のように丁数ならびに表裏を示した。
- 一 字体は出来るだけ底本の表記を重んじるように心がけたが、異体字など、一部通行の字体に改めたところもある。
- 一 頭注については、本文の街頭部分に算数字を付し、それに対応する注の文言を各ページの末尾に記載した。
- 一 朱書きについては文字の頭に(朱)と示した。
- 一 原本によると、人名は文字の中央に一本、国名・地名は文字の右に一本の朱引があるが、それが朱筆であることについては特に明記していない。

新增鷹鵠方／

鷹賦 魏彦深／

惟茲禽之化、育實鐘山之所、生資二金、方之猛、氣二擅二火、徳之炎、精二何虞、者之／一多レ端運レ横、羅以羈、束縉二經、絲於雙、臉／結二長、繩於兩、足一飛不レ遂二於本、情一食不／レ充二於所、一レ欲逸、翰由而暫、欲雄、心為レ之、自局、若乃貌非レ不レ一相、乃多レ途指重二／十、字二尾貴二合、盧一立、如レ植木望似レ愁、胡(一オ)贅同二鉤、利一脚等二荊、枯一亦有下白如レ散、花／赤如レ點、血大、文若レ錦、細斑似レ纈眼類、レ明、珠毛猶レ霜、雪身、

1 玉篇隸且立切縫也亦作緝又与摺同／

重若レ金爪剛、如上レ鐵、或復頂、平似レ削頭、圓如レ卵臆、潤頸、長／筋、鹿、脛、短翅、厚羽、勁脾、寬肉、緩、此之、才、用俱為レ絶、伴或如二鶉、頭二或似二鴟、首一／赤、精黃、足細、骨小、肘懶而易レ驚、奸、而／難レ誘、住、不レ可レ呼飛不レ及レ走若レ斯之輩、不レ如レ勿レ有若、夫疾食速消此則有レ命(一ウ)駕頸、猴、立是為レ無レ病廁、門忌レ火結、肚、惡レ軟條不レ欲レ絶、背不レ宜レ喘生二於窟、一者／則好レ眠生二於木、一者則常立雙、較長者／則起、遲六、翩短者則飛急毛、衣屢改、厥色無レ常寅生酉、就捻、號為レ黃一、周／作レ、鵠、千、日成レ蒼雖レ曰レ排、性殊二衆、鳥一／雌則體、大雄則體、小遇レ犬則驚、猜見／レ人、則馴擾、養レ雛則小レ病野、羅則多レ巧、察レ之為レ易、調レ之實難、格、必高、迥、室必(一オ)華、寬薑以取レ熱酒以排、レ寒鞮、須二温、暖一／肉不二陳、乾一、近レ之令レ狎、静レ之使レ安、晝不、レ離レ手夜便火、宿微加二其毛、一、小減二其肉、一、肌、肥腸、瘦心、和性、穆念、絶、二雲、霄、志在二、馳、遂、也、較者、歷也、捨者、架也、黃者、今之、羅、羅、也、

同前／

伊鐘山之贅、鳥稟二金、方之勁、氣二含二火、徳之明、輝二論二瑤、池之純、粹、春、秋、運、斗、星散ヲ、或聞三於蒼、成、二千、日、或重二其指、如二(二ウ)レ十、字若乃點、血散、花之状草、眸金、距、之名、西京雜記、日、

2 論作淪イ

者二焉竊鸛鷹者著(六ウ)於上、古二少隼鳩氏鶻者頭二於唐、人二張九鼎鸛鷹鷓鴣於古二史闕其ノ職スルコトヲ豈ニ昔ノ之多、識ナルノ物亦有ルレ選ノスコト乎カ性ヲ表有リニ義、鶻、行ノ

其為レ物也猛、烈俊、逸搏、鮮而食浴レ水、而潔凌レ風而娛一、舉千、里自、在無レ礙、及レ被二羈、繼一心、煩氣、束渴、病生焉庸

夫、不レ察、緊定レ帽、纓掩ニ、塞鼻、孔不レ與ニ之水、囚ニ諸烟、房一、烟、蒸フル處閉トチレ戸ヲ點、是但殺レ之、而已故達、理之士、狼レ之有ニ其節

一調レ之、有ニ其法、察レ病尋ニ其源、用レ藥因ニ其性、以(七オ)能全二其、天、一而臂以交レ之、徐以瘦レ之、飢、以放レ之、得レ盡ニ其才

一焉其為レ術涉ニ於戲、玩ニ雖二君、子之所一不レ屑然非下盡ニ物之性、者上有レ不レ能レ解也

取レ鷹七、月上、句為レ上、時内、地者多塞、外者少八、月上、句為レ次、時下、句為レ下、時一塞、外之鷹、畢、至矣

網目方一、寸八、分縱八、十、目横五、十、目以二黃、藥、一和二、杼、汁、二染レ之、令(朱)下與(朱)二地、色二相(七ウ)似上、鵠

能遠、視若動、眇、竦、身隨ニ其所一視、候レ之焉實ナリ也(八オ)

(八ウ)：白紙
調、養雜、說
星山李燭編

鷹熱、物性喜レ水雖ニ雪上ニ好レ浴至レ有下羽、水不レ能ニ而飛一者上庸、人不レ解乃謂レ惡レ水、渴、證之作正、坐ニ於此ニ調レ新、鷹者傍

置レ水、盆數翔張レ口時、坐ニ之盆、上ニ則鷹必、喜レ飲如或畏レ人見レ水不レ飲用ニ大、鳥、羽、清、レ水二滴ニ於鼻、上一令ニ

浸、々流下ニ則鷹必、細、々吞レ之或、嘜、二水於頭、類ニ亦細、々吞(九オ)レ之、不レ得レ已、臥、縛者以レ小、匙、挾レ水數、數、灑

レ口母二狼、多而令一、噎、獵、時渴、熱、挾レ水飼之日、温時數浴二川、中ニ

鷹不レ傷ニ於飢、一必傷ニ於飽、一況新、鷹畏、逼、氣、結尤善傷レ食、須下用ニ萑、單鶻、鳩肉、小、小飼上レ之日、久食レ食通用ニ雞、雉、鴈

、鴨、最、忌、二鹿、惡、雄、雞、一、終、日放、獵、則勞、熱必、多又飼二熱、血肉、一則乘レ温凝、結不レ得ニ速(九ウ)消、一況新、鷹畏レ人

心、熱常存尤、宜、二戒、慎、一、瀆、二切レ肉浸、一、水是名、水、食、一、水、食、貴、二細、一、長、忌、レ、鹿、大、冬、則間、々、飼、レ、温、肉、無、レ、妨、春、秋

則不レ可レ不ニ水、食、一、肉之陳、乾處、須、二割、去、一、皮、肉間不、潔、膏、屬、細、々、拭、去、大、鷹、大、雉、脚、小、鷹、小、雉、脚、適、

中、矣、食、脚、筋、則成レ霜、角、須、拔、二脚、筋、一、内、陋、則人、尿、浸、飼、極、寒、母、二野、飼、一、野、飼、則食、倍、凍、損、雖、

暮、還、レ、家、飼、食、一、用、(十オ)レ、衡、稱、レ、肉、飼、レ、之、妙、作、レ、食、洗、手、洗、レ、刀、組

緊、定、レ、臂、力、令、ニ、鷹、安、坐、二、常、以、二、左、手、一、刷、二、其、劍、羽、尾、

羽、一、翔、則、拳、レ、臂、不、レ、動、待、二、其、自、上、一、慎、勿、二、低、昂、揮、一、轉、一、臂、若、失、レ、法、鷹、傷、二、脚、一、力、久、而、不、レ、差、非、二、徒、攫、レ、雉、失、一、レ、敏、甚、

者、不、レ、能、二、平、坐、一、俯、レ、身、顛、倒、矣、新、鷹、久、臂、則、足、熱、或、用、二、漬、レ、水、布、一、也、或、用、レ、瓦、礫、踏、二、之、足、掌、一、北、人、雖、レ、巢、鷹、常、臂

レ之非二執レ役(十ウ) 執レ事末ニ嘗暫積一故馴擾無レ失○不レ放ノ坐レ狼則懷二凌一雲之志ニ雖二一ニ日一坐レ狼ノ須下朝自レ雞一鳴昏至レ初一更臂上レ之○性悍ノ者雖レ熱一獵恒臂ノ呼ノ

新一鷹呼一引自レ近漸遠若初處レ遠則雖レ来必飜去其習不レ美○雖レ老一鷹遠一近ノ間呼一飼在レ野亦馴恃三其熟一老一直飼不レ呼大不レ可也○或隔レ山呼レ之或暗一中(十一才)呼レ之使一呼聲所レ及處皆即尋一來雖レ失ノ易レ得 ○上レ木不レ下者朝一暮飼一時坐二ノ之高一架一呼一飼レ之不レ下則不レ飼使レ飢ノ甚速 下 為レ度既下甘一飼則可レ變ノ

肌ノ今人狼レ鷹多言晝一夜勤臂肌則肥レ之ノ無レ妨古一人豈不レ知二此理ニ而貴レ瘦 乎有レ得レ馴一性者肥而放之其 捉 二一 二一 手一也ノ果甚健一壯及レ至二三一四一 手一則輒生レ怠一 心(十一ウ) 一 日因レ暮失レ之明一 朝覓レ之則見レ人驚一ノ翔遂冲レ雲一 霄瘦者非二徒勤獵一失レ之三一四一 日間レ呼亦来乃知勤一臂之功只存二一ノ一 日一 隔レ宿則 亡 矣古一人 瘦レ之々意良ノ有レ在也然冬一 月稍肥其故何哉 瘦則ノ易レ凍易レ病春秋不レ可レ不レ瘦其故何哉ノ肥則速勞速渴氣不二清一 爽一喜二於 凌一風ノ焉○過瘦 則力憊飛低且 遲 不レ及レ趣ノ雉乍遂旋棄止二於林一 奔一過肥則心驕一(十二才) 頡一頑揚一々獵不レ盡レ力可レ捉還止上レ木ノ不レ下狼一者於レ是加二一減其食一 憊一驕無レ差ノ則善レ矣○瘦則憚レ風堅坐二深一 枝一肥則ノ喜レ風聳レ翅盤レ空○肥一瘦既中連一 日放一ノ

獵則必瘦此時添レ食不レ然過瘦生レ病ノ肥一瘦既中坐一 休累レ休累レ日則必肥此ノ時減レ食不レ然肌堅楊去矣○性馴而ノ瘦者早一 朝小飼出獵名日二達一職一性悍者ノ母レ過二二一三一點一不レ飼亦可●瘦者用二乳一汁二(十二ウ) 和飼則易レ肥○温一肉數々夜一 飼則易レ肥○無レ論レ肥一瘦性悍内 陋 連用レ布一 旭○偷レ食則ノ上肥内陋瘦レ之旭レ之而放レ之○春秋不レ肥無レ害極一寒不レ可レ不レ肥雖二坐一鷹一不レ肥不レ可ノ

於訛切ノ

旭 俗稱加 伊五音 或用レ細一羽或用二去レ核木一花一或用二有レ核ノ木一花一或用レ布將レ飼時先以二石 件 物二漬ノ水 按レ掌如二彈一丸大量二宜碎一分裹レ肉飼レ之布傷レ鷹有レ核者次之去レ核者平一々(十三才) 細一羽最善吐一旭之日鷹内一 惡不レ喜レ獵ノ鷹之内一 陋皆以レ旭治レ之ノ放ノ

新一鷹初須二夜臂一漸一々晝一 夜不レ離レ手惟ノ飼食後一 麤一坐食半 消 還臂勿レ 瘦 野肥ノ而調一 習性一 度稍馴 呼一引而飼之呼引ノ既熟約飼レ水一 食中二其肥一 瘦一臂而踏レ山ノ再一三呼一 飼如レ此一 二 日更 須二詳一 察一若ノ歛レ羽凸レ目遠視高嘯數々 踏レ 輔 神一氣(十三ウ) 楊一々是忌レ人惡(朱)レ 繼 而思レ 欲二掣一 飛一不レ可二ノ輕放一也若鼻一 傍旋一 毛 委一 然開一 堅頂一 毛ノ亦起延レ頸 竦レ身口作二小一 鳥群一 數一 々握レ 講見レ物輒動若

起若止投レ之以レ石亦／欲レ追、趣譬如二攫レ金之人徒見レ金不レ見／レ人之類二則是心專二於禽二而欲レ獵之甚／也於レ是用レ治レ内終、日行レ山暮放レ上、手既得レ、捉之慎勿三直、前以致二驚、颺一退、立緩、呼待二其甘、啄一背、立俯レ身徐、行潜、（十才）進先結レ長、纓此レ指處カレニ新、鷹ノ不メレニスメ、雉剥二出内臟二飼既半飽以二人大、指二内二鷹兩、脚間一用二拇、指及三、四指一微執二兩、脚一則自、然解レ雉矣下レ手不レ熟則多傷二鷹脚一不レ如齊執二足、纓一緩、々拳レ之引二雉、膝一徐、々解取之為レ便也○翌、日二、手数、日以、後三、手一、朔之後母レ過二五、手一雖レ老、鷹不レ可二多放疲、勞二○每、日初、手穿レ内、臟甘、飼小許、不レ然即、時解奪、（十四ウ）則有レ怒、心レ不レ喜獵二、手以、後小飼二腦、隨眼、睛及翅、肉一○鷹若頻、々視レ天當レレ有二驚屬冲一、霄、不レ可レ放也○鷹若相、攫、急執二兩、鷹、頂一則解○兄鷹間、々坐休、不レ盡二其力使二レ神、氣常、旺二可也○瘦、鷹／堅、坐不レ放輒病／

雉／
 雉自レ遠而來横、過二鷹前一者上、手也雉飛、向二原、野二而原、野無レ林、藪者次也雉直、（十五才）來衝レ前者次也雉鷹後、高飛者下也／雉踰レ嶺者下也雉遠引二於回、陵亂、嶂、之間二者最、下也○新、鷹初中二上、手二後、亦喜レ獵雖レ老、鷹久、坐、則初放時須レ澤二、上、手二○浪放レ下、手累出不レ中則鷹怒因、以乍驚鮮レ不二揚、去二○鷹性巧知レ主知、レ家又知レ好、惡其惡レ雄、雉而好レ雌雉者、憚二雄之強二也每飼二雄、雉二○雉踰レ山須レ察二、雉向レ頭處二

次察二鷹、側レ翅處二尋レ之○雉、（十五ウ）踰レ山鷹騰、レ空直上見レ雉則鼓レ翅疾逝、不レ見レ雉則垂レ翅緩下○不レ見レ雉而放、名曰二發、馬一須二上、地二、地、
 兩、山高、峻中有レ平、原一瞰俱徹雖レ風、可レ放上、地也背レ高、山臨レ大、野遠、近洞、／豁無レ風可レ放次也山回谷、轉翳、蒼蒙、／籠前、遮後、蔽不レ知レ抵、落最、下也○鷹、雖レ才不レ知レ地、形多失レ利焉、（十六才）
 時、
 二月以、後十月以、前陽、氣喧、然切無二、當レ手放、使一○秋冬午、後春則午、前放、／使○大、抵薄、暮喜レ獵、
 安、
 鷹呼、吸與レ人同レ節每レ食速下レ食、倍上、則柔、軟下則堅、硬健拂レ羽拳レ一、足左、／右伸レ氣肩、背、羽不レ動肛、門窄、小而冷、
 一、日二、三、尿々至麓、長末大如レ掌黑、（十六ウ）白相、
 離、宿則回レ頭挿レ背此平、安之候也、
 羽、
 翅、羽謂二之翻二以二其堅、利二故古稱レ劔、羽、鶻三、翻鷹六、翻鶻有レ二、翻者鶻、鶻是、也鷹有レ七、翻者角、鷹是也鶻類有二一、／翻者一鷹類亦有二五、翻者一以レ此優、劣鈍、／捷者焉第一、羽曰レ高、古第一、二曰二退、強二、自レ第一、三至二第、十一曰レ縱、羅後十、一以、後曰レ步、緩也尾、羽則十、二而居レ中二、（十七才）羽、
 曰二雄古、奴一居レ兩、邊者曰二築、鋤、兀一亦、有二十、四、羽者一

焉○劔、羽尾、羽沸、水蘸／出則不折○捉、雉則急、揭、二膝上、
令、鷹／尾、羽、二母上レ、損○羽折而不レ断、炙、菁、根、劈／レ之、乘レ
熱、挾、二於折、處、二羽直如レ、故矣○冬、／日或因レ雨、雪或因レ、捉、雉、
羽若沾濕即／坐レ陽、地無レ烟細、火遠照レ之、又、烘、レ手、撫、／レ之、
則速乾、
鈴足、總長六寸、五分有奇、
鈴要二小而鳴、一單長塊、務、鈴、輕、便、懸、レ之、過、高、則鈴激、脊、端、
成レ瘡、過、低、則飛、緩、○鈴鐵多銅小者碎、銅納レ鈴、心外裏、／レ黄、
泥、壯、火、燒、赤、板、上、轉、冷、則快、鳴、○望、羽塵汚者劈、二冬、瓜、肉、
挾、レ之、則潔、白、
架、

無レ烟淨、廳寒、温、適、中、架、地、也、○春、秋、貴、陰、地、冬、節、宜、レ
向レ陽、人、物、喧、一、鬧、處、佳、○最忌二糠烟、一切、須、レ遠、之、○北、人、繫、レ
鷹鷹、(十八才)或於レ穀、石或於二衣、楸、一、架、亦、低、畢、無、レ、異、／レ土、
兀、名、坐臥相、狎、與、レ猫、犬、雜、處、故、／、馴、如、レ家、畜、了、無、レ野、性、
矣、
逸、
逸、鷹、切、勿、二進、前、呼、レ之、以、レ長、繩、繫、二活、雉、若活雞、一置、二相、
望、處、一隱、レ身、弄、レ之、鷹、若、來、攫、徐、待、二甘、啄、一、或、被、レ髮、或、被、レ
糞、從、二鷹、前、一、匍、而、進、以、レ竿、繩、潛、罨、二鷹、頂、一若無二活、／、雉、一、
繫、二死、雉、一過、レ樹、枝、遙、執、二繩、端、一或、降、レ之、(十八ウ)或、墜、レ之、使、
有、レ生、氣、則鷹亦來攫、若草、密、芟、去、○久、逸、之、鷹、須、レ用、二機、一羅、
一勿、用、／レ竿、繩、●止、二、宿、木、上、一燃、二火、於、一、里、許、一漸、／、進、燃、

レ之、至、二四、五、處、一既、迫、二木、下、一用、レ繩、竿、／、○到、處、追、逐、使、レ不、レ
得、レ獵、飢、甚、然、後、謀、取、亦、可、○臂、二他、鷹、一徐、々、潛、進、誘、以、レ餌、則不、
レ驚、
●救、急、方、
鷹、鵠、天、地、間、奇、物、故、王、公、大、人、莫、レ不、(十九才)レ愛、レ之、窮、
レ谿、壑、施、レ羅、網、晝、夜、調、養、其、勤、如、レ此、而、凌、霄、之、氣、見、レ屈、
於、人、一傷、レ心、迫、レ情、外、勞、内、熱、疾、病、易、レ生、或、至、レ掃、レ群、曾、無、レ治、
術、拱、レ手、待、レ斃、其、亦、不、仁、甚、矣、故、觀、二其、飲、啄、之、勢、一察、二其、肥、
瘦、之、候、一以、尋、二生、レ病、之、根、一將、レ本、毒、因、レ藥、性、遂、著、為、レ方、云、
(十九ウ)
龍、腦、元、
龍、腦、半、分、研、スル、大、黃、五、分、人、參、三、
分、石、三、味、除、テ、龍、腦、研、合、テ、為、二細、末、三、
入、テ、二龍、腦、一令、メ、テ、レ、勾、ト、ノ、滴、テ、レ、水、ヲ、作、ナ、ス、
レ、丸、ト、如、シ、二赤、小、豆、ノ、大、サ、一以、レ、金、箔、ヲ、為、レ、衣、ト、毎、丸、
當、一婦、一、分、大、黃、三、分、右、二、味、咬、レ、レ、冷、ル、ヲ、
咀、メ、用、テ、レ、童、便、ヲ、煎、シ、ヲ、二、去、テ、滓、ヲ、一待、テ、レ、灌、キ、下、ス、
皂、一、角、湯、
皂、角、半、分、水、半、鐘、二、煎、メ、待、テ、レ、
冷、入、テ、レ、鼻、ニ、合、ム、レ、掃、チ、ク、セ、レ、之、ヲ、
黃、一、連、一、散、
黃、連、大、黃、蒲、黃、々、栝、人、參、
右、五、味、各、量、リ、テ、レ、一、錢、ヲ、吹、吸、メ、都、テ、
作、ナ、シ、レ、一、服、下、用、テ、二、井、花、水、一、小、鐘、ヲ、
煎、又、至、ル、二、半、鐘、二、一、去、テ、レ、滓、ヲ、待、テ、レ、冷、ヲ、灌、キ、下、ス、(二、
十才)
朱、一、砂、一、散、
半、砂、研、ス、リ、雄、黃、研、ル、各、一、分、
香、研、ル、半、分、三、稜、三、分、山、茱、萸、半、右、七、味、各、量、ル、レ、四、分、ヲ、除、テ、
勺、ヘ、納、レ、テ、二、猪、肝、一、ノ、内、ウ、チ、三、二、以、レ、藥、ヲ、包、ミ、
丸、レ、肝、ヲ、取、テ、レ、藥、ヲ、丸、ス、ル、コ、ト、如、シ、二、赤、小、豆、ノ、大、甘、ノ、一、每、服、三、丸、漸、ク、加、テ、
至、ル、二、五、
水、銀、散、
水、銀、半、分、輕、粉、麝、香、各、一、分、右、
合、セ、研、テ、不、ル、ヲ、レ、息、見、歟、レ、水、星、ヲ、為、レ、度、
有、レ、風、處、二、一、
煮、肝、元、
鷹、鵠、如、有、レ失、二其、常、度、一飲、食、不、レ調、或、吐、(二十ウ)レ食、或、遲、下、或
屎、渾、濁、或、鼻、端、激、熱、促、／、息、漲、氣、困、倦、多、睡、目、睛、不、レ厲、
羽、毛、不、レ快、此、等、病、證、皆、以、二龍、腦、元、黃、一連、散、煮、／、肝、元、一

治レ之龍・腦・元尤妙ノ

鷹・鶻如有二促・息漲・氣鼻・塞二而目有レ涙ノ者以二朱・砂・散一吹レ之亦用二龍・腦・元二此藥ノ尤宜三於鶻二若無二朱・砂・散一以レ皂・角・湯代ノレ之鷹・鶻如或為レ物所レ觸目・睛迷・眩而ノ勢急者用二當・歸・散一(二十一才)

渴・證有レ二一喘・息鹿・急二鼻・塞咳・嗽ノ北・人謂二之鼻・項・匿一久則黃・水自レ口出ノ若青・水出則立死○若喘急大・黃細ノ末裹レ肉飼レ之或煮レ水灌レ之又黃・藥・實ノ槌・碎裹・飼又野・人乾・水浸レ肉飼レ之○ノ若鼻・塞萬・病・元細・末吹レ鼻・孔又令レ人ノ吮二出鼻中濃・汁一々出即止過・吮則傷ノ○鼻・項・匿針刺二鼻・傍一旋・毛洞・貫・灸三ノ七或只刺レ神・庭納二艾・氣二(二十一ウ)

不レ食レ肉喜レ飲レ水日漸消瘦而尿潔者ノ北・人謂二之内・項・匿一此證最危ノ

脚・趾浮・腫者謂二足・項・匿一針・破後胡・王ノ師・根ノ納二針穴一令二爛・出二妙又ノ火・鐵・針之納二艾・氣二然百無二二差一ノ晴有下被レ膜淚・流不レ止回レ頭拭上レ肩者二謂二目・項・匿一山・椒・津ノ和二初・男乳・汁一滴二ノ眼・中一神・妙又熊・膽和レ乳滴レ之又雉・膽ノ滴レ之(二十二才)

目昧レ物致レ傷陳・榛・子細・末和レ乳滴レ之ノ觸・傷之目久則自愈滴レ乳亦佳ノ
内冷外・熱所レ屎成レ塊白反レ青・綠者用二ノ甘・草・湯一和飼無レ甘・草則温・水ノ

有二段・傷處二輕・粉松・脂細・末塗レ之成レ痂ノ去レ痂塗レ童・便令レ不レ成レ痂ノ

屎有レ長・蟲煎二狼・牙草・根一灌・下又細二末ノ狼・牙・根一裹・飼二一三一片ノ
蟲・食煮二苦・參湯一淨洗(二十二ウ)

有レ虱・子浴二草・楫・湯一又梨・萹・根栢・部・根ノ二味為レ末加二輕・粉・黃・連二細研裏飼為レ妙ノ

有三下・熱之候二或屎・陋而短月・經・水浸一ノ飼又熊・膽數・粒裹・飼清・心・元小・豆大ノ裹・飼ノ

用レ藥多・少隨二鷹・鶻之大・小一ノ
兄有二不・安之候二忌二鴨白・鷄黃・狗・肉一ノ
鷹・鶻之病與レ人無レ異兄證宜二類推二要(二十三才) 在二斟・酌用レ藥ノ

經・驗・方ノ
有二畜レ鴟・鶻者二一・日鼻・息塞・急目有レ露一ノ淚人皆謂二頂・匿一欲レ炙レ之畜者謂鷹・鶻ノ不レ可下以二病人一治上レ之試以二朱・砂・散一吹レ之ノ用二煮・肝・元一果有レ神・效二云ノ

有三畜レ白・黃・鷹者一隨二鷹疫・方一與レ十無二一ノ活一而白・黃・鷹亦有二吐レ食激・熱之候一用二龍・腦・元一得レ存云(二十三ウ)

有レ隨二鷹疫一而以レ黃・連・散得レ免云ノ
有二畜レ鷹者二病・勢方地人言放令レ○投レ雉ノ飽飼二温・血・肉一

5 捉

則差云畜者謂鷹病皆由レ熱而生勞レ身放、獵豈不レ加レ熱況飼ニ
温、血、肉一豈能速下乎乃坐ニ之水、盆、中、石、塊、上一令レ水
氣常潤一捕ニ雀及鼠一去ニ毛、及臟一按ニ之掌、中ニ血、肉通亦適レ
中飼レ之、果得レ効云、
柳、木、上虫家状如ニ鳥、卵ニ有ニ班、文者一其、(二十四オ) 中有レ
虫取レ虫擣レ水和レ食飼レ之神、効云、

養、鷹鑑、戒、星、山、李、爛、撰、

余、謫レ北、方聞ニ老、師之言ニ曰新、鷹初、捉姑勿レ懸レ鈴坐ニ
無レ烟暗、廳ニ一、二、日、後屏レ氣潛入繫ニ肉於架ニ慎勿ニ仰レ面、
視レ之旋即退避待ニ其自食、一如レ是ニ、三、日漸以レ手執レ
肉飼レ之如レ是ニ、三、日漸、夕晨、昏臂レ之如レ是ニ、三、日
漸、(二十四ウ) 漸通、夜臂レ之如レ是ニ、三、日漸、夕晝、夜
不レ殊レ手四、十、日後放レ之百無ニ一、病一或云必待レ三、朔後放
之尤妙此、為レ可レ鑑、○余見ニ北、方諸、郡ニ多、捉ニ良、鷹ニ連レ
架溢レ廳、未レ經ニ一、朔一掃レ地無レ遺、惟而問レ之則皆反ニ右
法一初、捉之日、即令レ臂レ之無レ問レ晝、夜驚、心未レ定飢、渴先
逼、勞、悸生レ病轉、相薰染此可、為レ戒、○庸、師言初、捉之日通夜
臂、(二十五オ) 之則無レ病謬、妄無、理莫レ甚ニ於此ニ極、可レ
戒也、○余初学レ鷹時恐、々、然惟、颺、去、之憂日、夜勤臂初放、捉レ
之既、放之後不、敢、浪、放、安、坐、休、養、輒、生、レ、瘦、病、竟、至、レ、不、救

6 雅ハ離字乎

余益惑焉詢ニ於老、師一言新、鷹放、捉之日、前肌必下ニ一、
倍ニ須、三甘飼ニ善、肉一量、宜ニ半飽一勿レ拘ニ晝、夜又須、三遂
レ日放、獵ニ母レ、令、ニレ驚、心鬱、結、但勿ニ多放、勞、熱、一庶免
レ生レ病但、如レ是、(二十五ウ) 五、六、日、則肌堅不レ馴於ニ此
之時ニ約、飼ニ水、食一勿レ令、生レ驕如遇レ風、雨不レ得ニ放、
獵一則須、二飽、○令、レ無ニ欲、心一如レ是、半、月、則無ニ他病
一亦可レ鑑、戒、○余得ニ性悍者一、惟務瘦レ之累、日不レ放輒生レ躁、
渴老、師言、悍、鷹雖、勿ニ多飼、令、一肥瘦、鷹必、須、二略、々、頻
飼ニ庶免、生、レ病云、○懸レ鈴、時令、ニレ人臂以懸ニレ之、須、レ勿ニ
臥、縛、一其翔、不、レ過、二五、六、度、一則不レ驚、動、(二十六オ)
聞、見、常、談、

鷹上則圓、大下則尖、殺如レ菁、根者、良、柱圓、厚、端長者
壽、○猪、柱薄且小者短、壽不、才、○小者足、粗、大脛長者良、大者
足清、勁脛短、者佳皆貴、二瘦、硬無、一肉鱗、甲、龜而怒、起者良、最
忌、二軟、細而伏、一、或云、小、者脛長、則無、力、大者脛短、則手鈍、
○指如、レ十、字爪短而直、者佳、指同、(二十六ウ) 川字、二爪曲、如、レ鉤、
者下也、○劔、翻、幹、勁、葉、薄、尖、如、二銛、刀、一末、端、直、挺、不、二内、
曲、一者快、○方云、翻、短、飛、急、然、翻、短、則無、二遠、飛、之才、一、○大者、翻、端、
尖、銳、小者、稍、廣、者佳、○頰、欲、レ圓、短、項、欲、二秀、長、一、○
目向前而深者良、若、向、レ腦、而、亞、者性、悍、○上、睫、廣、旋、毛、茂、者、

7 飼テ
8 凸

壽○側レ身而坐横蹋レ架者良○起ニ架、上ニ翔レ架、上回レ架、上₉
 ○而直、墜懸、翔₁₀○(二十七才)亦佳右皆高飛架、下起而架、
 下翔ノ者不レ佳○鷹肌惟於二曉、頭一定ニ其、肥、ノ瘦ニ○黄、水赤、
 水為レ上淡、黄淡、赤ノ為レ次白、水為レ下或云淡、黄才云又ノ有ニ
 黒、水者一亦一、種也○栢、子、點絲、ノ點蛭、點羅、親、點土、卵
 、點照、布、紋半、ノ照、布、紋土、卵、紋等名、號頗多而駿、ノ鴛
 不レ係ニ於是ニ云或云蛭、點壽絲、點ノ不、才亦非レ的、論也○海
 、青與レ鴟、鶻(二十七ウ)形、躰略同而鴟、鶻則尾短與レ劔、翻
 ノ齋海、青則尾稍長如レ鷹此其異也ノ且皆栢、子、點雖レ陳不レ改
 但陳則點ノ差、小○海、青有二甚小者二鶻、鶻亦有二ノ至大者一○
 北、人稱ニ海、青純、白者一曰ニ白、松、鶻一半、白者曰ニ蘆、花松
 、鶻一黄、紫ノ者曰ニ黄、松、鶻二或云ニ灰、松、鶻一青、黒者ノ曰ニ
 青、松、鶻二或云ニ玉、松、鶻一○海、青雖ニノ大、風逆、風一了無レ
 掀、箴直、逝、尤疾搏(二十八才)レ鳥不レ中則張レ翅緩、浮雖
 二甚遠二聞レ呼ノ即來此其奇也調、養肥、瘦與鷹一、ノ同但積、久始
 調不レ得レ欲、速也鶻、鶻ノ貴、瘦レ之肥則徑去不レ顧○大
 、抵海、ノ青鶻、鶻皆利ニ平、原大、澤ニ不レ宜ニ灌、茅ノ叢、薄ニ○
 鷹鶻臍下細、羽無レ點者不、ノ才○鷹、鶻身如レ圓、木左、右前、後
 視ノレ之如レ一者佳ノ(朱)道春子(二十八ウ)

執筆者紹介

高野 弘子 長野県立大学グローバルマネジメント学部 元非常勤講師

高梨 良夫 長野県立大学グローバルマネジメント学部 特命教授

Jean-Pierre Joseph Richard

長野県立大学グローバルマネジメント学部 講師

宮下 清 長野県立大学グローバルマネジメント学部 教授

二本松 泰子 長野県立大学グローバルマネジメント学部 准教授

グローバルマネジメント 第5号

印刷 2021年7月30日

発行 2021年7月30日

編集代表者 森本 博行

発行所 長野県立大学

〒380-0803 長野県長野市三輪8丁目49番7号

TEL 026-217-2240 (代表)

FAX 026-235-0026

E-mail daigaku@u-nagano.ac.jp

印刷所 カシヨ株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田1-27-9



2021.7
VOL.5

The Global Management of Nagano

[Articles]

Laura Ingalls Wilder in the Progressive Era	TAKANO Hiroko	1
The Influence of Swedenborg’s doctrine of “Correspondence” on R. W. Emerson and Daisetsu Suzuki	TAKANASHI Yoshio	19
A Comparison of the Online Version and Paper-based Version of TOEIC L&R.....	Jean-Pierre Joseph RICHARD	37
Regional Universities' Approach to Developing Local Human Resources -A Survey of Pioneering Universities in Regional Development and Companies in the Nagano City Area	MIYASHITA Kiyoshi	58

[Document]

“Shin-Zou-Yoh-Kotsu-Hoh”Owned by Cabinet Library in National Archives of Japan (306-307) Introduction of the Whole Text	NIHONMATSU Yasuko	78
---	-------------------	----

